

タマミツネ in このすば

アルタイル 白野威

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

モンハンのタマミツネに転生した人間がこのすばの世界で生きていく物語です。

作者は初心者です。暖かい目で見守ってくださいとありがたいです。

また、ネタがたくさん散りばめられていたり、キャラ崩壊があります。

# 目次

1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	1 話 + 2 話
104	94	84	75	65	49	39	30	21	12	7	1

2 5 話	2 4 話	2 3 話	2 2 話	2 1 話	2 0 話	1 9 話	1 8 話	1 7 話	1 6 話	1 5 話	1 4 話
225	214	203	194	183	176	168	158	150	137	128	118



## 1話＋2話

皆さんは転生というものを知っているだろうか。

よくある神様転生や死んだと思っていたら赤ん坊になったりしている奴だ。

私はこれを体験したのだろう、気づいたらちっちゃい体になっていたのだ。しばらくの間固まってしまった。

わけのわからないまま生活していたらある時に気づいた、これタママミツネじゃね？と。

気付いた後は泡をどう使うべきかとかどうやったら食事をおいしくできるかななどを考えていた。

そんなことを考えながら成長していたら、そこそこの強さにはなれた。

なぜこんな事を考えているかという現実逃避しているからである。

今私の視線の先にいるのは、神と呼ばれるモンスター、ミラルートツがいるからだ。

溪流にミラルートツがいるってどうなんだよ、私はまだ死にたくはないぞ。いや案外私のような一般童には目もくれないかもしれない。あっこつち向いた。

がっつり見られてますね、はい。やめろオ私はまだ死にたくないぞオ。なんか雷が走ってる門みたいなの作ってるし。

あっファンゴが吸い込まれていった。吸い込まれたらどうなるんだ？丸焦げか？丸焦げなのか!?

うわっ 吸い込まれはじめた、私みたいなのを吸い込んで何にもないぞオ!

あっ泡で足が滑るう。もう一メートルくらいしかない。ああ良い童生だった……。

知らない青空だ。どうやら死んではないみたいだ。

周りは……草原か?どこかにとぼされたのか?

周りの草原は全く知らないし、私がいた世界にもこんなところはなかったはずだが……?

なんかデカイカエルもいるし、あれか?異世界転移というやつか?異世界転生から異世界転移とかふざけてるな。ルーツもなぜこんなことをしたのか。

まあそれは置いといて溪流に近い環境はどこかにないだろうか、とりあえず水場が欲しい。

カエルがいるということは近くに池かなんかがあるはずだ、なかったら詰むな。

ここ等一帯で一番高いところはつと。あそこだな、結構遠いがまあいいか。

それにしてもあのデカイカエルは何だったのか。新しいモンスターか？それにしても弱そうだったか。

採れる素材は何になるんだろうな、肉や舌か？まあなんにせよ戦ってみなければわからないか。

着いたか。周りはずと、あれは都市か？ハンターみたいなのがいたら嫌だな。ほかにほぼほぼ何もないな。

まあ望んでいた水場もあるしいいか。イビルジョーみたいなバケモノがいなくても限らないし、慎重に行くか。

あそこの川は森から流れてきているな、あそこを目指そう。命大事にだ。

歩き続けて（途中泡で滑ったりしながら）川に到着した。川はどうやら森の奥から流れてきているみたいだ。

さて魚はいるかな。おおいたいた、鮭のような魚からサシミウオみたいな魚までいる。

問題の味はどうなんだろう……うん、普通においしい。だがなんか変な顔した魚、てめーはだめだ。鱗の食感がなんかアルミみたいだし、何より味がまずい。

まあそれは置いておいて、ちよつと深いところがあるからそこで水浴びをしよう。

タマミツネになった私にとつて水浴びは、風呂のようなものだ。

ああ気持ちいい。やっぱり風呂はよいものだ……。なんか草原の方から叫び声が聞こえる。

風呂に入っている時に騒がれたらイラつかない？私はイラつく。

というわけでちよつと見に行こう。川にそつてな

うん、なんか仲間をカエルに食われたのか知らないけどカエルに向かって剣を持ちながら突撃する人がいる。

ハンターか？ハンターにしては装備があれだしなあ。というかあの人ジャージ着てない？

おおカエルの頭を砕いた。なかなか力があるのかな？なんか引きこもりぼついで。とりあえずあのカエルは弱いんだな。簡単に倒されたし。

近くで爆発でもおこされたら、水流プレスブツパしたあとシャボンランチャーするけど。

そういえば私より先に吸い込まれたファンゴはどうなったのだろうか。カエルに食



われたか？ 遙か上空から落ちてても傷一つつかないハンターをぶっ飛ばす奴らだ、そう簡単  
単に死にはしないだろう。

おお噂をすればなんとやらだ、カエルを倒した人に突進している。

ん？ あれはカエルに食われてた人か、なんか腕光ってるしフアングを殴ろうとしてい  
る。

あつカエルの人もろとも吹っ飛ばされた。なんで食われた人はピンピンしてんだ。

カエルの人を担いで逃げてった。フアングより早くないか、あれ。

フアングが都市に行ってもいいがここで仕留めておくか。

食らえ！ 水流プレスツ！ 相手は死ぬツ！

うん頭を貫通したな。まあそうなるな。

さて、川に戻るか。川をたどっていけば良くて湖あたりを見つけられるだろう。

歩くの面倒だし、泡で滑っていくか。

泡で滑ってきたからか、さつきよりも早くこれたな。どうでもいいことは置いておい  
て、森の奥へ行こう。

結構奥まで来たが特に何にもないな。しょうがない、草原と森の境を縄張りにしてそ  
こでしばらく生活しよう。

だがここまで来たのに何もしないで帰るのは嫌だし、探索してから帰るか。目印はどうするべきか、爪で傷をつけていくか？泡は消えてしまおうし……。やはり爪で木に傷をつけていこう。

木に傷をつけながら探索していたら道に出た。なんかすごい場所に城がある。

よくある三角みたいになつてるがけっぽいところだ。

よくあんな場所に建てたな。ボロボロだし廃城か？

なかなかスゴイモノを見れたし今日は戻ろう。

帰り道はこつちか、滑って帰ろう。

無事戻ってこれたし寝床を作ろう。木々をなぎ倒してスペースをとって葉っぱとかを敷き詰めればいいのか。

簡単にできた。これで寝れる。ミラルーツのせいでこんなところに来てしまったかな。まったく何がしたかったんだか。

疲れてきたしもう寝よう。おやすみ……。

## 3話

おはよう。さて、今日はこの世界をいろいろ調べたいと思う。

今分かつていることはこちら一帯に草原と森があり、草原の奥に都市があることだ。

昨日目撃した人達を基準にするとハンターのような人間を超越したなにかはいないだろう。

いないよね？いたら泣くぞ私。

それは置いておいて、草原の方で身を潜めながら観察か何かをしてみよう。

昨日の人達がいればいいのだが……。

いた。昨日の人たちに加え、魔法使いのような恰好をした少女がいる。

……何かを言っているようだが聞こえない。気づかれないように近づくか。

音をたてないようにそーつとそーつと……。

良しっだんだん聞こえるようになってきた。何々？……女神？アークブリースト？

うーん……。聞き終える前に昨日の人達の食われてた方がカエルに突っ込んでいった。

大丈夫かあれ、大丈夫じゃないな、また食われたし。

魔法使いの方はなんか杖を掲げて魔法を発動させようとしている。

おお、杖の先が光った。結構眩しいな。どんな魔法なんだ？とても気になる。

『エキスプロージョン』ツ！』

ドゴオオオオオオオオオオツツ！！

……… なんだあの威力。カエルが消し飛んだうえにクレーターまでできたぞ。

あんなの食らったら良くて重症……最悪で即死だな。

あの青い人はどうなった？カエルに食われてたよな。

うわ…… 黒焦げになっただけで生きてやがる。私たちよりモンスターじゃないか？  
あの人。

ジャージの人は…… うん、純粹にすごいって顔してるな。

魔法使いは……… なんで倒れてんの？なんで満足そうな顔してんの？

青い人は…… 起き上がってこっちを見ている……… あれ？ばれた？うわっこっち向  
かってきた。

なんか叫んでる！やめろお！こつちへくるなあああ！

「そのあんたあ！あんたよあんた！狐っぽい紫色のあんた！」

えええ…？なんでよびかけてくんの…？ジャージの人も魔法使い担ぎながらこつち来てるし！

普通モンスターに近づくとか考えないだろう!?何考えてんだコイツ!?

「おいアクアア！何考えてんだあ!?なんでそんな強そうな奴に向かつてくんだよ!」

ジャージの人、それが普通の考えだ。この水色頭おかしいんじゃないかろうか。

というかコイツアクアっていうのか。確かになんか水をイメージさせる色してるが。

おっと、そんなこと考えてる場合じゃなかった！戦わざるをえないか!?面倒くさい！

よし！逃げようツ！それしかない！

「ハアツハアツ…逃げようとしなごう！止まって、止まって！」

うげつ。追いつかれてしまった。潰すか？潰すしかないか？

ああつなぜこんな目に合うんだつ！私が何をしたというのか。

ファンゴか？ファンゴを倒したのがだめだったのか？

「ふう…うん…やっぱりあなた…同僚に頼んだ私への助っ人ね！」

ナニイツテンダコイツ。私が助っ人？ありえん、そんなこと託された覚えはないぞ！

というかコイツの同僚ってなんだ？そんな存在に合った覚えもない。

「お： おいアクア助っ人てなんだ？いつ頼んだ？それらしい行動は見えないぞ？」

「ふふん。それはね。カズマに連れ去られる前にメッセージをばら撒いておいたのよ！」

「おい。連れ去ったとか、人聞きの悪いこと言うな」

……… 何が何だかさっぱりわからない。

つまりあれか？そのばら撒いたメッセージとやらを同僚が拾い、助っ人に私が選ばれたと？

何故私を選ばれたし、私は何の変哲もないタマミツネだぞ？人の知能がある以外は。

「ふーん。あなたタマミツネっていうのね。変な生物ね」

変とかいうなし……。あれ？なぜこいつは私の種族名が分かった？心が読めるというのか？

なににせよあまり関わりたくはないな。

「タマミツネ？なんかモンハンに出てきそうだな」

「カズマ。モンハンとはなんですか？」

「ああ。何ていうか……。こいつみたいなモンスター達を倒していく物語？みたいなもん」

「何ですかそれは?!?かつこいいじゃないですか！」

マテ、イマコイツラハナントイツタ？モンハン？そういつたのか？

モンハンのことは知ってるくせに私のことは知らない？何故だ？

パッケージモンスターだから名前くらいは知っていてもおかしくはないはずだ。

そもそもなぜモンハンを知っている？この世界の人間じゃないのか？

うむ…こんがらがってきた。

「なんでモンハンを知ってるか。聞いてるわよカズマ」

「なんで俺に振るんだよ。お前が言えればいいだろ。たつくしようがねえな。何で知っているかだっけ？俺の故郷にあるからだよ」

故郷にある？ということとはコイツ日本人か。カズマ…： そういえば名前も日本人ぽいな。

カズマが日本人だということは分かった。だが…： アクアはなんだ？

髪の色からして日本人ではないし、同僚が助っ人を送れる理由にもならない。

本当に神だともいえるのか？アクアは。

「そうよ！私こそはアクシズ教団の崇める神、女神アクアよ！」

…：… もうツツコム気力すら湧かない。本当にどうしてこうなった。

ミラルーツに異世界に送られるわ、自称女神に合うわ、ここ最近は不幸だ。

## 4話

ここ最近は不幸だ。なぜこうなる？そしてアクアその…なんだ、その本当に神なのか？中二病ならよそでやってくれるとありがたい。

人に見つかった以上、追いつけ回されたり、宝玉寄越せ！とか言いながら襲い掛かってくるやつがいけないとは限らない。

ハンターはいないとわかってはいるが…あれによつて刻み込まれた恐怖は、たとえ神であろうと拭い去ることはできない。

カズマ少年。ハンターに似た生命体はあの都市にいるか？

「なんかタマちゃん、アクセルにハンターに似たなにかはいるか？つて聞いてるわよ」  
「タマちゃん？なにその呼び方。まあいいや。それでハンターに似たなにかだっけ？いるわけないだろあんな人間やめた究極生命体。いたら魔王軍は滅んでるわ」

よかった。本当に良かった。これで一番の危機は去ったッ！カズマ少年、ありがとう、本当にありがとう。

だがタマちゃんはやめてくれ。それだけは本当に嫌だ。どれくらいか嫌かということこやし玉を十個口の中にぶつけられるくらい嫌だ。



「なんでよー！いいじゃないタマちゃん！いい名前でしょ？カズマ」

「嫌だ。俺だったら断固拒否するぞ」

「私もその名前だけは嫌です。なんですかその名前、センスのかけらもないですよ」

「めぐみんまでええええ！」

「さて、その駄女神は放っておいて、タマミツネ。これからどうするんだ？」

「これからどうするか？……何も考えていないな、そういえば、」

「とりあえず昨日は川で過ごしたが、これからもあそこで過ごすと思うとすぐく退屈だ。」

「溪流にはいろいろな生物がいたし、強者も存在した。」

「だがここにはいない。死の危険性がないといえはそうなるが、寿命まで過ごすとなくどれ程退屈なのだろうか。」

「本当にどうしようか……。ん？なんだこれ？手紙？なぜこんなところに？」

「ん？どこみてるんだ？なんかあるのか？」

「手紙があると言いたいが、生憎この口は人の言葉を話せない。ジェスチャーで示すか？」

「だがそれで分かってくれるか？ううむ……。どうするべきか。」

「おっ？なんだそれ、手紙？」

おお気付いてくれたか。必要なかったな、ジェスチャー。

「何々?… タマミツネ君へ? おまえ宛だぞ、これ」

なに? 私宛だと? だれが書いたんだ? 読んでくれないか?

「ああ。おまえ読めないか。読もうか?」

ああ。読んでくれるとありがたい。首を縦に振ってお願いする。

「わかった。えーと? タマミツネ君へ。突然送っちゃつてごめんね? 面白そうなのが君  
しかなかったんだ。お詫びとして神をおど… げふん、交渉して手に入れた大きさを  
変えられる、神器? とやらをこの手紙に同封しておいたよ。異世界ライフを楽しんで  
ね! b y ミラルーツ」

… あの野郎もし今度会ったら全身泡まみれにしたうえでハンター押し付けてや  
る。

… ふう… まあ大きさを換えられる神器? とやらを送ってくれたことには感謝す  
る。

だがそれ以外は許さん。絶対にだ!

「… すごいのに送られてきたんだな… おまえ…」

「ええとカズマ? みらるーつとは何ですか?」

「モンスターの祖。神と呼ばれる存在だな」

「ほえー」

「ミラルーツ？そんな神私はしらないわよ？」

そんなことはどうでもいい。神器とやらは何処だ？

「これだな。．．． 宝玉みたいだな。ほらよ」

ありがとう。どう使うんだ？ん？光って。．．．？

あつ 私に取り込まれていった。これで使えるようになったのか？

泡で試してみよう。シャボンツ！

「おお！泡が出た！それがお前の能力なのか」

「泡を使うのねあなた。神秘的な見た目といい泡といい。．．． ねえ、あなたアクシズ教団の

マスコットにならない？」

「泡。．．． ですか。あんまり強そうではありませんね」

なにか各々で言っているが無視だ無視。うーん、こうすればいいのか？

これをこうして。．．． こうだツ！。．．． 大きくなつたな。これは使えそうだ。

「なあ。それ、おまえ自身にはつかえないのか？使えたならいろいろできると思うんだ

よ」

ふむ。試してみよう。キイエエエエエエエ！！

お小さくなれた。カズマ少年の肩に乗れるくらいの大きさだ。体は小さくなつた

ものの身体能力や視力などは低下してはいないようだ。なかなか使えるな。

「それくらいの大きさなら俺たちと来ることもできるんじゃないか？ 必要になったら大きくなる感じで。どうだ？」

「いいアイデアじゃない！カズマ！一緒に行きましょう！」

「小動物一匹増えたところでみんな気にしませんしね」

ふむ。それはなかなかいい案ではないだろうか。私は暇を潰せる。

カズマ少年はそこそこの戦力を手に入れる。win-winの関係だ。

メリットはあつてもデメリットはないのではなからうか。

うん。決まりだ、よろしく頼むぞカズマ少年。

「よっしゃあー！」

「よくやったわ。カズマ」

「よろしく願いますよ、タマミツネ」

うむ。ところで今日のところはどうするんだ？私は君たちについていきたいが。

「そうだな。今日は収穫もあつたしアクセルへ戻ろう。それでいいか？アクア。めぐみん」

「ええかまわないわ」

「はい」

「決まりだ。アクセルに戻る。お前はついてくるんだよな？」

ああ。できればどこかに乗せてもらいたいな。

「私が運ぶわ！」

アクアが運んでくれるようだ。では遠慮なく頭に飛び乗らせてもらおう。

~~~~~

此処がアクセルか。なかなか発展しているな。

「途中でカエルを二匹仕留めれたからクエストは達成だな」

「タマミツネのブレスで真つ二つになってしまいましたけどね」

「ははっ。ついた着いたここが冒険者ギルドだ」

ふむ。ここがか。ハンターズギルドを私は思い浮かべていたがそれよりはちいさいか？

とりあえず入ろうじゃないか。

「ルナさーん。クエスト終わりましたー」

「はい、わかりまし…」

視線を感じる。その金髪巨乳の人からか。カズマ少年はルナと呼んでいたな。どれだけ見つめるのだろうか。既に十秒たっているぞ。

「おーい、ルナさーん？」

「ハッ！ ええとあの… アクアさん？ その… 頭にのせているのは何ですか？」

「この子？ この子はタマミツネよ。草原で拾ったの」

拾ったて。犬を拾ったみたいと言わないでほしい。私はどちらかという狐だ。

同じイヌ科だが。

「そんなことよりクエスト終わらせましたよ。五匹」

「あっはい… あの… カズマさん？ 三匹なんですが」

「ああ。タマミツネがやっちゃったんだよ。こう… ビーって感じで」

「そうですかあ… って信じられますかあ！ どうやったらあんな小さい体でジャイアントトードを仕留められますか！」

「そうはいってもなあ。本当のことだからなあ」

カズマ少年とルナ嬢が何か言っているがどうでもいいな。

この後さらに言い合いがあったがカット

「いやあ、何とかokもらえてよかったな」

「後半はカズマが反論させる暇もないまま喋ってませんでしたか？」

「気のせいだ、気のせい」

なにをしてるんだ。カズマ少年は。

「……………すまない、ちよつといいだろうか……………？」

なんだ？声の主はこの女性か？なんだろう。この女性なら例えスーパーノヴァを食らっても死なないと思えるのは。

横を見ればカズマ少年が絶句しているのが見える。

何やらまたひと悶着起きそうだ。

「あ、えーつと、何でしょうか？」

声の上擦っているな。緊張しているのか。

「うむ……………この募集は、あなたのパーティーの募集だろうか？もう人の募集はしていないのだろうか」

募集していたのか。このパーティー。

「あー、まだ募集はしますよ……………」

「ぜひ私を！ぜひ、このパーティーに！」

食いつきぶりが半端ではないな。

そこまで興奮するものがあるのか？

「そこまで入りたいんですか？あのおの：理由を教えてください」

「二つはその動物に興味があるからだな。二つ目はこのパーティーに入れば私の欲望をかなえられそうだからだ！」

私に興味がある？生物学者ではないよな。鎧をきているし。

欲望をみたせそう？面倒ごとじゃないといいな。

カズマ少年、私は眠くなってきたので寝るとする。

おやすみ。



## 5話

：．． おはよう。今、起きたのだが、なぜ私はアクアに抱き着かれていますか？

私を抱き枕にして大丈夫だっただろうか。無意識に泡液を分泌していなかったらうか。

濡れていないところを見るに大丈夫だったみたいだが。

ところで今はどれぐらいの時刻だろうか。夜か？

そもそも此処は何処だ？アクアが寝ているから安全だとはわかるが。

窓は．． ないな。カズマ少年は．． うむ．． 寝ているな。

足元は藁か？部屋ですらないのか？なぜこんなところで寝ているんだ。

「うう〜ん．． おはようアクア、タマミツネ」

おお、起きたかカズマ少年。ここはどこか教えてくれないか？

「ここが何処かって？馬小屋だよ。宿が取れない奴らはここで寝るんだ」

馬小屋？そんなところで寝ていたのか。それほどまでにゼニーがないのか．．．。

泡液でも瓶詰にして売るか？そこそこのゼニーにはなるだろう。

というかこの世界の通貨はなんだ？ゼニーか？円か？ユーロ？ドル？

それとも私の知らない通貨だろうか。

それを聞きたいが喋れないからな、私は。鳴き声をあげることしかできない。

「おい、なにエリスがないやつを見る目で見てるんだ。そこそこはあるからな」

おや、そんな目で見てしまっただろうか。ところでエリスとは通貨かなにか？

ここではエリスという通貨なのか？

「ん？何が気になるんだ？」

カズマ少年がさっき言ったエリスとやらだ。ところでアクアはいつ起きるんだ？

「エリス？この世界の通貨で女神さまの名前だ。アクアは俺が起こさない限り起きないぞ」

…… そういえばなぜ会話できるのだろうか。心がよめるのか？

そういう神器でも見つけたのだろうか。それともそういう能力を持っているのか？

「いや持つてないからな。ちよつと予測してみただけだ」

なに簡単にできるように言ってくれてるんだ？できるわけないだろう。

何気に優秀じゃないか？カズマ少年。

「なあに話してるの。かずま。たまみつね」

アクアが起きたようだ。起きないんじゃないやなかつたのか？

まあどうでもいいか。

「起きたか。ギルドに行くぞ」

「ええ〜〜めんどくさい」

「いいから行くぞ」

~~~~~

「なあ。スキルってどう習得できるんだ？」

スキル？そういうものもこの世界にはあるのか。

面白そうだな。私も使えたらいいが。

「スキル？それはカードに出てる、習得可能なスキルっていうところから取れますよ」

「そんなのないぞ」

「あれ？．．ああ。カズマは冒険者でしたね。冒険者は誰かにスキルを教えてもらわないと覚えられないんですよ。まず目でみて、使用方法を教えてもらおうとポイントを使つて習得できるのです」

「なるほど。ということはいろいろできるのか。アクア、何か俺が使えそうなスキルはないか？できればあまりポイント使わない奴で」

「しょうがないわねー。特別に教えてあげるわ。とっておきのやつをねー」

そういうえばそのスキル？とやらは一回しか見てないな。あの爆発がスキルだろうし。アクアはどんなスキルを持っているのだろうか。

「くくあら不思議！コップの水を吸い上げた種は……」

考えている間に見逃してしまつたようだ。どんなスキルだったのだろうか……。

おや、カズマ少年が怒鳴っている。お気に召さないスキルだったようだ。

「あつはつは！面白いね君！君がダクネスの入りたがっているパーティーの人？有用なスキルが欲しいんですよ？盗賊スキルなんてどう？」

誰だろう。まつたく聞き覚えのない声と名前だ。ダクネス？誰だそいつは。

昨日の女性か？だとしたら声の主は誰だ？

…… 銀髪の少女か。隣にいるのは昨日の女性だな。だとしたら彼女がダクネスか。

「盗賊スキルつてのはね。罠を解除したり敵を感知したり、そういうのがあるんだよ。持つてるだけでも徳があるスキルでいっばいだよ？かかるポイントも少ないしおすすめだよ？クリゾンビア一杯で教えてあげる」

「お願いします！すいませーん、こつちの人に冷えたクリムゾンビア一つ！」

私も見てみたいな。ついていくか。

くくく

そこそこ移動したな。ここでするのか？

「まずは自己紹介といこうか。あたしはクリス。盗賊だね。こつちのがダクネス。昨日ちよつと話したんでしょ？ダクネスはクルセイダーだから君に有用そうなスキルはないと思うよ」

「ウス！俺はカズマって言います。こいつはタマミツネです。クリスさん、よろしくお願いします！」

「へええー見たことない生き物だね。どこらへんで見つけたの？」

「ジャイアントトードがいる草原です」

「ふーん？そうなんだ。まあそれは置いておいて、まずは敵感知と潜伏をいつてみようか。罨解除とかは、こんな街中に罨なんてないからまた今度ね。じゃあ…ダクネス、ちよつと向こうに向いてて？」

「分かった」

言われた通り反対を向いたな。ここからどうするのか。

…樽に入っていたな…あれが潜伏なのか？なんというか…想像していたのと違うな。

ああ…頭に石を当てられて怒ったダクネスによつてクリス入りの樽が転がって

く……。

「さ、さて次はあたしの一押しスキル、窃盗をやってみようか。これは、対象の持ち物を何でも一つ奪い取るスキルで、しっかりと握っている武器だろうが、ポケットに隠しているエリスだろうが、何でも一つランダムで奪い取る。スキルの成功率はステータスの幸運値に依存するんだ。いろいろと使い勝手があるいいスキルだよ」

幸運に依存するのか。私には使えないから関係はないが。

「じゃあ、君に使ってみるね？行ってみよう！『ステイール』ッ！」

「あっ！俺のサイフ！」

サイフを取られるとは運がないな、カズマ少年。まあドンマイと言っておこう。

「ねえ、このサイフを使って勝負しようよ、窃盗スキルを使って。あたしのサイフがとられるか、君がサイフを取り返すか。もしくは別の高価なものを奪うか。どう？勝負しなっ？」

おや？何やら勝負をするようだ。別にデメリットはないだろう。受ければいいんじゃないか。

「……よし。その勝負乗った！何盗られても泣くなよ？」

「いいね君！ノリのいいひとは好きだよ！さあ、何が盗れるかな？サイフか、四十万エリ



やっていることは、完全に犯罪である。

「公の場でいきなりぱんつ脱がされたって、いつまでもめそめそしてちゃだめだね！ダクネス。あたし、悪いけど臨時で稼ぎのいいダンジョン探索に参加してくるよ！有り金うしなっっちゃったしね」

ものすごい勢いでカズマ少年に向けられる女性陣の視線が冷たくなっていく。

これはもう手遅れじゃないだろうか。とりあえず私は避難させてもらおう。

テーブルに乗つてと……あ。誰かに持ち上げられた。

「あの……昨日から思ってたんですが、アクアさんたちが連れているこの生き物。なんですか？」

カズマ少年に集まっていた視線がこちらに向けられる。それよりも私を持ち上げているのは誰だ？

……知らない女性だ。逃げたりしないから下ろしてはもらえないだろうか。足が浮いて落ち着かない。

「確かにそんな形の生き物、見たことも聞いたこともないですね」

それはどうでもいいから下ろすか、なんかしてくれ。視線と相まってさらに落ち着かない。

「タマミツネという種族だそうですよ。カズマの故郷にある物語に出てくるモンスター



らしいです」

「タマミツネ？聞いたこともないな。なあみんな」

「ああ（ええ）」

「そんなことはどうで『緊急クエスト！緊急クエスト！街にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！繰り返します。街にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！』…」

緊急クエスト？古龍でも攻めてきたのか？なににせよ、何かあることは確かだな。

ここ最近騒がしい。静かだが豊かな竜生を送るつもりだったのにな…。

一面倒くさい、非常に面倒くさいが頑張るとするか。

## 6話

本当に何なのだろう、ラオおじいちゃんでも来たのか？

もしそうなら私は逃げるぞ。あんなのに私のようなザコが勝てる訳わけがない。

で、何が起こった？

「おい。何が起きたんだ？緊急クエストってなんだ？モンスターでも来たのか？」

「ん、たぶんキャベツの収穫だろう。そろそろ収穫の時期だからな」

キャベツ：ツ？キャベツ？C a b b a g e？あの緑の？みじん切りにしたくなる、あの野菜？

いやいやそんなわけがない。そういう名前のモンスターなのだろう。

もし本当にキャベツなら地面ごと根こそぎ収穫してやるわ。

「キャベツ？あの緑で丸いやつの？」

「そう、あの緑で丸いやつの」

……なん……だと……？そんなことでぎやあぎやあ騒いでいるのか？

ええ……やる気が削げた。私の主食は魚だからな。食べることもない。面倒くさい。

丸投げしてはだめだろうか。

「……このギルドの連中は、冒険者に農家の手伝いをさせるのか？」

「あー……。カズマは知らなかったわね……。この世界のキャベツは……」

「皆さん、突然のお呼び出ししません！気づいてる方もいるとは思いますが、キャベツです！キャベツ収穫の時期がやってきました！今年は出来が良く、一玉の収穫につき一万エリスです！では皆さん、できるだけ多く捕まえて、ここに納めてください！くれぐれもキャベツに逆襲されて怪我をしないようにしてください！なお、人数が人数、額が額なので、報酬は後日まとめとなります！」

怪我：？キャベツに逆襲されて：？動くともいうのか、この世界のc a b b

a g e は？

「飛ぶのよ。この世界のキャベツは。食われてたまるかというように。海を越え大陸を渡り、最後には秘境でひっそりと息を引き取るそうよ。それなら私たちが捕まえておいしく食べてあげようってことよ」

「もうかえつてもいいかな、おれ」

気持ちにはわかるが帰してくれる雰囲気ではないぞ。皆やる気あふれている。

「ここで帰るなどと言ったらすでに冷たい視線がさらにひどいことになる。」

……  
頑張るか……。

~~~~~

フハハハハ！どうしたキャベツども、それで本気か？

そんな力で私の泡から逃れられるとでも思っているのか！

ほーれほれほれ。さらに泡を追加してくれるツ！

食らえツ！シャボン：：ランチャー！パパウ、パウパウ。

「もうやめてやれよ、見てるこつちがかわいそうだ。あとなんで元の大きさに戻った。言葉」

断る！なぜこんなストレス発散になることをやめなければいけないのか！

戻った理由は泡を飛ばすのに大きい方が都合がいいからだ。

「それはいいけど赤い泡や、緑の泡飛ばすのやめてくれよ！当たったやつが急に力強くなった、回復したりするんだから！」

そうはいっても自分の意思でその泡を飛ばしてないから無理だ。あきらめろ。

「アアアアアアアアアア どうしてこうなるんだ！唯一の常識人？が消えた！」

ヒヤッハー！

~~~~~

「カ、カズマ、いいではないですか。たくさん稼げたんですから。あつ来ましたよ、キャベツ炒めです」

「なぜたかがキャベツの野菜炒めがこんなにうまいんだ。納得いかんぞ、俺は」

ふう……… ついはつちやけてしまった。普段はああではないのだが……。

……やはりストレスが溜まっていたらしい。全部ミラルーツのせいだ。そうに違いない。

「それにしてもタママミツネ、あなた大活躍だったわね！さすが私の神獣だわ！」

誰がいつ神獣になった、誰が。

ところでダクネスはあの時何していたのだろうか。

「うむ。すごかったな。私は何にもできなかつたが。それにしてもあの泡はとても気持ち………」

……きもち？いまなんと言いかけたのだろうか。

「私、出番すらなかつたんですが」

「その点、カズマは回収に回ってた分活躍したわね！私の名においてあなたに「キャベツ

「回収業者」の称号を授けてあげるわ」

「やかましいわ！そんな称号いるわけねえだろ！ひっぱたくぞ！」

「話を変えてしまうのだがいいだろうか。私の名前はダクネスあなたたちのパーティーに入ることを希望するものだ。職業はクルセイダー。盾にしかねないがどうだろうか」

「まあ、いいんじゃないか？壁役がいなかったし」

「そうね、いんじゃないかしら」

「私も賛成です」

「じゃあ、これからよろしく頼む。…ところで先ほどの泡を私にぶつけてはくれないだろうか」

えっ… 何言ってるの、この人。

「え… ええと、もう一回いつてくれないか？なんて言ったか理解できなかった」

「キャベツにぶつけていた泡をぶつけてはくれないか…と」

「クツツが！なんでおれの周りには変なのしかないんだ！」

おい、私をこいつらと一緒にするな。先ほどははっちゃけただけだ。

いつもはあんなんじゃない。

「それで…ぶつけてくれないか？とてもヌルヌルで…」

だめだこいつ。ただDMなだけか？それとも頭がおかしいのか？  
できればちかづきたくない。カズマ少年の肩に避難してもらおう。

「おお．．？タマミツネ、俺の味方はお前だけだよ」

先ほど私をあいつらと一緒にしていなかっただろうか。

まあいいが、これからどうするんだ？

「とりあえず、俺の装備を整えようと思う」

装備？．．． ああ。そういえばジャージのままだったな。

お金が無くなるうとも私の泡液を売ればいいしな。

「じゃあ、明日俺はタマミツネと行ってくる」

いつの間にか、一緒に行くことになっているがまあいいか。

~~~~~

次の日

「と、いうわけで揃えてきた」

特に何もなかったな。しいて言うならカズマ少年の前を黒猫が横切ったくらいしか。

「装備もそろえたし、クエストにいかないか？」

「ふむ。それならアクアのレベル上げができるクエストがいいな」

「おつ。これなんていいんじゃないか？」

「そうだな。これでいいだろう」

「何々々？何するの々々？」

「爆裂魔法は撃てますか？」

「爆裂魔法は無理だな、やるのはアンデットの浄化だ」

~~~~~

時刻は夕方。

いるのは丘の上の共同墓地。

ここにアンデットが湧くらしい。

現在はキャンプを作り、夜を待っている。

カズマ少年が水を出す魔法を覚えたおかげで定期的に水に浸かれる。

極楽 極楽。ところでこの桶は何処から持ってきたのだろうか。

「すつごく気持ちよさそうだな。それに泡もたつてるし」

シャンプーにでもしてみるか？よく泡だつだろう。

抜けた毛を使ったブラシかなにか付きで売り出したらどのくらい売れるだろうな。



「おおっ……。寒くなってきたな。『ティンダー』」

ふああ……。眠くなってきた。深夜になったら起こしてくれ。おやすみ。

~~~~~

……。 んう。ゆすられた。深夜になったということだろうか。

「おう。起きろ、そろそろ行くぞ」

「ねえ、なにか大きなアンデットが出そうな予感がピンピンするんだけど」

何やら不吉なことを言っている。

「いいですね。私の爆裂魔法の餌食にしてあげましょう」

「そ……。そんなアンデッドならばさぞかし攻撃も気持ちいいだろうな」

「もうヤダこのパーティー。俺とタマミツネ以外変なのしかない」

……。 このパーティー。イビルジョーとあっても撤退しなさそうだな。

おや？墓地に人影が見える。何をしているのだろう。

魔法陣が足元にあるように見えるが。

カズマ少年たちは気がついていないのか？

いないっぼいな。私の視力だから気が付いたのか？

「? : : どうした? そんな先を見つめて。まさかいたのか?」

「アンデッド? 私の出番ね! : : : つていないじゃない」

「なにかありましたか?」

「いやあ? 特になんもないよ」

: : 見えないのか。面倒ごとではないといひんだがな。

最近、特にカズマ少年についていったあたりから面倒ごとが多いからな。

今回も、どうせ面倒ごとだろう。

できる限り頑張るか。

## 7 話

本当にあの人影や、魔法陣が見えないのだろうか。

あれだけ大きい光を放っているのだから、嫌でも気づきそうなのだが。

私にしか見えないとでもいうのか？

「ん？うおつ。なんかでっかい光が見えるぞ！」

ここまでできて気付いたか。かなり近づいているぞ。はつきりと人が見えるくらいには。

「：．カズマ。あれは何でしょうか」

「俺だつて聞きたい。なあアクア何か知らないか？」

「あー！ー！ー！」

「おいつ、いきなり突つ込むなよ！」

アクアが人に向かって突つ込んでいく。あの人がアンデットだともいうのか？

それともクエストを横取りされたことを怒っているのか？

「リッチーがこのこのここんなところに現れるとは！浄化してあげるわっ！」

リッチー？金持ちかなんかだろうか。

「や、やめ、やめてえええええ！誰、誰なの！いきなり現れて、なんで私の魔法陣を壊そうとしているの！やめて！やめてくださいお願いします！」

「うっさいわよ、このアンデットが！どうせ怪しいことしてたんでしょ！死者をよみがえらせてアクセルを襲わせたりとか考えてたんでしょ！こんなもの壊してやるわ！」

金持ちはアンデッドなのか。悪い人には見えないが。

というかチンピラに絡まれてるようには見えん。

「やめてー！やめてー！この魔法陣は、いまだ成仏できていない魂たちを、天に還してあげるためのものなんです！ほ、ほら！たくさん魂たちが天に昇っていくでしょう！」

確かに昇っているな。私が入ったらどうなるのだろう、すごく興味が湧く。

とりあえず魔法陣を壊そうとしているアクアを拘束するか、それっ。

「ああっ、何すんのよタママミツネ！動きづらくなっちゃったじゃない！こんなもの、私をだせば……！あっ。ああああああ……ぼぐえー！」

……全身泡だらけで片足持ち上げれば滑ることはわかるだろうに。

滑って墓石に頭をぶつけてしまった。

「……とりあえず大丈夫か？アクアはリッチーっていつてたけどそれであつてるか？」

「だ、大丈夫です……。えっえっつと、助けていただきありがとうございます。おっしゃる通り、リッチーです。ウイズと申します」

「言っちゃああ悪いがここで何してたんだ？アクアが言つてたみたいになくセルを襲おうとしてるのか？」

「いついえ！そんなことは微塵も考えていません！私がしていたのは葬式すらしてもらえず、天に還ることができなかった魂たちを送り出すことです」

普通にいい人じゃないか。

「それはいいことなんだが、プリーストに任せておけばいいんじゃないか？」

「その… 街のプリーストの皆さんは… お金がない人は後回しにするので…」

「この街のプリーストは、お金がないやつらが埋葬されているこの共同墓地には寄り付きもしないのか？」

「はい…。そうです」

金がないのはわかるがそれはひど過ぎではなからうか。プリースト仕事しろ。

「そうか。それならせめてゾンビを起こすのをどうにかしてくれないか？俺たちがここに来た理由は、ゾンビを呼び起こすアンデッドを退治してくれてクエストを受けたからなんだが」

「あの…。ですね、呼び起こしているわけではなく、私の魔力に反応して勝手に起きちゃうんです。私としては埋葬されている方々が、迷わず天に還ってくればここに来る理由もなくなるんですが… どうしましょうか」

その場の全員の視線が、いつの間にか起きていたアクアに向けられる。

「……わかったわよ。やればいいんでしょ。やれば」

~~~~~

次の日

私は、ギルドの酒場で駄弁っている、カズマ少年の頭の上にいた。

なんでも少し遠くの丘にある古城を、魔王軍が乗っ取ったらしい。

それは私がこの世界に来て初日に見た、あの廃城だろうか。

「というか魔王軍なんていたのか。そういえばカズマ少年がそういう話をしていた気もする。」

「魔王軍幹部ねえ、物騒な話だけど、こんな初心者の方街にいる俺達には、縁のない話だな」

「ああ、違えねえ。なんにせよ、廃城には近づかない方がいい。なんでこんなところに幹部様がやってきたのかわからないが、幹部は強者ぞろい。俺たちじゃあつた瞬間殺されるようなバケモノが住んでるのは間違いない。あそこ近くのクエストは、しばらく避けた方が無難だな」

情報ありがとう。名も知らない冒険者。お札にこれをやろう。泡液の瓶詰だ。

「あんだそれ？飲み物か？」

「それを風呂で使えばすぐに汚れが落ちて、なおかついい匂いが付くぞ」

「へえ。まああんがとよ」

さよならだ。気に入ったなら、千エリスくらいで売ってやろう。

「…どうした？俺をそんな目で見て？」

「べつつにー？カズマとタマミツネが別のパーティーに入ったりしないか心配なんてしてないし」

「…情報収集は基本だろ？」

「その割には楽しそうでしたよね。楽しそうでしたよねえーカズマ？」

「この新感覚はなんだ？これが寝取られとかいうやつか…？」

ダクネスは何処でそんな言葉を知った？

「そんなことよりお前らに聞きたいことがあるんだよ。次はどんなスキルを覚えようかかと思つてな。俺が穴を埋めていく感じでいききたいんだ」

「別にいいんじゃないか？壁は私が務まるし、攻撃はめぐみん、回復はアクア。お前は指示か何か出していればいいだろう」

私はまあであればここら一帯のモンスターは楽に狩れるだろうし。

見ているだけの方がいいか。強敵が出たときのみ戦いに参加しよう。

~~~~~

また次の日

キャベツの報酬が出たらしい。私はカズマ少年と協力していたため、私が捕まえた分はカズマ少年の分になる。

私が金なんぞをもらっても使い道はないからな。魚を買うくらいしか。

「カズマ、こいつを見てくれ。どう思う?」

「すぐく…成金です。」

「少しは褒めてくれたっていいじゃないか。私だって褒めてもらいたい時もあるんだぞ」

「今はお前よりひどいのがいるからな。かまってやれる余裕はない。」

「ハア…ハア…。たまらない、たまらないです!この色!この艶!ハア…ハア…」

ついに狂ってしまったか。もともと残念な頭が、さらにだめになってしまった。

「なあんでよおおおお!?何でなのよ!」

アクアがルナ嬢胸ぐらをつかんでいる。何とは言わないがこぼれそうだ、何とは言わないが。



だが興奮なんてものはしない。誰が虫と虫の交尾をエロいと思うだろうか。私にとつてはそれぐらいしにしか感じられない。

「なんで五万ぼつちなの!? かなりの量捕まえたのよ!? 十や二十じゃないはずよ!」

「も、申し上げにくいのですが… アクアさんが捕まえてきたのが、ほとんどレタスで…」

「…なんでレタスが混じってんのよー!」

「私に言われましてもっ!」

どこまで運がないのだろうか。アクアは。

「カ、カズマさん? 今回の報酬はおいくらで?」

「三百万ちよい」

「「さんびやく!」」

私が捕らえ、カズマ少年が回収、それを繰り返したのだ。そこそこの額になると思っていたが三百を超えていたとは。

事前にすべて譲ると言ったから、あれはすべてカズマ少年のものだ。

私の食費やらなんやらを払う代わりに。

「カズマさん! いやっカズマ様! お金を貸してください。お願いします!」

「やだ。使い道は決めてるし、ほとんどタマミツネが稼いだものだからな、譲ってもらっ

たが」

「かじゆまさああああん！私、有り金、使い切っちゃったんですけど！十萬ちかいツケまであるんですけど！」

「知☆る☆か」

「そんなこと言わないで！ツケ払う分でもいいから！夜こそこそしてるの知ってるから、早くプライベートが欲しいのもわかるけど！お願いよお！」

「分かった！分かったから黙ろうか！」

「カズマっ！クエストです！早速クエストに行きましょう！」

私はここで待っててもいいだろうか……ダメか、そうか。

「掲示板の依頼を見てからにしよう……物の見事に高難度の依頼しかないな」  
別にクエスト行かなくても私の泡液を売ればいいと思うんだがなあ。

十萬はさすがに稼げないが。

「申し訳ございません。魔王軍幹部が近くに引越してきたため、弱いモンスターが隠れてしまい、仕事が激減しております。こればかりはどうしようもございません」  
うわあ……。タイミングがひどすぎる。かわいそうに。

~~~~~

最近カズマ少年と中二病（めぐみん）が何処かへ通い始めたようだ。

私といえばダクネスという。たまに泡を出してくれと言われること以外は不自由ない。

私と遊んでくれるし、私の主食が魚だということを知ったからか、魚を持ってきてくれる。

たまに高級魚っぽいのが混じっていたが、別に大丈夫だろう。

私に魚をくれるときは、すごい楽しそうだし。

「おお、よく食べるな。どこにそんな入るんだ？」

胃ですが？

「カズマ達は何処へ行ったのだろうな」

さあ？めぐみんは爆裂魔法をぶっぱなしに、カズマ少年は風俗にでも行ってるんじゃないか？

アクアは……知らん。どこかでバイトでもしているのだろう。

「まったく。何をしてるんだか」

退屈はしてないしいいんじゃないか。

『緊急！緊急！全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくだ

「さーい！」

「…… またか。退屈は嫌いだ、騒がしすぎるのも考え物だな。

「何があつたんだらうな」

またキャベツか何かだろう。大穴で魔王軍幹部とかけてみるか？

まあこんな駆け出しの街に来ることはないだらうが。

「さて、いくか、おまえも来るだらう？」

行かないや文句言われそうだしな。

いざ！ 正門へ！

## 8話

今度は何が来たのだろうか、キャベツ？ラオおじいちゃん？それともクシャル？もしくはアトラル・カ？

どれが来てもいいがキャベツ以外は対処できんぞ。

正門が見えてきた。カズマ少年もそこにいる。

さて、来たのは何だ？姿が見えないからラオおじいちゃんやアトラル・カではないな。  
：首がとれた騎士モドキ？何だろう。前世ではそんなのがいたような気もするが。

名前は何だったか、デユ、デユアル？思いだせないな。まあ騎士モドキでいいだろう。  
「：俺はつい先日、この近くの城に越してきた魔王軍幹部の者だが……」

あれが魔王軍幹部なのか。ハンターの方がよっぽど強いんじゃないか。

あんなハンマーの溜め食らったら一撃で昇天しそうな強さで魔王軍幹部か。

「ままま、毎日毎日毎日ッ!!おお、俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法撃ち込んでく頭のおかしい大馬鹿は、誰だあああああー!!」

……爆裂魔法？それを放てるのはめぐみんしか私は知らないが……。

「爆裂魔法？」

「爆裂魔法つかえる奴つつたら…」

「爆裂魔法って言ったら…」

めぐみんへ視線が集まっていくな。

隣の子視に視線移しよった…。

「ええっ!!あ、あたしっ!!なんであたしが見られてんのっ!!爆裂魔法なんて使えないよっ!」

… かわいそうに。濡れ衣着せられて。

それはそうとなぜめぐみんとカズマ少年が冷や汗を垂らしている?

… あいつらか。撃ち込んでいたのは。

めぐみんがいやそうな顔しながら前へ出る。嫌そうな顔すんなや、めぐみんが招いたことだろうに。

「お前が…!お前が、毎日毎日俺の城に爆裂魔法ぶち込んでいく大馬鹿者か!俺が魔王軍幹部だと知っていて喧嘩を売っているなら、正々堂々城に攻め込んで来い!その気がないなら、街で震えているがいい!なぜこんな陰湿な嫌がらせをする!!この街に低レベルの冒険者しかいない事は知っている!どうせザコしかいない街だと放置しておれば、調子に乗って毎日毎日ポンポンポン撃ち込みにきおって…っ!頭おかしいんじゃないのか、貴様っ!」

…… 大分ため込んでいたようだな。まあ毎日撃ち込まればそうなるか。  
苦勞人っぽそうだ。

…… 何をやってている？めぐみんは？

「我が名はめぐみん。アークウィザードにして、爆裂魔法を操るもの……！」

「…………… めぐみんってなんだ。バカにしてんのか？」

「ちっ、違わい！」

それはキレてもいい。完全にバカにしてるようにはか聞こえない。

「我は紅魔族のものにして、この街随一の魔法使い。我が爆裂魔法を放ち続けていたのは、魔王軍幹部のあなたをおびき出すための作戦なのです！こうしてまんまとこの街に、一人でてきたのが運の尽きです！」

随一の魔法使いとか、作戦とか。ツツコミどころが多すぎる。

「…………… おい、あいつあんな事言ってるぞ。毎日爆裂魔法撃たなきゃ死ぬとか駄々こねてたから、仕方なくあの城の近くに連れてってやったのに。いつの間にか作戦になってるし」

「…………… うむ、しかもさらつと、この街随一の魔法使いとか言い張っているな」

「しーっ！そこは黙つといてあげなさいよ！今日はまだ爆裂魔法使ってないし、後ろにたくさん冒険者が控えてるから強気なのよ！このまま見守るわよ！」

いつの間にか合流していたカズマ少年たちが突っ込んでくれた。

「というかそんなことしてたのか、カズマ少年。」

「……ほう、紅魔族か。なるほど、なるほど。そのいかれた名前は、別に俺をバカにしていた訳ではなかったのだな」

「おい、両親からもらった私の名に文句があるなら聞こうじゃないか」

文句しかない。何なんだその子供みたいなネーミングセンス。

「……フン、まあいい。俺はお前らザコにちよつかいかけにこの地に来たわけではない。この地には、ある調査に来たのだ。しばらくはあの城に滞在することになるだろうが、これからは爆裂魔法は使うな。いいな？」

「それは私に死ぬといっているも同然なのですが。紅魔族は日に一度、爆裂魔法を打たないと死ぬんです」

「ならば勝手に死ぬがいい、どうせ嘘だろうがな」

「だろうな。そんな種族があるはずない。」

「どうあつても、爆裂魔法を撃つのを止める気はないというか。弱者を刈り取る趣味はないが、これ以上あの城の近辺で迷惑行為をするなら、こちらにも考えがあるぞ？」

ヤッチマエー、モトキシノダンナー、ブットバセー、ブッコロセー。

「余裕ぶつてられるのも今のうちです！こちらには対アンデットのスペシャリストがい



るのですから！先生、お願いします！」

「しようがないわねー！魔王軍の幹部だか何だか知らないけど、あんたのせいでもなクエストが受けられないのよ！覚悟はいい!？」

おおめぐみんよ、他力本願とは情けない！

アクアもノリノリで行くんじゃない。

「ほう、アークプリーストか？俺は仮にも魔王軍幹部の一人！低レベルのアークプリーストに浄化されるほど落ちぶれてはいないし、アークプリースト対策はできているが、どうしてくれるようか。……ここはひとつ、紅魔族の娘を苦しませてやろう！」

「汝に死の宣告を！お前は一週間後に死ぬだろう!!」

ダクネスの身代わり！ダクネスは呪いを受けた！

「ちよ、おい、ダクネス!？」

「ダクネス、大丈夫か!？痛いところとかないか？」

「……ふむ、何ともないのだが」

不発か？

「その呪いは今は何ともない。だが一週間後に必ず死ぬ。そういう呪いなのだ、それは。紅魔族の娘よ、自分の行いを悔いるのだな。お前のせいですこのクルセイダーは死ぬ。素直に俺の言うことをおけばよかったのにな！」



「と、とにかく、爆裂魔法を撃つのはやめろ！そして紅魔族の娘よ！呪いを解いてほしくば俺の城へこい！俺のいる最上階まで来れたら呪いを解いてやろう！果たしてひよっこのお前にたどり着けるかな？クククククッ！クハハハハッ！」

消えた！消えたから私を下ろせ！いつまでつかんでいるんだ！

金の卵ぶっけんぞ！

くくく

「おい、どこへ行く気だ？何しようってんだ、めぐみん」

「ちよつと城へ行くだけですよ。ちやつちやと呪いを解かせてきます」

「俺も行くにきまつてるだろうが。お前ひとりじゃどうしようもねえだろ。そもそも俺もお前と行ってたんだから」

ええい、いつまでつかんでいる！下ろせつつてんだろうがあ！

ぐえっ！握力が強くなった。だと？

カズマ少年がなんか言ってるが聞こえん！

おいアクア助けてくれ、部位破壊されそうだ。

「『セイクリッド・ブレイクスペル』ッ」

「ふふん！どうよ！この私にかかればデュラハンの呪いの解除なんて楽勝よ！どう？どう？私だつて、たまにはプリーストっぽいでしよう？」

「……えっ」

~~~~~

あれから一週間がたった。

爪と背中が部位破壊されていて歩きづらいわ、背中痛いわで散々だった。

罰として一番恥ずかしい秘密をみんなの前で暴露させたがな！

「クエストよ！きつくてもいいから、クエストを請けましょう！」

どうした？いきなり。

「私がかまわないが：火力が足りないだろう」

ダクネスがちらちらカズマ少年とめぐみんを見ている。

「やりたくねえんだがなあー。しよーがねなー」

ほんとダルそうだな。怪我一つしていいのに。

何を請けるんだか。

「アホか！」

またやらかしたか。いい加減にしてほしい。

「これよ！これをやりましょう！」

「湖の浄化？お前浄化なんてできんのか」

「あたりまえでしょう？私が何を司るのか忘れたの？」

「宴会の神様だっけ？」

「違うわよ！」

どうでもいいので早くしてほしい。

~~~~~

湖の浄化をここでやるらしい。

私だったら絶対に住みたくないほど汚れている。

ほんとの浄化できるのか？

「…：ねえ。本当にやるの？」

「私、今から売られていく、捕まった希少なモンスターの気分なんですけど」

檻に入ってるからな。

運んだのは私なんだぞ。

アクア改めティーバッグ。

すでに二時間たったが何も無いな。

おかげで昼寝ができる。

平和だなあー。ワニのモンスターも出てないし。

「カズマー！なんか来た！ねえなんかいっぱい来たんだけど!？」

平和だあ。日光が心地よい。

「カズマー!？檻がなっちゃいけない音出してるんだけど!？メキツて、メキツて!」

頑張れという意味を込めて尻尾を左右にふる。

「タマミツネ!？それどういう意味!？」

ん?？ワニが数体こっち来てるな。

水流プレス! ついでにシャボンランチャー!

「ひい! 余波で檻が少し歪んだんだけど!？」

後は頑張れ!。

七時間きっかりで終わった。

今街の前まで来ているが、後ろのオーラがひどい。

まるで囚人を護送しているみたいだからやめてほしい。

ん？なんか来た。

「め、女神様ツ!?女神様じゃないですかっ！何をしていますか、そんなところで！」

この少年の仲間？と思しき少女二名が私を見ておびえているのだが、私はどうすればいいんだ？

「おい、私の仲間に来やすく触れるな。貴様、何者だ？知り合いにしては、アクアが反応していないが」

いかにも、自分は厄介ごとに巻き込まれたくはないのだけど仕方がない、といった感じで、ため息をつきながら首を振る。

こいつ潰してもいいだろうか、久々に苛立った。

「…おい、あれお前の知り合いなんだろ？女神様とか言ってたし。何とかしてくれよ」  
「…ああつ！女神！そう、そうよ、女神よ私は。それで？女神の私にこの状況をどうかして欲しいわけね？しよがないわね！」

やっど檻から出たか。負のオーラもまき散らしてないし。

「…あんだ誰？」

ええ……。

「何言ってるんですか女神様！僕です、御剣響夜ですよ！あなたに、魔剣グラムを頂いた！！」

「……？」

漫画の主人公みたいだな、こいつ。今これほど人型でないことを悔やんだことはない。もし人型であればコイツの股間に蹴りを入れたやっただのに。

「ああっ！いたわね、そんな人も！ごめんね、すっかり忘れてたわ。だって結構な数の人送ったし、忘れてもしようがないわよね！」

顔が引きつってるぞ、ええと乙るぎだったか？

「ええっと、お久しぶりですアクア様。あなたに選ばれた勇者として、日々頑張っていますよ。職業はソードマスター。レベルは37にまで上がりました……。ところでなぜここに？どうして檻に閉じ込められてたんですか？」

カズマ少年と私をちらちら見てくる。なんだ、そんなBC送りにされたいか、乙るぎ。カズマ少年が説明しているな。理解できるか？

「……バカな。ありえないそんな事！君は一体何考えてるんですか?!女神様をこの世界に引き込んで?!しかも、今回のクエストではオりに閉じ込めて湖につけた!!」

「ちよちよ、ちよっと?!いや別に私としては結構楽しい毎日送ってるし、魔王を倒せば帰



れるのよ？今回だつて怖かつたけど誰も怪我せず無事完了できたし、しかも今回の報酬全部くれるのよ！」

「アクア様、この男にどう丸め込まれたのか知りませんが、今のあなたの扱いは不当ですよ。ところで、今は何処に寝泊まりしているんです？」

「えつと、みんなといっしょに、馬小屋で寝泊まりしてるけど……」

「は!？」

「おい、いい加減その手を放せ。お前はさつきから何なのだ。カズマとは初対面のようだが、礼儀知らずにもほどがあるだろう」

おいまして、めぐみんこんな街中で爆裂魔法を撃とうとするんじゃない!

「……クルセイダーにアークウイザード?それに綺麗で大きなモンスター、随分とパーティーメンバーに恵まれてるんだね?それなら尚更こんな優秀そうな人たちを馬小屋に寝泊まりさせて恥ずかしいと思わないのか?」

話だけなら優秀そうだが、中身は皆イロモノぞろいだ。

残念だったな、カズマ少年並みの指揮能力がなくては話にならない。

「君たち、今まで苦労したみたいだね。これからは僕と一緒に来るといい。パーティーの構成的にもバランスが取れていいじゃないか。完璧なパーティーになれるよ!」

うわあ。気持ち悪いわあ。まだハンターに捕獲される方が私はいい。いやそれも嫌

だな。

みればアクアたちも引いている。

「ねえカズマ。もうギルドにいこう？ 私が魔剣あげといてなんだけど、あの人には関わらない方がいい気がするわ」

「えーと。俺の仲間は満場一致であなたのパーティーには行きたくないみたいです。俺たちはクエストの完了報告があるからこれで」

「にがさなつぷげえ!?!」

おや、いきなり進路上に出るから思いっきり轢いてしまった。

私は悪くない。いきなり進路上に出てきた乙るぎくんが悪い。

「うぐう、しよ、勝負をしないか？ 僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ、僕が負けたら何でも言うことをひとつ聞こう」

「よし乗った！じゃあ行くぞ！」

「えっ!?!ちよっ！待っ……!?!」

『『ステイール』 ツツツ！』

「んなっ!?!コンナハズジャンイノニイ！」

ヒヤッハー！お前の負けだ、乙るぎ！

「卑怯者！卑怯者卑怯者卑怯者——っ！」

「あんた最低！最低よ、この卑怯者！正々堂々と勝負しなさいよ！」

「なにが正々堂々だ！高レベルの魔剣持ちが、低レベルの冒険者に勝負挑むんじゃねえ  
！」

「とりあえずこの魔剣は貰ってきますね。いうこときくつつつてたし」

「はん！その魔剣はキョウヤにしか使いこなせないわ！」

「そうなの？アクア」

「本当です。あの痛い人専用よ。カズマが使ったって普通の剣よ」

「まあいいか。起きたら恨みっこ無しだって言っといってくれ、じゃあな」

「待ちなさいよ！こんな勝負私達は認めないわ！」

ほう、ならば私と勝負しようじゃないか。この世界の高レベル冒険者の仲間の強さを見てみたいからな。

ユクゾ、カカツテクルガイイ。

「ひっ……」

弱いな、ジャギイ三匹分か。

所詮は取り巻きよ。

「お、おう、行くか」

「そうですね」

面倒ごとがあちこちからくるな、全く。  
ギルドが遠く感じる……。

## 9 話

報告を完了したが、檻の弁償代でほぼほぼ報酬を差し引かれたようだ。

今回は何もやってないし完全に被害者だな。ほれ、もふもふしてやろう。

「うう……。あの男今度会ったら絶対にゴッドブローを食らわせてやるわ！そして檻の弁償払わせてやる！……もふもふう」

そのいきだ。

「ここにいたのかっ！探したぞ、佐藤和真！」

ストーカー！変質者！自分を勇者だと思ってる一般人！

「佐藤和真！君の事は、ある盗賊の女の子に聞いたらすぐに教えてくれたよ。ぱんつ脱がせ魔だつてね。他にも、自分の従魔を泡まみれにしたりとか。いろいろな噂になってるよ、鬼畜のカズマだつてね」

「おいマテ、誰がそれ広めてたのか」

誰が従魔だ、誰が。あとカズマ少年の事はほぼほぼ間違つてない。

「…… アクア様。僕はこの男から魔剣を取り返し、必ず魔おとうば!!」

アクアの、ゴッドブロー！こうかはバツグンだ！

「ちよつとあんたオリ壊したお金払いなさいよ！おかげで私が弁償することになったじゃない！三十万よ三十万！ほら、とつと払いなさい！」

アクアにだけは潔いのが。三十万しつかり払つてるし。

あ、起き上がった。

「…… あんなやり方でも、僕の負けは負けだ。そして何でも言うことを聞くといった手前こんなことを頼むのは虫がいいのも理解している。……だが頼む！魔剣を返してはくれないか？君が使つてもそこらの剣よりは斬れるくらいくらいにしかならない。……返してくれ。」

…… 残念だったな、既にあれはここにはない。

まあ私が何を思つても聞こえないから意味はないが。

「まずこの男が既に魔剣を持つてない件について」

「!？」

「ふつ。あれなら既にこれに代わっている」

そういつてカズマ少年は金の入った袋を掲げる。

「ちくしよおおおおお！」

あららー、大丈夫かね、あれ。

「何だったのだ？あいつは……」ところで、先ほどからアクアが女神と呼ばれているが、一体何の話だ？」

きにするな、ただのちゆうにびようだ。

「そうか、そういう設定か」

「違うわよっ！」

『緊急！緊急！冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっ！』

またか！

多過ぎるぞいくら何でも！

またあの騎士モドキか!?

「またかよ……？最近多いな、緊急呼び出し」

『緊急！緊急！全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってください！……特に、冒険者サトウカズマさんとその一行は、大至急でお願いします！』

……絶対騎士モドキだろうな。呪いの件じゃないのか？

先に行ってるぞ。

「あつ、おい！」

くく

予想的中やはりあの騎士モドキか。

大量のモンスターを連れているな。

強烈な腐臭もする。あれはアンデッドか。

「…追いついた！速すぎるぞ…！」

先に行ったのにもう追いついたのか。

ダクネスは？…：… まだ走ってるか、そうか。

「おお、やっぱりあいつか」

「見つけたぞオ！なぜ城に來ないイ！この人でなしどもがああああ!!」

人じゃありませんしお寿司。泡弧竜です。よって問題ない。

「えっと、なぜ城に來ないって、なんで行かなきゃいけないんだよ？もう爆裂魔法も撃ち込んでないぞ？」

カズマ少年、呪いが解かれたと知らない人から見れば、その発言はクズそのものだぞ。

見捨てたと解釈できる。

「爆裂魔法を撃ちこんでない？撃ち込んでないだど!?何を抜かすか白々しいっ！その頭のおかしい紅魔の娘が、あれから毎日欠かさず通っておるわ！」



……まだ行つてたのか。

「……お前、行つたのか。もう行くなつて言つたのに、あれからまた行つたのか！」  
「ひたたたた、いた、痛いです！違うのです、聞いてくださいカズマ、これには理由が……」

「なんだ？くだらない理由じゃないよな？」

「それが……城に向かつて放つのに魅力を感じてしまつて……大きくてかたいものじゃないと我慢できないのです……！」

何を我慢するというのか。

「ええい！大体お前ひとりじゃ動けないだろ!?共犯者がいるはずだ！いったい誰と……」

アクア……お前か……

「お前かああああ！」

「ごめんなさあああ！だつてだつて、あのデュラハンのせいでもくなくエスト受けられないんだもの！腹いせがしたかったのよおおお！」

「俺が本当に頭に來たのはそれだけではない！貴様らには仲間を助けようという気は無いのか？不当な理由で処刑され、モンスター化する前は、真つ当な騎士のつもりだった。その俺からすれば、仲間を庇つて呪いを受けた、騎士の鑑のようなあのクルセイダーを見捨てるなど……！」

騎士の鑑（私欲丸濡れ）

ちようどご本人が来たようだ。

「……や、やあ……」

「……え？……あ、あれえー……っ!?」

残念だったな、そこまでだ。

「残念でしたー！呪いは私が解いちゃいましたー！プークスクスー！」

「おい貴様。俺がその気になれば、この場の全員を一人残らず斬り捨て、街の住民を皆殺しにすることだってできるのだぞ？いつまでも見逃して貰えると思うなよ？俺のこの体にお前らでは傷一つつけられんわ！」

ならば私が相手になろう、元の大ききでな。

「ぬおっ！何処から出てきた!？」

人込みから。では、行くぞオ！

「うおっ。なに、何をする!？」

尻尾で薙ぎ払っただけですが？次はシャボンランチャー！

「隙間だらけだわ！ふん!」

ところがどっこい、いきなり大きくなったりします。

「ぬわっ!?!何だ!?!巨大化したぞ!?!」

かかったなツアホがツ！ローリングアタック！

「うげえ！どばあ！お、おいお前たち代わりにあいてしてや……！！」

「残念だったわね！既に私が浄化してやったわ！」

そういうことだ。諦める。諦めて私の糧となれ。

水流プレス！

「これ位なら避けられるわっ！」

続いて薙ぎ払い、ついでの背面プレスだッ！

「……ドウシテコウナツタ。こいつら強すぎだろっ!?」

「おのれえ……！」

「ターンアンデッド！ターンアンデッド！」

「お前らを末代まで呪ってやる！特にその狐だか何だか分からない生物！」

そこそこの硬さ、硬さだけなら上級ハンター以上、G級ハンター未満ってところか。

結構強かったな。来世は私の世界に生れ落ちるといい。

その強さを生かせるだろう。

「おい、水はやめろ！さっきの水のプレスはやめろ！」

断る。死ねえいッ！デユラハンッ！

「ゴフッ。わが生涯にたくさんの悔いあり……」

アツケナイモノヨ。

「おお……！勝ったぞ！あの竜？とカズマ達の勝利だ！」

「「「やったあああああ！！」」」

貴方たちは何してたんですかね。いや、出番を私が食ってしまったのか。なにせよ、勝ちも勝ちだ。

~~~~~

翌日

ギルドではどんちゃん騒ぎだ。

酒飲みまくっている。非常に臭い。

カズマ少年は、大金貰って調子乗って、今日は奢りだなんて言っていた。まあそのおかげでうまい魚が食えるので別にいいが。

「おう、たまみつねええ、のんでるうう？」

飲んでない。というか飲めるのかすら解らない。

アクアは飲み過ぎだ。嗅覚がマヒしそうなくらい酒臭い。

………持ち上げられた。これは……ダクネスか。どうした？

おい、そつちは一番盛り上がっていて、一番臭いとこじやないか!

臭いがヤバいから私は近づかなかったんだぞ!

……  
嗅覚が死んだ。もう何も感じない。

「連れてきたぞー!」

「来たなー!おらのめよー。のめー」

うわまで、何をする気だ!飲ませる気か!?!分解できるかわからないんだぞ!

やめろ!何?飲ませない?ぶっかけるだけ?それもやめ……うええ。

ほんとにぶっかけるとは……。

「どんどん追加しろー!」

まで、これ以上はほんと待て、お願いだから、やめてくれたなら恩返しするから!

なに?女の子になってかって?なれる訳ないだろう。なんだとおもって……!?

その後、ギルドのテーブルの上で、酒まみれになって気絶するタママミツネの姿が見れたという。

~~~~~

昨日の記憶がない。

思い出そうとすると背筋が冷たくなる。

それはそうと、カズマ少年が曰くつきで、悪霊が出るといふ、屋敷を買い取つたよう  
だ。

もつとも、アクアが悪霊は払ってしまったそうなので、今はもう出ないそうだが。  
そしてカズマ少年、擬人化できるようになる魔道具とか買ってこなくていいから。

私に使うとうとしないでもいいから。

「どう使うんだ？ほんとに。見た目はただの首輪だしなあ、タマミツネにつけてみても  
効果なかったし、外れなくなっちゃったけど」

私をペット扱いしようものなら泡だらけにしたうえで縄で縛ってやる。

とりあえずはこの首輪を何とかしてほしい。

「うん、今度ウィズに聞いてくるわ」

そうしろ、最悪見えなくするだけでいいから。

ああ、眠くなってきた。夜におこしてくれ……。

おやすみ。

## 10話

……ふああ……

おはよう……まだ夜ではないか……。夕方か？

首輪は……外れてないな。カズマ少年はまだ帰ってないか。

確かウイズの店に説明を聞きに行くとか言っていたな。

そこまで時間がかかるのか？外すのにクツソめんどい事しなきゃいけないとかじゃないよな。

「おう、ただいま」

帰ってきたか……。何故にやけている？何故そんな笑顔でこつちを見る？

「その魔道具だが、魔力が溜まったら発動するらしい。もつとも、数時間しか持たないらしいが」

そうか、良かった。で、外すにはどうするんだ？

「なんか、一回擬人化する必要があるらしい。そのあと持ち主が外すかを選べるらしい。ちなみに持ち主は俺に設定されてるそうだ」

カズマ少年に決定権があるのか……。外してくれるよな？

「モチロン、タクサンオセワニナツタシネ」

何故片言なんだ？外してくれるよな？外してくれるよな!?おい!なんか言え!

「ダイジョウブ、ダイジョウブ。アンシンシテネ」

全く安心できんわ!!……こいつ……!?私を見る目が性的になっている……!!

本当はケモナーだともいうのか!?

「とまあ、冗談は置いておいて、今夜の晩御飯は何だ？」

冗談じゃなかっただろ!……それは私も知らない。匂いからして、カニかなんかじゃないのか?

「あつ!帰って来たのねカズマ!今夜はカニよ!!引越し祝いに、ダクネスの実家から来たんだって!高級品の霜降り赤ガニよ!高級酒までついて!」

いつになくハイテンションだな。それほどなのか?そのカニは。

「冒険者稼業を生業にしておきながら、霜降り赤ガニをお目にかかれる日が来るとは……!」

「そんなに高級なカニなのか？」

「当たり前なのです!これを食べる代わりに爆裂魔法を我慢しろと言われたら、喜んで我慢して、食べた後にぶっ放すくらいには!」



それ結局我慢して無いだろう。カニなら食べたことはあるが、そのあと凄くひどい目にあつたから不安だ。

まあ、この世界ならイビルジョーに会つたり、イビルを追つてきたG級ハンターに会うこともないだろう。

「そりやす〜。おい、最後なんて言つた？」

ふむ。その霜降り赤ガニとやらがこれか。… どう取り出そうか。…。前の時は時は殻ごとといったからな。…。

「ほら、出してやつたぞ。これで食べるだろ」

おお、ありがとう。カズマ少年。先ほどの不穏な言動は見逃そう。

… うん。うまいんじゃないか？ 私にはトロサシミウオの方が美味く感じる。

やはり私には魚だな。

皆黙々と食べているな。あと二本くらいで私は満足だが。

「カズマカズマ、ちよつとここにティンダーちようだい。私が今からこのお酒の美味しい飲み方を教えてあげるわ」

へえー。そういう飲み方もできるのか。

飲まないし関係ないが。おさげこわい。

「確かにこれはいけるな、美味い！」

カズマ少年がなんか我慢しているように見えるな。

「お、おう。残念だけど俺は昼間飲んじまったから明日にするな」

「明日残つてるとおもうのくく？私が全部飲んじやうわよー？」

「クツ！」

「ちよつと早い俺はもう寝るとするよ！ダクネス、ご馳走さん、おまえら、おやすみ！」

行つてしまった。…この残したカニをどうするか。

…ん？何だ？首輪が光つて…？うわっ!?

「何だ!?!何が起こつ…!?!」

人の腕…だと？

「ええと？どちら様？タマミツネは何処に？」

「私がそうだが…。何が起こつたというんだ？」

「首輪のせいじゃないか？擬人化する魔道具とか言つてたろう」

…今魔力が溜まつたともいうのか？

…げ。なんか色変わつてる、何で白からピンクになるんだ。

うぐぐぐ。やっぱり外せないか……。

「……やっぱりメスだったのね。」

「何？私はオスのはずだが？」

「じゃあ、何でそのモノがついてるの？」

なん……だと……？

ほんとについていやがる！私はオスだ！断じてメスではない！

「ふむ。確かに女だな。なかなかの体つきをしている」

「やめろオ！ドウシテコウナツタ!？」

アアアアアア やっぱりカニは私を不幸にする！

「なんかヌルヌルしてますね」

してちゃ悪いか！そういう特性は変わらんのか！作った奴は誰だ！

見つけ出して八つ裂きにしてくれる！

「とりあえず風呂へ行つてはどうだろう」

…… そうしなくてはダメか。

「物凄く歩きづらい……。四足歩行したい……」

「そんなことをしてはダメだ。ちゃんと歩こう」

今まで私は四足歩行だったんじゃボケエ！

そう簡単に二足歩行出来るかッ!

「くそう、なぜ私がこんな目に……!」

「日頃の行いがわるいからじゃない?」

「そんなわけあるかボケエ!」

うがあああ!おのれえ……!

~~~~~

やっとなつた……!

「結構かかってしまったな」

「仕方ないだろ……両足で立つの難しいんだから……」

「明かりがついている?誰かいるのか?いるとしたらカズマ少年か?」

「どうした?何かあったか?」

「何でもない……」

まあ、大丈夫だろう。

おお、前見た時とは視点が違うからか、違って見える。あとカズマ少年がいる。カズマ少年がなんか驚いているが、どうでもいいか。

「んん？なにかい…。」

ん？気づいたか。

「どうした、こつち来いよ。ダクネスと…。タマミツネか？」

正解だ。では、そつちへ行こう。

「タ、タマミツネ!? どうしてそんな躊躇なく行けるんだ!？」

? 別にみても興奮なぞしないし、見られてもどうでもいいし。

いや、まあブツを見るのは嫌だが。

「背中を流してくれないか? ほら、ダクネスもそんなところでポケっとしてないで、こつ

ち来いよ」

ぬ、人間の手だからやりづらい…。

いつそ体全体でやってもいいが、何か調子乗りそうだしやめておこう。

「ほら、タマミツネはやってくれてるぞ?」

「ええっ! わ、私がおかしいのか? そ、そんなことをしなきゃダメなのか!？」

「違うが?」

「」

固まってしまった。

ぬう、この体滑りやすすぎじゃないか？

今も滑りそうになる。ちよつとした衝撃を受けたらすぐさますつ転んでしまいそう  
だ。

「ふふ、おつと手が滑つてしまった」

ふえつ!!何をするだあー!うおつ。

「ふぐつ!」

「うわつなんだ!?!どうした!?!」

おい、どこをつかんでいる?どうしてそんな態勢になっている?

痛いからやめてほしい。

「・・・デユフフフ」

うわつ、気持ち悪い。

「ダクネスー助けてくれー」

「落ち着き過ぎだろう!?!」

触られても、何にも思わないからな。そこらへんが人間とは違う。

「曲者ー!出会え出会え!皆、この屋敷に曲者よー!」

「・・・いいところだったのに・・・!!」

おお、すごい勢いで出て行つた。

ん？首輪がまた光つて？まだ一時間ぐらいしかたつてないぞ？

あ、完全に戻つた。

「かかつてこいやあー!!」

何やら意気込んでるな。何を相手してるんだ？

．．． やつぱり首輪は外れないのか。

「何だつたんだ．．． さっきのは」

私を知るか。

とりあえずもう私は出て、リビングで寝させてもらうぞー。

じゃあおやすみだ、ダクネス。

支えてくれてありがたかつたぞ。

「あつおい、待つてくれ！」

断る。やつぱり四足歩行が一番だ。楽に歩いて行ける。

あんな長く感じた廊下がこんな短時間で行ける！

やつぱり私は、この姿じゃないとな。

さて、おやすみ。

## 11話

…朝から騒がしいな。おかげで目が覚めた。

何を騒いでいるんだ？何かあったのか？

「…だから！近くに本屋ができたんだって！何で信じねえんだよこいつらー！」

本屋だと？本屋ができたのか。人間だったころは、本が好きだったな。

擬人化すれば読めるだろう。これに関してはカズマ少年に感謝しなくてはならないな。

擬人化して何かすればカズマ少年も満足するだろう。

「品ぞろいも多いし、何でも綺麗な絵とかもあるらしいぞ」

何で絵？ホントは別の何かだったというオチじゃないよな。

「へえそう。なら確かめてきてあげるわ！」

早っ！ありえんど何だあの速度！？ええい待て！私も行く！

くく



「ほう、ここがそうか」

「ダクネス、何かっこつけてんの？」

ふむ。確かに大きいな。期待できそうだな。

お邪魔しまーす。

「いらつしやーい。テキトーに見てつてねー」

やる気がないのか？めっちゃぐでつとしてるな。

だが、確かに品物は多いな。なんかどっかで見たものが多いが。

「え〜おススメは〜そこらへんにあるもので〜す」

ここらへん？…… エロ本じゃないか。モンハンの。

もんはんの〇ろほん、ラ〇×と〇あめ、何でこんなものしかないんだ。

薄い本しかないのか！というかR―18コーナーあるじゃないか！

ソツチ置け！

「(ハ・ム・ム) ヤダ！」

うぜえ……。 まともなものも置いてあるようだが、やはりここら辺のインパクトが強い。

というか何処でこんなに手に入れた？

「神器でコピーしたものだよ。記憶にあるものをコピーして現実にする能力の神器をも

らったんだよ、おかげでこの世界でも本を読める」

そんな効果の神器もあるのか。いいなあ、私のなんて大きさを変えるだけだぞ。まあそれがなければ屋敷に入れないから別にいいが。あるだけマシだ。

「いやー初めてタマミツネをこの目で見たよ。この神器、生き物はコピーできないみたいだからね。君はタマミツネにしてもらったのかい？」

望んですらないが？ 気づいたらなつてただけだ。

「まあいいや。今後この店においでよ。これあげるからさ」

何だ？ … さつきの本たちじゃないか!?! いらねえよ！ そんなもの！

ああ、でもちゃんとした本もあるんだな。大体ラノベだが。

今後もお邪魔させてもらおうとしよう。欲しいものがある可能性もあるからな。

： そういえば、アクアたちは何をしているのだろうか。

私より先に入ってたが。

「あの人達かい？ 男の子はそっちにいったよ」

…… R | 18コーナーク。

「そして女の子たちはあっち」

あそこは漫画があるみたいだな。少女漫画でもあるのか？

ところで、絵などもあると聞いたのだが。

それはどこら辺にあるんだ？

「ちようど君の後らへんだね。まあ、本に比べれば少ないよ」

それでもぎつと見ただけで百以上あるんだが？

……あのどうあがいてもバッドエンドしかなさそうな、緑の服を着た金髪の女の子の絵は？

「ああ、あれ？最近夢に出てくる女の子についていつたら見つけたものだよ。残念だけど、非売品だよ。そういう約束をしたからね」

なるほど。じゃああの青い騎士と仮面をかぶった人と灰色の狼の絵は？

「題名は『遠き過去の思い出』僕が書いたものだよ。こうあればいいなと思って書いていたら、これができた」

へえ、いい絵だな。

「ほう、そんな絵なのか。これは売り物か？売り物なら買い取らせていただきたい」  
ダクネス、漫画漁ってたんじゃないのか。何でここにいる。

「売り物だよ、値段は二十万エリス」

「買った。これに二十万入っている、受け取ってくれ」

「買うのか。というか、安くないか？

「まいどアリー」

… 皆ここに集まったが、どれだけ買う気なのだろうか。

アクアなんて顔がほほほ見えないじゃないか。

カズマ少年：… R | 18コーナーに行つてたのは私と店主しか知らないから。そんな挙動不審にならなくていいから。怪しいだけだから。

めぐみんは：… なんだその本？ 墮天使の詩？ なのになんで見た目は大学ノート何だ？

「あー、それ全部お買い上げでいいですか？」

一斉に頷いたな。アクアは見えてないが。

どのくらいの値段になるのだろうか。

… 全部合わせて三十万？ 絵も入れたら五十万？ 今日でどれだけ使うんだか。

まあデュラハンの賞金が有り余っているんだらうな。

早々使いつぶせるわけもないしな。

「ありがとうございます」

体が括りつけられた本たちが重い。私が自分のを小さくすれば私のも、俺のも言いやがって。

何が楽でいいわね、だ。私はきついぞ。主に量が。屋敷についたらずつと小さいままにしてやろうか。

あとちよつとで屋敷につく。この重りからも解放される。

「あつ」

何だ？何かあつたのか？

あれは……前にカズマ少年とパーティー交換した人か。

たしか……名前はごみだったか？それともダストだったか？

まあどちらでもいい。今はこの重みから解放されたい。

「何で後ろのやつはそんなに荷物もってんだ？」

こいつらのせいに決まってるだろう！

「ああ、タマミツネが荷物持ちを引き受けてくれたんだ」

引き受けてねーよ！勝手に渡してきたんじゃねーか！

ああもう、私は先に帰るぞ！付き合ってもらえるか！

「ああ、おい待てよ！……いつちまった」

ヒヤッハ！到着だあー！

後は縛っているひもを切つて……自由だあー！

本はリビングに置いとけばいいだろう。絵はしらん。

後は擬人化できるかどうかなんだが……。まだ無理っぽいな。すぐ読みたかったが仕方ないな。

薄い本はカズマ少年に入れておこう。私は読まないのな。読んでも何もなし。さて……魔力はどうやったたらたまるのだろうか？

自動的にたまるのはわかるが、手動でためる方法はないのだろうか。……どうしようも無いか。諦めてたまるのを待とう。

~~~~~

「いやー、話してたら遅くなっちゃったわね！」

「お前がたかかってたからだろ」

「どうでもいいので入りましょう」

「そうだな。入って買ってきた漫画？とやらを読もう」  
ん？帰ってきたか。

体感的には三十分ほどか。何を話してたんだか。

「ただいま……。おお、綺麗に分けられてるな……ん？何か俺の量増えてね？」

「気のせいよ、気のせい」

「…カズマ。一番上に乗ってるそれは何だ？」

「えっ?…エロ本だな。」

ふっ、私に持たせた罰だ。大きさは元に戻したから安心しろ。

カズマ少年のエロ本だけ更に大きくしたがな。

それより魔力を魔道具にためたいのだがどうすればいい？

「…擬人化したいのか? ok ok 俺のスキルで魔力を送ってやるよ」

よろしく頼む。…あとちよつとだな。

「これでたまったんじゃないか？」

うむ。完全にたまったようだ。いざ、擬人化！

「…服、着てるんだな」

「着てないと思ったか? 残念、甲殻や鱗が服になるのだ」

「ちっ…」

「残念だったわねー!カズマ!」

さて、本を読むか。何年ぶりの本だろうか。

中の文字は…日本語だ。これなら読める。難しい言葉は少し忘れてしまったが、まあラノベなら大丈夫だろう。

喧嘩しているアクア達など無視だ。

「ほうほうこれは……！中々いいじゃないですかこのノート！作者は……漆黒の墮天使？名前といい、センスといい侮れませんか……！」

アカン奴だそれ。絶対作つた奴の黒歴史になつただらうな。

何よりめぐみんのセンスに引つかかるのがひどい。

万年中二病の奴らに評価されるノート……。何故そんなものを売つたのか……。

喧嘩してたアクア達も引いている。どれ程痛いノートなのか逆に気になる。

「ううむ、この絵は何処に飾つた方が映えるだらうな」

知らない。何処おいてもいいんじゃないか？

どうでもいいから静かにしてくれ。私は本が読みたい。

「俺は部屋にこもる……この本たちを持つてな！」

いきなりどうした。死亡フラグか？

「そうよ！閉じこもつてなさい！」

何があつたんだか。

とにかく私は静かに読みたいんだ！この場所はうるさくてかなわん！

何処に行くべきか……。

空き部屋があつたはずだからそこへ行こう。



「む、どこへ行くんだ？」

「空き部屋に行く。うるさくて静かに読めないからな」

「そうか、空き部屋は一番左だ」

「ありがとう、ダクネス」

一番左か……。まあいい。

その後一日、本を読んで（途中で魔力を補給しながら）すごした。

## 1 2 話

最近カズマ少年からの視線がひどい。

私を、正確には魔道具である首輪を手をワキワキさせながら見てくる。

その顔は完全に犯罪者のそれだ。特に性犯罪者の。

どうにかならないか？店主。

「僕にそんなこと言われてもねー。どうしようもないよ。大人しく擬人化したら？」  
嫌だ。誰が好き好んで馴れない人の、しかもメスの体になぞなるか。

「諦めてご主人様とか言っておきなよ、メイド服とか和服着て。それで満足するんじゃない？」

気持ち悪ッ！絶対嫌だ！絶対嫌だそんなの！

カズマ少年をご主人様と呼べと？それはどんな処刑なんだ？

ご主人様など、誰に対しても使いたくないわ。

「いいじゃん、いいじゃん。すぐさま用意できるよ？記憶にあるからね」

お前、前世何してたんだ？オタクだったのか？

「何してたっけねー、本をたくさん読んでたことだけは覚えてるんだけどねー」

お前の神器、記憶を必要とする奴だろ。大丈夫なのか？そんな忘れっぽくて。

「忘れるのは自分の事だけだよ、この前来た男の子が何買ってたかも覚えてるし」  
何故自分の事は覚えてられないのか……。

「それより何か面白いものない？」

面白いもの？この世界に来る前に、宝玉を手に入れて喜んでるのか喜んでないのか、どっちか分からない顔した人と、その人をみて、崩れ落ちる人なら見かけたが。

「物欲センサーに引つかかったんだね、ご愁傷様」

他には何もないな。女ハンターがコンガにドナドナされてたことなんて知らない。

「ふーん。あれ、お客さんが来たみたい」

行つて来いよ、店主だろうお前。

めんどくさがるなよ？

「ええ。君も道連れにしてやる」

…… どんだけやりたくないんだよ。

わかつたわかつた。一緒に行つてやるよ。

「おつ、素直だね、明日はやりが降るのかな？」

おい、ふざけたこと言つてないでサッサとカウンターに行け。

「はいはい。いくらっしやいませ。当店では他の店で扱ってない品がありますよ

「入ってきた客は……。あいつだ、あいつ。茶髪でイケメンで、戦闘力スリージャギイの取り巻き連れてたやつ。」

えーと、確かミツ……。乙るぎ君だったかな？

「すみませ……。!?」

おい、何こつち見てる？ 何でここにいるの!?とか言いそうな顔するんじゃない。

「何でここに……。!?」

言いやがったこいつ。

「この子？ 僕の店のマスコットだよ」

いつマスコットになった？

まあなつてもいいが。

「あつはい……。ここには素敵な絵があると聞いてきたのですが……。」

……。残念だったな。大半がみんなのトラウマだ。

そうだな、乙るぎ君にはこの、髪がぼさぼさで赤い目をした、青い肌の人形の絵がいんじゃないか？ 今は小さいが、本当はもつと大きいからな。

もしくは、森にポツンとある洋館の絵とか。これには特殊な仕掛けがあるから、夜中になつたらいきなり曲が鳴り始めるから注意しろ。朝まで鳴りやまないから。

「じゃあ、これでいいよね？」

そういつて渡すのは、教室の絵。何処もおかしいところはない。

ただ一つ、他の人はグループを作っているのに、茶髪の少年が一人でいること以外は。言つてしまえば、ボッチである。こいつはそんな経験ないだろうか。

「……別のでお願いします……」

おや？ 妙に顔が暗い。どうしたのだろうか。

まあいいや。次へいこう。

「じゃあこれ」

今度は……。白い、肩と頭が一体化してる、人型の怪獣のようなものが、のたうち回り、泥にまみれながら苦しんでいる絵である。

これも特殊な仕掛けがあり、水をかけたりすると赤ん坊のような、悲痛な叫び声が聞こえるというものである。なお、絵本体は防水済みである。

「いえ……。かわ「買わないの？」……買います……」

なんて苦渋の判断だろうか。

顔が物語っている。いいじゃないか。この世に一枚しかないんだぞ？

「ありがとうございました……」

「ああ、待つて。おまけでこれ、あげるから」

今度はちゃんとした絵である。たぶん日本の絵。

高層ビルやらがある。

「ありがとうございます、では」

また来るといい。今度はちゃんとした絵を買わせてくれるだろう。

「ああ、あれ結構自信作だったんだよね。仕掛けとか」

ちゃんとした絵をかけ。トラウマじゃなくて、ちゃんとした絵を。

「断る。転生者に見せるのが楽しいんだよ、何であるの!? みたいな表情を見るのがいいんだ」

なんて趣味が悪いんだ。コノチクシヨウメイ。

「誉め言葉だよ。そうそう、この絵たちはいるかい?」

教室の方だけ貰っていいこう。カズマ少年の部屋の前に飾ってやるから。

「まいどアリー。これおまけねー」

おい、ウスⅡ異本をおまけとして渡してくんのやめろ。

くくく

「お帰りー。どこ行つてたんだ？」

例の本屋へ。

「……その絵は？」

貰つた。カズマ少年の部屋の前に飾る予定だ。

「やめろ！やめてください死んでしまいます」

へーキへーキ、ソノクライデシニハシナイダロウ？

「待つて！ほんとにやめて！最近じろじろ見てたの謝るから！」

これは決定事項だ、異論は認めん。

「お帰ります。……何ですかその絵は？ゆんゆんの絵ですか？」

違う。というかゆんゆんとは誰だ？

まあいい。これをカズマ少年の部屋の前に飾るのを手伝つてくれないか？

「いいでしょう。面白そうですね」

「やめろおおおお！」

フハハハハ！止まるかあ！

ずっとジロジロ見られてたからな！ストレスもたまるといふものだ！





「あつ、なーにその絵？カズマさんの絵なの？そっくりね！」

「グハアツ！ゴフツ！」

カズマ少年に 痛恨の一撃！ カズマ少年は 700のダメージを受けた！  
致命傷だ、安心しろ。

ほら、新しいウスⅡ異本だ。これで回復できるだろ……

一瞬で…… ひったくっていっただと？

部屋に閉じこもってしまった。

そんな精神的ダメージを与えてしまったか？

「しくしくしくしく」

ああうん、やり過ぎてしまったか？

だがまあ、自業自得だと思ってくれ。何時間も見られ続けたんだからな、私は。

「な、泣いてしまいましたね」

「ああ、泣いてしまったな」

「このくらいで泣いちやうの？女神の私にはわからないわー」

お互い後で謝るとしよう……

くく

「ハア…… 買っちゃったこの絵…… どうしよう…… 押されたとはいえ、何で買っちゃたかなあ。二人に見つかつたらなんて言われるだろう……」

何してるんだらうか。というか買った後そこらをうろろしていたのだから。散歩に出でいたら乙るぎ君に会うとは。

「…… うげっ!? 今日によく会うね……」

そうだな、その嫌そうな反応されたのも二度目だな。

で? 何してるんだ?

「…… 君たちを買わされたこの絵をどうするかだよ」

買わされた? 何を言うか、あれも商売だ。というか私は買わせてない。

「もうお金がないよ…… 彼女たちになんていえば……」

仕方がない、これをやるからさっさと帰れ。

「…… これは何だい?」

シャンプー。女性なら喜ぶんじゃないか?

さあ、さっさと帰ってご機嫌取りしてこい。じゃあな。

「あ、ありがとう?」

今度こそさよならだ。

## 13話

『デストロイヤー警報！デストロイヤー警報！機動要塞デストロイヤーが、現在この街に接近中です！冒険者の皆様は、装備を整えて冒険者ギルドへ！そして、街の住民の皆様は、直ちに避難してくださいーいっ！！』

「逃げるのよ！遠くへ、遠くへ逃げるの！」

「今更ジタバタしたって無駄ですよ、住む場所も何もかも失うなら、もういつそ魔王の城にカチコミにでも行きましようかね」

阿鼻叫喚だな、そこまで慌てることなのか？

「どうしたんだよ？さっさとギルド行こうぜ」

「カズマさんったら何言ってるの？もしかして機動要塞デストロイヤーと戦う気？無謀よ無謀、ウルトラマンでも連れてきなさいな。私達じゃどうあがいてもプチつと潰されるだけよ」

潰されるだけ、つまり巨大なのか？

「カズマ。今この街には、それが通った後にはアクシズ教徒以外、草も残らないとまで言われる、最悪の大物賞金首、機動要塞デストロイヤーが迫って来ています。これと戦うのは、無謀を通り越した何かです」

「ねえ、私の可愛い信者たちが何故そんなバケモノみたいに言われているの？ ウィズも言つてたけど、どうしてうちの子達つてそんなに怯えられているのかしら。みんな普通のいい子なのに」

草。アクシズ教徒はバケモノか？

「爆裂魔法じゃだめなのか？ 遠くから狙えるだろうし、あの威力なら粉々にできるだろう？」

「デストロイヤーには、魔力結界が張ってあって、爆裂魔法を一発二発放つたくらいではその結界を壊せません。物理的に壊そうにも、かなりの巨体でありえない素早さ、それらが加わって破壊不可能です」

へえ〜、ラオおじいちゃんよりも弱そう。要は魔法に強いだけだな。

モンスターである私には関係ない。

「すまない…。遅れた…。ん？ カズマ早くしたくして来い、ギルドへ行くのだろう？」

重装備だな。まあハンターの防具を見てからだと見た目防具にしか見えないが。

キメラにして来い。

「おい、お前からこいつを見習えよ！大金はたいてかつた屋敷と住んできた街を守る気は無いのか!」

「そりや守りたいけど…… やっぱり命が惜しいわ!」

「いいから行くぞ!」

~~~~~

「きたなカズマ!来ると思ってたぜ!」

ダ、ダスト?という人と乙るぎ君、大量の男性冒険者。

多いな、こんななにしたのか。

「お集りの皆さん!本日は、緊急の呼び出しに伝えて下さりありがとうございます!只今より、対機動要塞デストロイヤー討伐の、緊急クエストを行います。このクエストには、レベルも職業も関係なく、全員参加でお願いします。無理と判断した場合には、街を捨て、全員で逃げることにあります。皆さんがこの街の最後の砦です。どうか、よろしくお願いします!」

緊急クエストか、ダレンモーランとかラオおじいちゃんとかよりは、弱そうだな。

魔法が効かないんだったか？使えないので関係なし！

「それではお集りの皆さん、只今より緊急の作戦会議を行います。どうか、各自席に着いてください！」

作戦会議には参加しないでいいだろう。カズマ少年達みたいに意思疎通できるわけでもないし。

まあ、話は聞くが。

「まず知ってはいると思いますが、機動要塞デストロイヤーの説明をさせていただきます。機動要塞デストロイヤーは、元々は対魔王軍用の兵器として、魔道技術大国ノイズで造られた、超大型ゴーレムの事です。国家予算から巨額を投じて作られたこの巨大ゴーレムは、外観はクモの様な形状をしております。小さい城ぐらいの大きさを誇っており、魔法金属がふんだんに使われ、外観に似合わない軽めの重量で、八本の巨大な脚で、馬をも超える速度が出せます」

そんな速度はラオおじいちゃんには出せないな。

ダレンなら砂上で出せるのだろうが、歩きになると遅くなるからな。

「特筆するのは、その巨体と進攻速度です。凄まじい速度で動く、その八本の脚で踏まれれば、大型のモンスターとてひき肉にされます。そしてその体には、ノイズ国の魔道

技術の粋により、じょうじ、強力な魔力結界が張られています。これにより、まず魔法攻撃は意味をなしません」

ひき肉にされる？大型モンスターが？…… どんだけだよ。

「魔法が効かないため、物理攻撃しかない訳ですが……。接近すると轢き潰されます。なので、弓や投石などの遠距離攻撃しかない訳ですが……。元が魔法金属製のゴーレムのため、弓はまずはずじかれ、攻城用の投石器も、機動要塞の速度からして、運用が難しいと思われます。それに、このゴーレムの胴体部分には、空からのモンスターの攻撃に備えるため、自立型の中型ゴーレムが、飛来する物体を備えつけの小型バリスタ等で撃ち落とし、なおかつ、戦闘用のゴーレムが胴体部分の上に配備されております」

作った奴はおかしいんじゃないのか？頭が。私の世界でもこんなはなかつたぞ！

「そして、なぜ暴れているのか、ですが……。研究開発を担った責任者が、この機動要塞を乗っ取ったといわれています。そして、今も機動要塞の中枢部にその研究者がおり、ゴーレムに指示出しているとか……。速度が速度ですので、この大陸において、既に荒されていらない地はほとんど無く、クモのような脚で、どれ程の悪路だろうと踏破します。現在、人類、モンスター合わせ、平等に蹂躪していく機動要塞、それがデストロイヤーです。これが接近してきた場合は、街を捨て、通り過ぎるのを待ち、そして再び街を立て直すしか方法が無いとされています。」



その研究者まだ生きてるのか？ 餓死してそうだが。

「現在、機動要塞デストロイヤーは、この街の北西方向からこちらに向けて真っ直ぐ侵攻中です。……では、意見をどうぞ！」

意見もなんもないと思われまます。質が悪すぎる。

「……あの、その魔道技術大国ノイズつて国はどうなつたんです？ そいつを作った国なら、それに匹敵する何かを創るなりなんなりできなかつたんですか？ あとは弱点を知つてたりとか……」

「滅びました。デストロイヤーの暴走で、真っ先に滅ぼされました」

デストロイヤーの討伐、場所は魔道技術大国ノイズ跡。そんなクエストが頭に浮かんだ。

「……他に、ありませんか？」

誰も手をあげない。負け犬ムードッ！

~~~~~

速くしてくれませんかね、あーだこうだ言つてないで。

「いやー……がギルドなんだねー。始めてきたよー」

「えっ、き、来たことないんですか!? なんでそれで行こうとするんですか!」

声の主二人は……。本屋の店主と。リッチのウイズだったか?

それと何で店主は兜以外、ロト装備を身に着けている? そしてその手に持つてるロケランっぽいものは何だ。

「おお! 貧乏店主さんだ! …… もう一人はだれ?」

「貧乏店主さんが来た! …… 確かにあの鎧のひと誰だろ?」

「…… げっ。本屋の人……!」

安心しろとるぎ君。今この場でいじられることはない。今ギルドにポツチの絵（量産品）を飾っているが大丈夫だ。

「なあ、何でウイズがあんな有名なんだ? ていうか貧乏店主はやめてやれ」

「知らないのか? ウイズさんは、元は高名な魔法使いだったんだ。凄腕アークウイザードとして名を馳せたけど、やがて引退し、しばらく姿を現さなかったかと思うと、突然この街に店を出したんだよ。売ってるものは高価だけどな、俺たちは皆こっさり店を見に行ってるんだよ。俺としては隣の人の方が何でウイズさんといえるのかがわからないんだけど」

「…… あの人のはな、例えるなら人間のなかの悪魔だ」

「やあやあ、あの時の少年。何を話してるのかな?」

「うわっ!?!いつの間に!?!」

さつきからいたぞ。よう、昨日ぶりだな。で、その手に持つてるものは何だ。

「分かつてるよね? ロケランだよ、デストロイヤーって魔法効かないんでしょ? なら物理で行こうってね」

危ないこと考えてるな。まあ別にいいが。

「えっと、貴方は誰ですか? 冒険者ではありませんよね?」

こんなのが冒険者できる訳ないだろう、ギルド職員。

「僕? 僕はただの本屋の店主さ。ただデストロイヤーを破壊できる兵器を持った一般人のね」

お前は一般人ではない、逸一般人だ。

「破壊できる...!?!」

「おいあんたあ! 何持ち込んでくれてんの!?! しかもそれ一発限りだろ!?!」

「玉は無限にあるし、連射機能付いてるからヘーキヘーキ」

何ということをしてくれたのでしょうか、本来一発ずつしか打てないロケランが、連射可能になったではありませんか。

「ほら、少年。これをあげるよ」

「おいっ！：：これ手榴弾じゃねえか！」

そんな事より準備だ。さっさと破壊するぞ。

「えっ、おい！待てよ！」

~~~~~

おお、見えてきた、見えてきた。

準備はいいか？命乞いは無しだ、ぶつ潰せ！

「はいはい。それじゃ、行きますねー」

やる気はないが破壊力は十分だ。

私の背に乗せ、カズマ少年と乙るぎ君もついでに乗せて、三人でロケランを構えている。  
る。

(二人分すぐさま店主出してくれました)

「：：大丈夫だよな？大丈夫だといいなあ」

「：：アクア様、頑張らせていただきます。：：」

「発射ー、撃て撃て〜」

すぐさま発射できるわけじゃないのか。一発撃ち終わって反動が戻った後装填無く

撃てるだけか。

「何であんたはそんな余裕そうなんだ！こっちクツソきついのに！」

「ああ！狙いがぶれる！初心者に扱えるわけないよこんなもの！」

……これ大分強化されているな。三発で脚二本が壊れたぞ。

一発外したから三発だけで、脚一本につき一発で大丈夫みたいだが。

「見ろ！デストロイヤーがごみのようだ！」

「佐藤和真!? どうした！しっかりしろ!？」

これはもう後ろの冒険者の出番はないだろうな。

「……何ですか、あれは。炸裂魔法と同じぐらいの強さで、放つのも早いとかはんそくですよ……」

「……うむ、私たちの出番がないな……」

「あの何者なんだよ……!？カズマの従魔と仲良さそうだったし、見たこともない鎧着てたし。何よりあんな威力の何かをすぐ用意できるとか何なんだよ!？」

「自称本屋の店主です。私から見れば爆裂魔法の必要性を失わせる悪魔ですが」

「……確かに最近本屋ができたとは聞いてたけど、あんなのが店主なのか!？」

そうだ、人の不幸で飯が美味しい人でなしが店主だ。今度店に行くといい、おまえのト

ラウマにあった絵や、本を売ってくれるだろう。

「はいシューりよー。後は中枢をぶっ壊すだけだねー」

終わったな。弾丸を大きくしてやろう。

「あそーれ、消えちやーえ」

PON☆ほほほ消し飛びましたとき。嫌がらせで泡を纏わせてやろう、てい。

「……なあ、大陸を蹂躪した兵器があんな無残な姿になって、さらに泡まで纏わりつくとかかわいそうになってきたんだけど」

敵に憐れとか、そんな感情必要か？命をめぐる戦いに情けは無用である。

「私が来た意味っていったい……」

何にもないよ？士気をあげるのには役立ったんだらうけど。

これで終わり、めでたしめでたし。

さて、帰ろうか。

………なんか転がってきた。赤い光を放ちながら。

「……おい、あれは何だ？なんかヤバそうなんだけど」

「何でしょうあれ、デストロイヤーの動力源か何かでしょうか？」

「と、とりあえず壊すか、どこかにとばそうぜ！責任は俺がとるし！」  
言つてしまつたな、カズマ少年。どうなつても知らないぞ。

「テ、テレポートしましょうか？ランダムテレポートというものがあるので、どこかにとばすことはできるのですが……人のいる場所に送られるかもしれない……これが危ないものだつた場合大変な事が……！」

「責任は俺と、この店主さんがとるから大丈夫だ！やつてしまえ！」

「しれつと巻き込んでくれたね、別にいいけど」

「わ、わかりました！『テレポート』ッ！」

今度こそ終わったな。めでたしめでたし。

まあ絶対後日あたりに何かありそうだがな。

面倒ごとを運んでくる疫病神がいるんじゃないか？このパーティー。

「お、終わったのか？」

「おう！終わったぞ！皆——！」

「——やったぜ——！！！！」

君たち何もできなかつたけどな。

さて、私と店主は一緒に本屋に戻ろうかね。

「そうだね。帰って新しい絵でも描こうか。gif再現できないかな？そしたら延々こちらに青鬼が向かってくる絵なんかかけケルンだけどなあ」

やはりトラウマしかかんのな。

それより今回のデストロイヤーそれよりの無残な姿を描いて配ったらどうだ？

「僕の趣味じゃないけどま、いいか。量産して配ろう」

手伝ってやろう、面白い方可笑しく捏造するぞ。

「そうそう、最近音楽も売ろうかなと思ってるんだよね、売れるのはまだもりのようかんとかシオンタウンとかクリスマスソングしかないけど」

なぜそれを先に作った。それを売るならゲームを売れ。

青鬼とかシザーマンとかそこら辺を。

カズマ少年が泣いて喜ぶだろうし、街の人も興味を持つだろうからな。

「そうだね、それもいいかな。トラウマボスだけのボスラッシュとかもいいかな」  
トラウマから離れる。そこまでこだわらな、普通の奴でもいいだろ。

青鬼とか出した私もあれだが、トラウマばっか出していると飽きられるからな。

「ゼンシヨスルヨ、キタイシテテネ」



ダメな奴だこれ。

「あつおい、タマミツネと店主！皆で宴会するんだ！来ないか？」

「あーうん、遠慮しとくよ。僕はお店で商品を追加してるから」

私も行かない、絶対に行かない。酒がある場所にはいかない。おさげやだ

「あーそうか、仕方ないな。じゃ不参加って伝えてくるよ」

そうしてくれ、行ったらぶっかけられそうだからな。

「で、何を出す？僕はトラウマ以外でも出していいんだけど、反応薄そうだからね」

悲しいものでも出してろ。

さて、ちよつと眠くなってしまったから、寝させろ。

「いいよ〜店についたら起こすね〜」

任せた。じゃあ、おやすみ。

「おやすみ」

## 14話

「冒険者、サトウカズマと本屋の店主！貴様らには現在、国家転覆罪の容疑がかけられている！自分とともに来てもらおうか！」

そんな事を言っているのは、二人の騎士を従えた黒髪の女。

…… どうしてこうなった？カズマ少年と店主が何したというのか。

カズマ少年がわいせつ罪などで逮捕されるのはわかるが、店主？店主は何もしてないだろう。

やったことといえば、転生者のトラウマが描いてある絵を売ったり、ギルドに飾ったりしたただけだ。

無害だろう（精神的な害は含まない）

最近は何所に人気になっているんだぞ？紳士的で優しい変わった物を扱っている人だとな。

「ど、どちら様ですか？ていうか、国家転覆罪って何？俺、賞金受け取りに来ただけなんですけど」

「そうだよー？賞金受け取りに来ただけだし、そもそも国なんて転覆させてどうするの

さ？僕にとっては便所の隅のネズミの糞にも劣るよ？意味ないし、面倒だし」

「ネ、ネズミの糞……！　ゴホン、き、貴様らには現在、テロリストもしくは、魔王軍の手の者ではないかとの疑いが掛けられている」

魔王軍の手の者？そんなんだったら魔王軍全員重火器やらなんやら持つてくると思うんだが。

というか魔王軍全体がトラウマ持ちになる気がする。

「ええっ!?カズマさんまた何かやらかしたの!?私が見てないところで、何をしたのどんな犯罪をしたの!?ほら謝って！私も一緒にごめんなさいしてあげるから、ほら早く、誤って！」

「このあほ！俺がそんな犯罪犯すわけないだろ！大体、普段ほとんど一緒にいるだろうが、俺が何もしてないのはお前がよく知ってるだろ！」

「そうだねー、和真君はともかく、僕だったら犯罪を犯す前に望んだことできるからねー。メリツトがないよ」

だろうな、お前物に関してなら願望器レベルだしな。

記憶にあるなら架空の物だつて出せるし。

「お前たちの指示で転送された、機動要塞デストロイヤーの核であったコロナタイトと思われる鉱石。それが、この地を治める領主殿の屋敷に転送されました」

死んだか、その領主とやら。

「なんてこった、俺のせいで領主が爆死しちゃったのか……！」

「死んでいない！勝手に殺すな……！ 使用人は出払っていた上に、領主殿は地下室におられたとのことで、怪我人も出ていない。屋敷は吹っ飛んでしまったがな」

「なんだ、屋敷が吹っ飛んだだけ？ならいいじゃない死んでないだけマシでしょ。世の中には死んだ方がマシな人もいるんだから」

「良くない！貴様ら、状況が分かっているのか？領主殿の屋敷に爆発物を送り、屋敷を吹き飛ばしたのだ。先程も言ったが、今の貴様らにはテロリストか魔王軍の手の物ではないかとの嫌疑が掛かっている。それに本屋の店主は見たこともない爆発物を使ったといわれているしな、どこで手に入れたか、どこにあるのか、はいてもらうぞ」

それお前たちが欲しいだけじゃないのか？ロケランを。

それにあれはもうありません。既に解体済みです。

「なーにを言うかと思えば……。カズマ達は、デストロイヤー戦の功労者ですよ？確かに転送を命じたのはカズマ達ですが……。あれだって緊急の措置ということで仕方なくやったんですよ？何が起ころる前に手をうった、それだけです。褒められはしても、非難されるいわれはありません。何もできなかった貴方たちには特に」

何もしてないくせに偉そうに言われると、殺したくなってくるな。

何かしてたか？こいつら。

「黙れ！…ちなみに。国家転覆罪は、犯行を行った主犯以外の者にも適用される場合がある。裁判が終わる前にまでは、言動に注意した方がいいぞ。こいつらとともに牢獄に入りたいなら止めはしないが」

おもつきし権力を行使してゐるな。

だが、私のような人間いがいの生物にそれは適用されない。

なので、おもいつきし鼻で笑ってやる。

「…サトウカズマ。従魔のしつげがなっていないぞ？」

「従魔じゃねえし、しつげでできる立場じゃないし」

ハッ！私に人間が作った法律は適用されん！なぜ人間なんぞが作った法律なぞに我々が縛られねばならんのか！野蛮とでも呼ぶがいい！所詮それは貴様らが作ったただけだからな！

「この子は、何で私が人間の法律に縛られたりしないといけない？といってるよ。そうだよ。人間法律なんて関係ないもんね」

GJ店主。従魔でも何でもないからな、私は。縛られなんぞしない。

「…野蛮な…」

「ま、それより今ここで僕の無実を晴らしてあげるよ。これ、なーんだ？」

「えっ？そ、それは嘘を看破する魔道具？何で持っているの!？」

「さあ？何ででしょう?… さて、じゃあ言つてあげるよ。僕はテロリストでもないし、魔王軍の手の者でもない。」

魔道具はならない。当たり前である。

「な、なんで?… そうですか。あなたは違うんですね。これまでの態度を謝罪いたします」

「そういうのどうでもいいんだよね、どうせ本心からいつてないだろうし。じゃつ、もういいよね?」

「待つてください。あの爆発物の詳細だけ…」

「企業秘密なんで、じゃあ今度こそ帰らせてもらうよ、タマミツネと一緒にね」  
「えっ、ちよつ!待つ!」

あーれー。まあカズマ少年の弁護人にも、証言を述べることもできないしな。

擬人化?論外。今回は力になれないからな、私は避難させてもらう。

「この裏切り者オ!裏切んのかよー!」

裏切りではない、今回のような事は私にはどうにもできないからな。

「マジか。マジなのか。」

「と、とりあえずサトウカズマ!お前を逮捕する!」

「アツハイ」

くくく

三日たったが、裁判は延期？されたらしい。

ダクネスが交渉したらしい。

ちなみにその間私は店主の世話になっていた。お昼に寿司を食べたりトカナ。話を戻すが、二つ課題が課せられたそうさ。

魔王の手の者ではないと証明することと、領主の屋敷の弁償らしい。

お金が少し足りないため、ウイズの店に何か売るらしい。

ライターとか、私の滑液をシャンプーとして店においてもらうらしい。

裏切りの罰だ！とか言われて、強制的に擬人化させられ、裸にむかれ、かなり絞られてしまった。

もうお媚に行けない。

今はカズマ少年の屋敷にいる、ダクネスはいないが。

「ねーカズマさん。ダクネスはー？まだ帰ってこないの？」

知らん、ほんとどうしたんだ？

「… ああああああーっ！」

「きゃー!?なに!?ちよつとどうしたのよ、いきなり頭抱えて叫ばないでよ!カズマさんがおかしいのはいつもの事だけど、今日は特に色々おかしいわよ!」

突然発狂したりするしな…。 それよりも、めぐみんが抱きかかえている、そのナマモノはなんだ?

鳴き声はアイルーに近いのだろうが、見た目は全く違う。

それに見ているとなんとというか…。 物凄く殴りたくなる。

サンドスターぶつけてやろうか。

「… そいつ飼いたいのか?でもタマミツネいるしなあ…。」

嫌なら出ていくぞ?その時は店主の世話になるだけだ。

「ま、いいか。喧嘩なんてしないでろうし、何より人懐っこいし」

それは私が人懐っこくないといたいのか?

私にとって人は、理不尽の象徴であるハンターを生み出すバケモノという認識だが。

この世界は違うから警戒してないだけで。

「あいたっ!?何でこの子私にだけ爪を立てるの!?何てことかしら、この漆黒の毛皮とい、ふてぶてしい態度といい…。 この子からは、何か邪悪なオーラを感じるわね!」

ラージャンとかアウトじゃないだろうか、その条件。



「なあめぐみん、なんていうんだ？この子」

「ちよむすけです」

……なんて？ちよむ、ちよのすけ？

「……今、この猫の名前なんて言った？」

「ちよむすけです」

うわあ、アクアも大概だが、めぐみんもひどい。

どこかの骨だけの至高のお方にたネーミングセンスだ。

私がそんな名前つけられるくらいなら、擬人化してオークに捕まった方がマシな気がする。

「……この子、メスじゃないの？女の子にそれはどうかと思うのよね、めぐみん」

「だめです。あの子はちよむすけです」

可愛そうにそんな名前をつけられて……。

：　　なんか火を吐いて魚を炙ったように見えたが無視だ。というか生で丸のみするの  
がいいんじゃないか。なんで焼いたし。

「……なあアクア、この辺のネコって火を吐くんだな」

「何言ってるの？吐くわけじゃないじゃない、大丈夫？」

「……忘れてくれ、なんでもない」

「きつと疲れが出たんでしよう。ここ最近色々ありましたしね」

「そうよ。カズマ、あなた、憑かれてるのよ」

大丈夫？元氣ドリニコ飲む？

「サトウカズマ！サトウカズマはいるかあああ！」

ここには誰もいませんよ。まったく近所迷惑な、対セールスマン対策、ジャミラ装置作動！

相手はトラウマを創る！

「!?何ですかこの声!?何で絵画が動いてるんですか!?!」

細工をしたのだよ、あとそれスクリーンに変わったから。

「ひい!?こつち見ないで!?!」

追撃の青い人形、プラスチックA。どうだ？このコンボ、実験は成功か？

「もうやだあ、なんでこうなるのお?」

「おや、泣いてしまったか、撮影されて店主の店に映しだされているとは言わない方がいいだろう。」

愉悦、愉悦言つてそうだ。

「え、ええ？何が起こったんだ？声が聞こえたと持ったら、すすり泣きにかわって：！？」  
こちらが映像になります。

「…… そりや泣くわ。困難泣くしかねーだろ。こんなものいつ設置したんだよ……」  
昨日、店主が三十秒でやってくれました。

「と、とにかく行くこうぜ、あのままにしてられない」

「ぐす…… サトウカズマア！よくもこんな目に！」

「俺じゃない！俺じゃない！俺がやったわけじゃないって！」

さて、どうしようか？このカオス？

## 15話

「おのれえ……！やはり貴様は魔王軍の手の者だろう……！こんな邪悪な罠を仕掛けるなど…… 思い出しただけでも寒気がっ！」

まあ、邪悪だろうな。相手の心に傷をつけるんだから。

というか、何しに来た？大分怒っていたが。

「だからやったのは俺じゃないって……！それはともかく、何しに来たんだ？まだ時間はあるはずだろ？」

「カエルだっ！街周辺に冬眠中だったカエルが這い出している！」

「それが俺たちにどう関係すると……？」

「しらばつくれるな！カエル達は怯える様に地中から出てきたという…… 最近、街のすぐそばで爆裂魔法を連発して、住民を脅かした魔法使いがいたと思ひましてね」

めぐみんはとアクアは にげだした！ しかし まわりこまれてしまった！

「逃げようとスナナ！後始末に行くぞ！」

私関係ないよな？行くけど。

くくく

もう雪以外は目に入らないほど真つ白になっている街の外。

「いやああ！もういやああああ！カエルに食べられるのは、もういやああああ！！」

追われているのはアクアである。まるでチャッピーに追われるピクミンみたいだ。

頑張れ、青ピクミン。水に入っても溺れないんだから大丈夫だろう？

「しかし、このカエルはこの寒さの中でも動きが鈍くならないんだなあ。普段と変わらない速さで活動してやがる。このあたりの連中は、生き物といい野菜といい、どいつもこいつも遅し過ぎやしないか」

それうちの世界で言えんの？生き物かどうかも怪しい連中いるんだぞ？古龍とかハンターとか。

生物と認めたくない奴らしかいないぞ？

「過酷な世界だからこそ、生き物は皆、その時その時を精一杯に生きるのです。私達も負けてはいられませんよ。もつともつと強くなつて、過酷なこの世界を生き抜くの出す」

かっこいい事言ってるが、肩から下、カエルに呑み込まれてる状態だからな。

カズマ少年はアクアを助けてやってくれ。

「わかったよ」

元の大きさに戻る！やっぱりこちらの方がいいな。ずっと小さいままだとだストレスがたまる。

めぐみんを呑み込んでいるカエルの腹に爪でアタック！

更に跳んで後ろに回り込みたい当たり！ついでに泡攻撃。

「ふべっ！」

めぐみんは吐き出されたようだ。

では容赦なく、食いちぎってやろう。

「あ、あなたは、仲間がカエルに追われているのに随分冷静ですね（もう一匹のカエルの惨状から目そらし）」

「そんなこと言われてもいつもの事だしなあ。ソソオゲキツ」

こちらのカエルは完全に力尽きたな、見せられないよ！状態だが。

「あ、あなた方は、いつもこんな戦いをしているのですか？：こ、こんな人たちが、本当に魔王軍の関係者？？」

「あつ、カ、カエルが：：」

新手か、一掃してやろう。水プレス！

「：：：：：なっ!?なんて威力!?三匹いたカエルが真つ二つに：：：！」

あんな、ファンゴと同じレベルの相手を倒すのは簡単だ。  
それよりそこにいる、黒いローブに身を包んだ奴は誰だ？

「ひっ！」

おや、怖がらせてしまったか、私は後ろに下がろう。

「……大丈夫かな？……めぐみん！久しぶりね！今こそあの時の約束を果たすときよ！  
今日こそは、長きにわたった決着をつけるわよ！」

めぐみんの知り合いか。

「……どちら様でしょうか？」

「ええっ!？」

知り合いではなかったらしい。

「わ、私よ私！ほら、紅魔の里の学園で同期だった！めぐみんが一番で、私が二番で！それで、私は上級魔法を使えるようになるまで修行してくるって……！」

「……お前が学園で一番？最下位の間違いじゃないのか？」

「失礼な！私はちゃんと一番です！最初に言ったではないですか！紅魔族随一の魔法の使い手。今なら信じれるでしょう？」

「今のカエルの粘液まみれのお前を見て、信じられるって言うやつ顔が見たい」

「な、なにおう！」

何やらめんどくさそうだ、私は先に帰らせてもらおう。

サラダバー！

「…… 何処へ行くの？。 あっ！ギルドに報告しに行くのね！わたしも行くわ！」

え？そんなつもりじゃないが？

「カズマ、私達はギルドに行くわ。カエル肉が傷んじやいそうなんだから、良いわよね？」

「…… そうだな、じゃあ行ってきてくれ。うまくやつてくれよ！」

「まっかせつなさい！」

ダメじゃないか？それ？不安しくないぞ？

「…… 何か話があるようですね。では、私も今日のところはこれで…… 私は、まだあなたを信用してませんから」

信用ないな。まあ性犯罪をいつか犯しそうなカズマ少年だものな。仕方ない。

「さあ、行くわよタママミツネ！カエルを倒したことを報告するのよ！」

そんな事は知っている！とりあえず放せ、私の滑液がすべて浄化されかけてるから！それ私の武器だから！なくなつたから危ないやつだから！

「むう。分かつたわよ。かわりに私達を乗せてよ、大きくなつて」



それ、更に滑液が浄化されそうなんだが大丈夫か？乗せるけどさあ…。

「ええ、それでいいわ。乗り心地はあまり良くないけど」

そんなのはネコタクか、アプトノスにでも言っておけ。私は本来乗せるモンスターではないからな。

ところで、そのの検察官は乗らないのか？乗らないなら置いていくが。

「あんた、乗ってくの？それとも乗らない？乗らないなら置いてくわよ」

「…えつ。の、乗らせてもらえるのですか？」

「だからそういつてるじゃない。それで、乗るの？乗らないの？」

「で、では、乗らせていただきます…。」

アクアの後あたりの乗れ。落ちるかもしれないからな。

「の、乗りずらいですね…。」

「仕方ないじゃない、元々乗るための動物じゃないんだから」

「そうなのですか？」

「ええ、ただちよつと知能が他の生物より高い、人を超越した存在と戦うことができる生命体よ」

おい、知能は人の物だぞ、そしてなんかその言い方は私が強そうに聞こえるからやめろ。

私は弱いぞ、一回下位装備でぼっこぼこにされたんだからな、武器はG級だったが。「そんな存在なのですか！なんとという…！」

違います。そんな存在じゃありません。ザコです。元の世界じゃザコです。

ところで、今かなりのスピードを出しているんだが、良くしゃべれるな。

「ふふん！そんな存在が私こと女神アクアの神獣よ！すごいでしょう？そんな存在を神獣にした私はすごいでしょう？褒め称えなさい！」

「す、スゴイデスネ…！」

私は神獣になどなっていないし、私はたぶんお前に勝てるぞ、二分の一くらいの確率で。つと、あともう少しで到着だ。しっかりとかなでないと吹っ飛ぶぞ。

「ふっふくん、そうでしょそうd!？」

言わんこっちゃない。見事に吹っ飛んでいったな。あつちはギルドの方向だから手間が省けたが。

「…だ、大丈夫でしょうか？かなりのスピードでしたが…」

安心しろ、あのくらいでは死なないし、ダメージを負ったとしても自分で回復できる。

それはおいておいて、降りろ、もう着いたし、私は街にいる間は小さくならなくてはいけない。

「あつ！ちよつ！ゆ、揺らさないてください！お、降りろつてことですか!？」

そうだ、降りろ。カズマ少年達ならすぐ理解してくれるんだがなあ、経験の差か。「ふっ！・・・ ありがとうございました」

私は本屋に行くか。アクア？自分で何とかできるだろう。

「では、また会いましょう」

カズマ少年達の近くにいれば会えるだろうな。トラブルを起こして。

ではな、会わないことを祈っている。

（（（

残念ながら本屋は閉まっていた。残念だ。

とりあえず屋敷に戻ってきたがどうしようか。ジャミラ装置を更に改造しようかな？

ねないこだれだとか、シオンタウンのBGMを追加するとか・・・。

・・・ 何だろう、最近どうすれば人のトラウマを作ったり抉ったりできるか考えている気がする。

まあいいや。そんなことはどうでもいい。今が楽しければな！

更に装置を作ろうそうしよう。何がいいだろうか？

ハリガネムシとか、蓮コラ、ミイラ人間。たくさんあるな！

ホラーゲームもいいな。侵入者が来たら拘束して口を塞ぎ、延々ホラーゲームや、ホラー映画を見せよう。

いやあ、ここに店主もいれば更にアイデアも出たし、早速実践できたんだろなあ。

そういえば本屋の奥からラピユタ： ロボット： とか、聞こえてきたが何してたんだろわか。

もしラピユタ関係ならぜひ私も参加させてほしいな。

ラピユタは私の好きな映画ランキング一位だ。二位はゴジラ。

とりあえず、案は出るが、実行には移せないな。擬人化したとしても、長年の四足歩行生活に慣れてしまつてうまく精密に手を動かせない。

案を出すことと間違いを指摘することしかできないな、私。

まあそれでいいが。

さあ、更に計画を練るとしよう。

## 16話

「た、ただいまー。うわっ、すごい☒メル!」

おお、帰ってきたのか。……確かカズマ少年はカエルに呑み込まれてないから、ヌメルはずがないと思うんだが。

「……クソオ、こんな嬉しくない抱擁は初めてだぞ」

「もつと喜んでもいいんですよ。ヌルヌルの女の子に抱きつかれるなんて、場合によってはお金を払う人だっていますよ」

「いやタマミツネに擬人化してもらえば何時でも体験できるし、あいつの液体ヌルヌルだけど気持ち悪くならないからちようどいいし」

カズマ少年は何を言っているんだ？自分に纏わせるものを気持ち悪くしてどうする？

「というか抱き着かれたのか、それならめぐみんに付着した粘液がついても仕方ないな。」

「俺が先に入るからめぐみんは後に入ってくれ、お前じやお湯湧かせないだろ?」

「レディーファーストという言葉を知らないんですか?こういう場面では女性に先に譲

るのが常識でしょう?」

「俺は真の男女平等を願う存在。都合のいい時だけ女の権利を主張し、都合の悪い時は男のくせにとか言っちゃう輩は許さない人間だ。それにさつきも言ったがこの風呂は魔力を使って沸かすんだぞ?今のお前の魔力じゃ、せいぜいぬるま湯を作るくらいしかできない。それになレディーとして扱われたいなら擬人化してるタママツネみたいにボンツキュツボンツになってこい!」

「こ、こいつ……!私を子ども扱いしましたね!歳だつて三つしかないのに!それになんですかボンツキュツボンツで!それならいつか私も……!!」

「いつかはいつかだ、俺は今を生きる男。俺の目には、今のお前はただの子供にしか見えん!無駄だ!」

話が長いし何処で口論してる。さつきと風呂に池。

邪魔だぞ、というか汚れる。

「そういう訳だ、一番風呂は貰ったぞ!んん!フウーハハハ!!」

「あつ!待ってください!」

うわ、まき散らしてやがる。これは掃除させるしかないな。

カーペット、椅子、ドア、その他。かなり多く汚れたな。もう捨てるしかないんじゃ

なからうか。

「フハハ！待たぬ！引かぬ！媚びぬう！これから先は有料だ」

「ほんとに脱ぐとか頭おかしいんですか！……そこまで私を女としてみていないというんですか。なら一緒に入ってもいいですよね？」

「そうだな、そうすれば解決だな。何でこんなこの思いつかなかつたんだろうな」

「あれっ!？」

いい加減静かにしてくれないだろうか。こちらら馴れない人間体になってまで汚れ落としてるんだから。

これが終わったら絞ってやろう。干からびるくらいに。金を。

それにしても汚れがひどい。落とそうとしても落ちないし。名前を呼んではいけない黒い虫くらいしぶとい。コックローツチ！

もうこれやっぱ買い替えるしかないんじゃないだろうか。

あつという間にシミになってしまった。

「ふ、ふつうこういう時の流れって、『バ、バカツ、そんなことできるかつ！俺は部屋に戻るぞっ！』とか言って照れて、渋々私に順番を譲るものではないのでしょうか」

「なんで俺がありきたりな流れに乗らなきゃならないの？バカなの？爆裂狂なの？というか死亡フラグみたいのたててんじゃねえよ。俺はそんなお約束に惑わされたりし

ねえからな」

「そ、そうですか。私の知識が間違っていたのでしょうか?…いや、この男が特殊なだけですわ」

「俺は特殊でも何でももない、そこら辺にいる普通の男だよ。ところで、なんで脱衣所から出ていこうとすんの?まさか怖気づいたのか?根性なしめ。そんなんだから子供扱いされんだよ」

そんなこと言っていないでとつとと入れよ。犠牲になつた洗濯物あつたんだから。

…もういいや、突入しようしようしよう。

「うおっ!?…なんだ、タマミツネか。どうしたんだ?」

「見てわかるんのか、洗濯物に決まってるだろ。なんで私がカズマ少年とめぐみんなが汚した物を洗わねばならないんだ」

「えっ、もしかして…まき散らしてた?」

「そうだ、その通りだとも、まだまだあるぞ」

カーペットやら椅子やらな!もうだめだらうあれ。

「何というか…すまん」

「す、すみませんでした」

「大丈夫だ問題ない、あとでたつぷり搾り取るだけだからな」



自腹で買ってもらわないとな。何かを勘違いしてるしてるのか、カズマ少年が顔を赤くしてるが無視だ無視。

というか……

「とつとと入つてその汚れを落としてこい。邪魔だ」

「了解しました！」

汚しに汚しおつてからに……。

〃〃〃

何とか終わった。椅子とかは無理だったがな！

アクアがいれば綺麗にできそうだがな。

「ただいまー、タママツツネエーどこー？あの時のお返しあるんだけどー」

あの時？…… ああ、あの吹っ飛んでいったときか。自業自得ではなからうか。

しつかり掴まつておけば吹っ飛ばなかつたんだから。

「あつ、見つけたわよー。グフフ、ちょうどいい時に擬人化してるじゃない。ほれほれつ  
！」

何だ？それ。ピンクの……ガチでなんだそれ。

「フフフ、あのクソリッチーのところまで言った甲斐があったわ。これ、何だと思う？……正解はね、貴族がメイドに（性的な）罰を与えるときに使う道具らしいわよ？最初に作ったのは黒髪黒目の食べ物のこと以外では怒らない平凡な青年だとか」

明らかに日本人だろそれ。アカン予感しかしない。逃げよう。

「逃げられると思った？残念だけどね、既に結界を張ったのよ！あなたは一応モンスターだから逃げれないわ！」

アクアが有能……だと……？天変地異じゃ！天変地異が起こるぞ！

擬人化してるとアウト？ならばスイッチをオフにすればいいだけだ。

「ええー！!?何で今戻っちゃうのよー！!?理不尽！理不尽だわ！」

残念だったな、そこまでだ。スイッチをオンオフすることくらいはできるわ。

「キィー！ナンデョー！」

運の差。私はそこそこの運を持っていると思うぞ。なんせ今日まで生き残ってきたんだからな。

「……また今度擬人化するときには後ろから突っ込んでやるわ！とところでカズマは？」

風呂だ。めぐみんと一緒にな。

「へえ！カズマさんはロリコンになったのね！」

「ちよつとまあてええええ！誰がロリコンだ!?!」

おう、びっしょびっしょで飛び込んでくるなよ。汚れんだろ。

「誰って、カズマさんしかいないじゃない、他に誰がいるのよ？」

「ほかにもいるだろ！ダストとか！」

「今ここにはって話よ？カズマさんしかいないじゃない」

それより拭けよ。濡れまくってんじゃねーかよ床。

ていうかまず体を拭け、水を切ってこい。

「とにかく！俺はロリコンじゃねえ！ロリコンはダストだ！」

ロリコンなのか？あの名前がごみの人。

「カズマ、貴方にはロリニートの称号を与えましょう！」

「話をキケエ！」

体を拭けえ！

くくく

次の日

アクアの魔法で椅子は綺麗になったので、カズマ少年がマネーを出す必要は無くなった。

むかついたから夜の間ずっとホラー映画見せ続けたけど。  
ちなみに昨日もダクネスは帰ってこなかった。

今は不本意だがカズマ少年と一緒に街をぶらついている。

「なあ、あの子、何してると思う?」

何?…… 何してるとんだらうな。露店をじっと見つめて。

あつ、買ってつた。

「なあ、最近この街の近くに妙なモンスターが出るらしいぞ。何でも、強さ自体はそれほどでもないらしいんだが……」

「ああ、それ、俺も聞いたぜ。変わった姿をしていて、動くものを見かけるとくつついてステラアアアアツ!する奴だろ?」

「何だよそのステラって」

「自爆だよ自爆」

自爆…… お供…… イビルジョー…… うっ頭が……

「…… 妙なモンスターって何だらうな。爆発するらしいし」  
しるか。爆弾岩でも出たんだろ。

「分かんないよなあ…… おつ、射的だ」

射的？高台からファンゴやブナハブラ、イビルジョーを狙い撃つのか？

「いや違うから、そんなことしないから」

違うのか。

「… またあの子を見つけたな。射的にやカップルが多いのに良くいったな」

確かにカップルが多いな。まあ私のようなモンスターには関係ない。

というか私はもうあきらめている。

「よう」

「…？あつーあの、カズマさん、こんにちは…」

いつの間に近づいて声をかけた？

というか何をやる気だ？

「ンソゲキツ」

おい、狙撃スキルはお断りって書いてあるぞ。

「ほら、これが欲しかったんだろ？」

「あ…：…：… ありがとうございま…：…！」

「駄目ですよお客さん。アーチャーと狙撃スキル持ちはお断りって看板に書いてあるじゃないですかあー！景品はあげますけど、料金は倍払ってくださいよ…：…？」

だから言ったのに（言っていない）言わんこっちゃやない。

「じゃ、じゃあ俺はウチのパーティーの連中探しているから。またな」

「ふ、ふぎゆ將軍ありがとうございました！」

「囁んだな。ふぎゆつてなんぞ？」

「お、おう」

くくく

何でこんな見つかからないんだ？あの青髪と帽子は目立ちそうなものだが。

「さあ、次の挑戦者はー！次の挑戦者はいませんかー？」

「何だ？何をやってるんだ？」

「さあ？聞いただけじゃわかんないな」

「おし！次はおれが行ってやる！」

んく？ああ、ハンマーで何かを壊すのか、壊せなかつたらやってみてもいいかな？

「えっ、やりたいのか？でも大丈夫か？」

安心しろ、最近モンスターの部分を残したまま擬人化できるようになったからな。

「チートやチーターやろそんなん！」

なんとも言え。どうやら無理だったようだぞ。やらせてもらおう。

「今回のお兄さんでも無理でした！さあ、次の賞金は一二万五千エリス！参加費は一万エリスだよ！お客さんが一人失敗するごとに、五千エリスが賞金に上乘せられます！腕力自慢はいませんか？魔法を使っても結構ですよ！これが破壊できるものは、一流冒険者を名乗ってもいいと言われるアダマンタイト！さあ、ご自分の腕を試してみたいと思いませんか！」

「どんな冒険者が壊せず散っていくな。壊し甲斐がありそうじゃないか。」

「さあさあ現在の賞金は二十万エリス！この街にはデストロイヤーを破壊した冒険者がいると聞いてやってきたのですが！このまま誰にも破壊できないのでしょうか！」

「頃合いか？行こう。」

「おーっと！次の挑戦者は！女性です！しかもかなりの美女です！果たして破壊できるのでしょうか！」

「……ハンマー軽っ。軽すぎないか？」

「なんと！そこそここの重さがあるハンマーを、軽々持ち上げてしまった！」

「お前は実況兼店主なのか？うるさいんだが。」

「まあいい。ハンマーを振り下ろすだけだ。」

「フンッ！」

「たべえ!？」

他愛なし。ハンターよりは柔らかい。

「は?はあ?ええええええええ!？」

「さて、破壊したぞ?賞金は二十万エリスだったか?」

「は、はい!そうです!どうぞ持ってってください!」

「そうか、では貰っていいこう」

ハンターより柔い鉱石など存在価値がないわ!

「容赦してやれよ、かわいそうだろ」

「このタマレイツォ!容赦せん!... それより二十万エリスを手に入れたぞ、喜べ」

「ああうん、嬉しいんだけどさあ、後ろ見てみるよ」

後ろ?何かあるのか?

「カズマンとこにあんな人いたか?」

「いやいるはずがない。カズマンとこはポンコツだけだろ?あんなしつかりしてそんな人がいる訳ない」

「そうだよな、あんな美人いる訳ないよな」

「おい、いくら温厚なカズマさんでもキレるときはキレるぞ」

温厚?というか事実しか言っていないだろう。



そんなくだらないことは置いておいて行こう。

「あつ待つてくれよ！」

待たない、私達の街探索はこれからだ！

## 17話

予想以上に脆かったな、アダマンタイト。

せめて渓流にある建物くらい耐えてくれると思つていたのに。  
がっかりしたよ、ハンターなら拳で破壊できそうさだ。

「イイ破壊っぷりでしたね、爆裂魔法には及びませんが」

ん？いたのかめぐみん。気づかんかった。

「おお、いたのか。どこいつてたんだ？」

「ちよつとそこまで」

「何処だよ」

あそこにある爆裂屋とかいう露店じゃないか？

店主っぽい人が崩れ落ちてるし。

何をやってたのか凄く気になるな。

「そんなことよりどこ行くんですか？私も同行したのですが」

「何処にも行く予定はないけど……とりあえずアクアを探してる」

「アクアですか？行きたい所があるそうですよ」

「アクアが行きたいところ？カジノでもやってるのか？  
絶対ボロ負けすると思うが。」

「行きたいところ？どんなどこだ？」

「すみませんが私も聞いてませんでした」

「何だろうな、アクアが行きたい所って。」

「……話は変わるが、あの妙に人が集まってる露店はなんだ？」

「あの露店ですか？本やら絵画やら売ってるんです。今はサービスでラプタ？だからピユタ？という名前の物語をTV？とやらで流してるんです」

「絶対本屋の店主が出してる露店だろそれ。」

「それにしてもラピユタか。どのくらい見てなかっただろうか。少なくとも10年は見てないな。」

「久々に見たいし、店主に頼んでみるか。」

「ラピユタ？よし……」

「……手を放してくれないか？ひっぱらないでくれないか？」

「あつ待つてください！」

「久しぶりにラピユタが見れそうなんだぞ！立ち止まれるか！」

「見たい気持ちはわかるが落ち着けよ！私も見たいが！」

『とーきーんがー~~~~』

…… エンディング入ってやがる。これはもう店主に見せてもらうしかないな。

最悪体使つてでも。それ程価値があるのだよ！体使うほどな！

「はいはいもう終わりだよ~~~~。これ以上はもう流せないよー。見たいなら買つてつてね〜」

単体で買つても意味がないだろうに……。

とりあえずカズマ少年を正気に戻さなければ。真つ白に燃え尽きてるよ。

「うふふふふふふふふふふ。うへへへへへええ」

ダメだこれ。完全にぶっ壊れてやがる。どうすれば治るんだこれ？

「ちくしよお。タイミングがア…… おっぱい」

もうどうしようもないな。見せるまでこの調子なんじやなかるうか。

「追いつきましたよ！…… カズマはどうしたのですか？ハツキリ言つて気持ち悪いのですか」

見逃して狂っただけだ。気持ち悪いのは同意する。目がイツちやつてる。

あのカズマ少年がこうなるとは……。中毒性ヤバいな。

「皆さんあの飛行石欲しくはありませんか？機能は再現できていませんが、ここにありませんよ。一つ六千エリスです。どうですか？」

「「「買わせてくださいッッ!!」」」

すげえ勢いだな。いや欲しくなる気持ちもわかるが。

「おおおおお！俺も買うぞッ！」

……これで復活するのか。胸とか揉ませてたらどうなってたんだらうか。

「落ち込んだり発狂したり真っ白に燃え尽きたり……忙しいですね……」

ほんそれ。最近可笑しいよ。

「押さないでくださいーい。ちゃんと並ばねえと売らねえぞ（小声）」

「「「ハイッ!!」」」

もうゴールしてもいいよね……。

~~~~~

というわけなんだが。

「はははっ。僕と君の仲じゃないか、もちろん無料であげるよ。今から行く？」

私としては行きたいが……。

「行きたい……っ！行かせてください……っ！」

「もらえるなら後で見れるでしょう？今は街を回りましょう」

「嫌だあああああっ！クソツッ！魔法職のくせに筋力も高いのかよ……っ！」

大丈夫だろうか。あんな調子で。

…… 私が楽しめる露店はなさそうだから店主についていくか……。

「裏切り者おやおおおお」

何か聞こえたような気がするが気にしない、気にしない。

「ほかにも作ったよ。それに、ロボット兵再現できたんだ。おかげで最近寝てないよ」

何してんだ。寝ろよ。いや再現できたのは凄いけどさ。よく仕事できるな。

「ところでイイ絵の題材無い？もう本より絵を作ろうと思うんだ」

本は神器でコピーすればいいだけだろう。お前の神器ほほほチートだろ？記憶さえあればいいんだからな。

「生命体もコピーできればいいんだけどね。そしたらタママツネやカジートとかのハーレムを……」

何考えてやがるし、ハーレムで、ハーレムで！

というかタママツネはオスしか出てないから無理だろ。

「素材が近くにいるじゃないか。擬人化してればメスだし」

それ私の同一タマミツネ物ができるのだが。

それとメスじゃない、オスだ。断じてメスではない。

なんで擬人化するとメスになるんだ。可笑しいやろこんなん。

「うおお」

ん？何か聞こえたような？

泡でも捲いておくか？でも迷惑になるしな……。

「うおおおおお」

完全に聞こえた。ていうかカズマ少年の声じゃないか？

何してるんだ？めぐみんに連れてかれたよな？

「うおおおおお！見せろおおおおお！」

もうキャラ崩壊ってレベルじゃないよな。誰だお前。

顔が完全に人じゃなくなってるぞ、例えるなら竜だ。

「……どうしてあんなったんだい？あんな顔になるくらいジブリに飢えてたの？彼

は」

いやどうなんだろう？ここ来る前は引きこもりみたいだったからなあ。ゲームやテレ

ビに飢えてたのかもしれない。

引きこもりにネットは必要不可欠だと私は思うからな。

「ええ……」

店主が引くレベルでひどいのか。あの他人の不幸で飯がうめえ！な店主が。

「待ってください！待ちなさい！」

めぐみんのステータスを上回るテレビやゲームへの欲望。

「待たない！待てない！街なんかよりジブリだ！ゲームだ！せつk「それ以上はいけな  
い」」

薬でもやってるかのような錯乱ぶりだ。これはもう見せるしか治らないな。ダクネスのことでイラついてたしな。

「……ハア、もういいです。分かりました。私も見ますから」

「えっ何で？」

「あなたは……！！」

一人で行くのは誰でも嫌だろ。

「僕の家で見るけど、少し狭いから気を付けてね？」

嘘をつくな。あれ完全に外見と中身が合っていないだろ。

何で一軒家くらいの外見なのに、中は豪邸顔負けの広さなんだよ。どうやったんだよ。



店主の神器でもどうにもできないだろ。

「見れる、見れるぞ…！ 伝承の通りだ…！」

「伝承って何ですか」

見るまで治らない病にかかってしまっているだけだから安心しろ。

「ジブリ全部出そうか。あとゲームも」

「ビヤツハーツ!!」

世紀末かよ。

「どうしてこうなったんですか…」

私も知らん。

このあと皆で仲良く（アクアはいない）見ました。

## 18話

「もうね、本屋を辞めようと思うんだ」

いきなりどうした？それに本屋を止められると私が困るんだが。

店主が辞めたらどこで地球の本を手に入れられるというのか。

「いや本と絵を売るのがやめる訳じゃないんだよ。昨日ラピユタを流してたりしてたでしよ？それで、本以外も売ろうかなあと」

それならいいんじゃないか？繁盛するだろう。

「でね、何を売ろうか迷ってるんだ。記憶さえあれば架空の物でも出せるからね」

もうウイズの店を潰しにかかっているよな。

記憶さえあればいい訳だから、安く提供できるし、量産できるからな。

もう潰れるんじゃないか？ウイズの店。

「食材売ってもいいし、宝石を売ってもいい。武器や防具もあるしねえ……」

とりあえずで武器防具売ったらどうだ？ダメだったら別のに切り替えればいい訳だし。

「そうだね。じゃあ武器はエクスカリバーとかレイピア、カトラス、刀、マスターソード、スキアヴォーナ、三日月刀、アルタイルの剣……は売らない、ピストルソード、特別に天叢雲剣（大神）、そこから辺をおこうか、で防具はどうする？」

防具？無難に騎士甲冑とかでいいんじゃないか？

「騎士甲冑？それもいいけどなあ……。うーん、はがねのよろい、古強者のよろい、げんまのよろい、さびついたシリーズ、エルフ装備、古代ノルド、ミラルーツ一式、ミサグリア家一式、板金の一式、ローマー一式、一番いい装備を頼む、そこからへんでいいかなあ」

防具は多いからな、迷うのもわかる。ていうかアサクリ多いな。

かっこいいのが多いけどさ。アサブレとかエデンは？

「アルタイル一式とエデン、アサブレは僕か、君にしかあげないよ。もつたないない。」  
信頼されているようでうれしい。擬人化するときにはアサブレをずっとつけよう。

むしろ、付けるためにずっと擬人化してるのもありか。

「まあそこからへんでいいね、じゃあちよつと出すから離れててね」

了解した、少佐殿。

「ふうう……。ぬわーっつっ!!」

何だその掛け声、どこのぬわスの断末魔だ？

それにいつの間にか周りに出してるし。

「終わった終わった、後は倉庫に運ぶだけだよ。手伝ってくれない?」

OK OK、喜んで手伝おうではないか!

その前に魔力を注いでくれないか?魔力で擬人化してるから……。

「はい、魔力タンク、これで擬人化してね」

ありがとう、店主。

〃〃〃

大体三時間後

オオオ… 腰が痛い、あの程度の重さなど重く感じすらしなのに…… 何故だ……。

持ち辛かったがそれは関係ないだろうしな……。

「お疲れ様、全部持たせてごめんね、僕は筋力のステータスは低いんだ。代わりに知力とか器用さとか幸運はカンストしてるけど」

偏ってるな…… どうやったカンストさせたんだ?

「いやほら、ドラクエに種があつたよね?あれとポケモンのやつとかをたくさん……」

よく実行しようと思つたな、種はまだわかるがポケモンの奴は人間用じゃないだろう

に。

「おかげで今ならISでも作れそうだよ」

やめろ、作んなバランスが崩れる。いろんな意味で。

いやまあ生物以外いくらでもコピーできる時点でバランスブレイカーだけでも。

「ついでにオバキュームとかも作ってみた」

既に作ってやがってた、ていうかオバキュームとかゴースト系には大ダメージになるだろ。

「オバキュームは便利だよ、ネズミやクモが出ても吸い込んで消滅できるからね」

消滅するのか… それ… 小動物にも天敵じゃないか…。

ていうか構造どうなってるんだよ、おかしいだろ。

「そんなことは置いといて、値段をどうしようか、全部5万エリスでいいかなめんどくさ  
うっ」

そこらへんでいいんじゃないか？ 私は相場とか知らないしな。

「おっじゃましまーす」

ん？… ああ、カズマ少年か。

「おお、店の内装が変わってる、本コーナーは何処だ？」

「あそこの角を四回曲がった先だよ、行ってらっしゃい」

「そつすか、ありがとうございます」

どうせエが付くほんを買いに来たんだろうな。

いや？もしかしたらライターとか文明の利器の作り方が載ってる本を探しに来た可能性も？

まあ関係はないか。

「そういえばあのクルセイダーの子、最近見ないね。どうしたの？」

法廷でペンダントを出して判決を延期にしたとかなんとか。それで領主のところに行つたとか。

後は知らん。

「へえー、ペンダントで判決を延期かあー、貴族だったのかな？」

じゃないのか？私は見てないからわからんが。

「ふうーん、まあ僕には関係ないか」

そうだな

パーティー組んでいるわけでもないしな。ただ知り合いなだけだし。

入ってくれるなら大歓迎するが。

「入ろうか？僕としては入ってもいいけど」

入ってくれるなら入ってくれ。負担を減らせるし、話相手が増える。

私達にはメリットがあるが店主にはデメリットしかないがな。

「まあデメリットがあつた方が面白そうだしね」

そんなゲームみたいに言うな。一応現実だぞ、此処は。

「それは知ってるけどね、こんなファンタジー溢れる世界が現実っていうのがねえ」

いや結構ファンタジーだけでも、私の世界の方があれだぞ？

「モンハン世界は物理法則その他諸々が仕事してないからNG」

確かに仕事してないな。何で隕石食らって五体満足でいられんの？

ハンターは体可笑しいよ。呑み込まれても無事だし。

「ダクネスもそれくらいの耐久力はあるんじゃない？少なくとも呑み込まれても大丈夫そうだし」

ダクネスでもあの耐久力はないだろう。ラオおじいちゃんのパティータックル食らつても生き延びそうだが。

シエンガオレンとかそのくらい巨大な生物の力のこもった攻撃食らつて耐えられるって地球上の生命体じゃありえないよな。

「サイヤ人とかなら耐えられるんじゃない？」

あんな星破壊できるようなバケモンと比べんな。

あんなのと戦うくらいならラージャンと戦う方を選ぶわ!

「モンスターからすると小さいうえに素早いからねえ、クソゲー以下なんじゃない?」

クソゲー以下だろうな、アリの数百メートル先から撃てて言うてるようなもんだ。ゴルゴとかならできそうだが。

「あくゴルゴならできそうだねえ僕あんまり知らないけど」

私もあんまり知らない。

「それにしても誰もこないね、やっぱ宣伝した方がいいのかな?」

本屋から雑貨屋に変えたことは伝えておいた方がいいぞ、というか伝えてすらいなかったのか?

「忘れてたよ、じゃあ今からばら撒いてくる、小型ロボット兵が」

お前じゃないんか、とゆうか小型ロボット兵ってなんぞ?

ロボット兵を小さくしたのか?

「そうそう、縮めて脚をキャタピラにしたんだよ。耐久性は本家と同様だよ」

量産はしてないだろうな?してたらもうアクセルが減ぶぞ?

「残念ながら生命体扱いでコピーできなかつたよ。量産したかつたなく。出来たらラピュタを作ろうと思ってたのに」

魔改造されそうだからやめろ。材質がオリハルコンでできたロボット兵とか作りそ



うだからな。

やめろよ？ やめろよ？ オリハルコンで作った○○とかできてそうで怖いわ！

「おお、それイイね。採用しよう。オリハルコンで作った弾丸とミニガンとかどう？ あとはコーティングしたアサブレとか」

やめろ！……銃はやめろ、アサブレはいいと思うよ？ でも銃はやめろ。盾とか鎧とか余裕で貫通するだろうからやめろ！

「いい案だと思うけどなあ。デストロイヤーとか余裕で蜂の巣にできると思うよ？ 魔法じゃないし」

デストロイヤーを爆砕したのは誰だ？ お前だよなあ？ あとカズマ少年とかもいたけど。

「僕だったらデストロイヤーを再現できるから問題ない。コロナタイトもコピーできるし、材料を変えて魔法も物理も効かない、空を飛ぶ、ぼくのかんがえたさいきょうのですとろいヤーを作れるよ？」

やっぱお前チートだな、そのうちACやらIS、IM、ガンダム作っても私は驚かないぞ。

「それほどでもないよ、今僕が作れるのはISかIMだよ。ガンダムとかは作れない。作る気ないけど」

作る気ないのか。まあファンタジーにSF入れるのはなあ。私としては余り好きではないな。

何というか、ファンタジーはファンタジーで、sfはSFでやれって感じがしてなあ。「僕はどっちでもいいね。まあ、混ぜるだけ混ぜた駄作は好きじゃないけど、むしろ消滅してほしいね」

そこは私も同意だな。要素が多過ぎるのは好きじゃない。かといって少なすぎてもなあ。

…… あれ、何の話を最初にしてたんだっけ？ 貴族？

「ダクネスって子の耐久性の話」

そうだったっけ？ ダクネスはあつてると思うが…… まあいいか。

耐久性は人間の中ではピカ一だろう。

「じゃあロト一式着せたらどうなるかな？」

モンスターにとつての悪夢が始まるだろうなあ。

幾ら攻撃しても傷つかないで逆にこちらが傷つくことになるというひどさ。

絶対戦いたくないな。私は泡とカニまみれさせて逃げれるが。

「僕だったら拘束して二十四時間ホラー映画鑑賞、ホラーゲームプレイかな」

身体的ではなく精神的に追い詰めていくのは常套手段。

「それ以外にもあるよ？ 例えば——」

この後滅茶苦茶おしゃべりした。

## 19話

昨日のおしゃべりの後、無限アイテムボックスとかいうのを貰った。

手のひらサイズで見た目は宝箱っぽい。

手のひらサイズなのにそれより大きい鎧とか武器がいくらでも入る。

どうなってるんだよ。いやモンハンでもアイテムボックスに入りきらねえだろってのはあったが。

あれとおなじ構造でもしてんのか？だとしたらどう作ってたんだか。

それはさておき、今私は擬人化している。昨日貰った武器や、アサブレを装着してみるためだ。

作中ではサクツとつけたりしてたが、私にはちよつと難しくくて、少し時間がかかる。ちなみにエツイオの方。

逆に防具はあつという間につけ終わったが、何だこの差は、そうたいして差はないはずなのに。

まあいいか。

あとボックスと武器防具以外にも色々貰った。

マナタイトとか等身大エリス様人形（キヤストオフ可能）、オリハルコン塊、何か願いを叶えてくれる大彗星を呼び出せそうな星たち、青いオカリナ、ワー〇スター、??でできた頭蓋骨。

そんな感じのもの。何故こんな統一性が無いのか。

ちなみにエリス様人形はカズマ少年に、マナタイトはめぐみんにあげた、いらぬいし。エリス様人形を貰ったカズマ少年の顔はヤバかったな。直視できないくらい。どうするのか聞いたら、部屋に飾っておくそうだ。あと絶対に売らないとも。

「それを うるなんて とんでもない!!」

そんな事言い出しそうだった。まあ今にも動き出しそうなくらいの完成度だったしな。惜しむのもわかる。

だがギルドに自慢しに行こうとするんじゃない。部屋に飾っておくんじやなかったのか。

これで昨日の事は終わりだ。

何故こんなことを言っているかというと……。

ダクネス似の美女がカズマ少年らと何かを話し合っているからだ。

仮にあれをダクネスとすると素材の良さがわかるな、性格で台無しだが。

「だくねす……、お前、よほど良い仕事してきたんだな……。苦勞を……かけたなあ……」  
「何を勘違いしてるんだお前たちは!? 私は領主に変なことはされてないし、このドレスも自前だ! もしかして領主に弄ばれてるとでも思ってたのか!」

「そうだよ、今頃エロ同人みたいに! されてると思ってたよ……。で、そのドレスが自前? 貰いものじゃなくて? いかにも高いですって言うてるようなドレスを買ったのか? お前が? コスプレか? 新しいジャンルでも開拓するつもりなのか? お前は何処に行こうとしてるんだ」

「違うっ!! コスプレじゃないッ! それと何処にも行こうとしてないッ! ……心配をかけたのは悪かった、あの領主にも、私相手にそこまで言う度胸はない、あるのはカズマだけだ……。それよりも、まずはこれを見てくれ!」

サラツとカズマ少年が度胸あるように言ったが、ただ周囲とズレてるだけだぞ。  
後なんだそれは、写真か? 写真なんてあるのか? ……店主が売ってそうだけだ……。

「……何だこれ? おお? 何だこの爽やかそうなイケメンは? ムカツクゼ」  
びり……

「ああ!? 見合い写真に何をするだあ! そんな事したら、見合いを断ることができなくなるだろうがっ!」

「おお？すまん、つい、手が滑った。なぜだろう、自分でも手が無意識に……。ん？お見合い写真？」

へえー、見合いねえ？クツソつまらないだろうな。

少なくとも私は見合いなんぞしたくない。

「そうだ！アルダープめ、小賢しい手を使ってきた！言うことを聞くとは言ったものの、無体な要求をしてきた場合には、我が父に即座に話を蹴られるだろう。それを分かっていたからこそ、私はああいったのだが……」

「ちよ、ま、待てよ、ちゃんと説明しろよ。このイケメンは誰なんだよ？ていうか、望まない相手との結婚だつて十分に無体な要求じゃないのか？そもそも、あのぶ……領主と、見合い写真のイケメンにどんな関係があるんだよ。ていうか嫌なら、その、ダクネスの父ちゃんに断ってもらえばいいだろ？見合い写真は今なおスカラ。アクア、悪いんだけどご飯粒持つて来てくれないか？」

「はいはい」

「まあ、なんだ？その、座れ」

私も参加した方がいいのだろうか？だが人間じゃないしな。擬人化はできるが。

「ああ……。あの見合い写真に写っているのはアルダープの息子だ。アルダープめ、自らが私との結婚を申し出ても話を蹴られることは分かっていたのだろう。だが、私の父

はアルダープの息子の事だけは高く評価しているのだ。それで、その、今回の結婚に一番乗り気なのが父なのだ。オンドウルルラギツタンディスカー!……ゴホン、アルダープが、なぜ自分の息子と私を結婚させたがるのかが理解できないのだが……」

さあな、毎日視姦できるとでも考えてるんじゃないか?クスで狡賢いデブのモスなのだろうか?そのアルダープとやら。

もしくは、何か意識とか何かを取り換える魔道具でも持っているかだろう。

「……まあ取り合えず座れよ。そこにソファアがあるから」

「う、うむ……ん?これは何だ?設計図か何かか?」

「そうだよ、お前がいけない間に色々金策を練っていてな。これは魔力が無いやつでもティンダーを使えるようになる便利アイテムの設計図だ」

「ほう?そういえばカズマは幸運値が高かったな。確かに、商売をするには向いているかもしれないな」

「俺の運がいいなら何で借金とか負うんだだろうな。それにもつと役に立つ仲間恵まれるはずだし、揉め事にも巻き込まれないはずだよな?甚だ疑問だよ」

「そうだな、幸運が高ければもつとお金も稼げているだろうし、今日を逸らしている奴らにも会わなかっただろうな。」

あと私にも。



「い、今こうして、私が見合い話に悩まされているのは、実はカズマを庇ったことが原因な訳で！いやもちろん、それで恩に着せる気は無い！なにせ、仲間というのは助け合いが大事だからな！普段迷惑掛けている分、こうして私が助けることも当然だと思うのだ！」

助け合う？そうか？私があるとあるパーティーに遭遇した時には、二人くらいハチミツ取りに行つてたり、関係ないところでハンマーをグルグル回してたり、はちみつください、粉塵使え、とか言つてたぞ。

全く助け合いなどしていなかったぞ。

「わ、私はこれからゆんゆんとの約束があるのですよ！カズマの疑いを晴らすためにですぬ！ゆんゆんと共に知恵を絞ろうかと！ええ！」

目が逸れまくつてるし泳ぎまくつてる。クロだな。

出掛ける用意をしてるのは逃げるためか？

「なんか、カズマへの疑いは二人がどうにかしちやいそうだから、私はトイレ掃除でもしてこようかしら！特に思うところはないのだけど、なんだかトイレが気になるからね！水回りの事は私に任せて頂戴！」

トイレ？水の女神を辞めてトイレの神様にでもなるのか？

「ふ〜ん？タマミツネは？何かあるのか？」

何もないが？私に伝などないし、出来ることといえば店主との仲介か、何かを狩ってくるくらいしかない。

転生前こそヒトであつたが、そのころの感覚などはとうに消え失せている。私に期待するだけ無駄だ。

「……ごめん、何考えてるか分かんないわ。というか擬人化してるんだから喋れよ」

喋るのがめんどくさい。それに普段から私の考えてることわかつてるみたいなきん動してるから喋らんでもいいと思つたのだが……。まあいい。

「私に期待するだけ無駄、といつておこう。ヒトではない獣だからな、やれることは少ない」

「そうか？店主とかのコネを使って何かできそうな気もするけど」

残念ながらコネなどないのです。コネなんてなくとも生きていけるし、その気になれば世界中のエリスを牛耳ることもできるからな。ていうかこの街以外つながり無いぞ、店主。

「……そうか」

やっぱり読心でも持つてんのか？それとも顔に出ただけか？

私のプライバシーを侵害していくスタイル。人間じゃないから憲法とか法律とか適

応されないけどな!

「そ、その、話を変えてしまうのだが……。私がこのところ帰つて来なかつたのは、ほとんど進められる見合いを、どうにか阻止しようと頑張つていたからなのだ……。今日私がここにきたのも……。み、見合いが今日のお昼からなんだ。もう本当に時間がない。本当に申し訳ない、が誰か一緒に来て、父を説得してくれないか?」

ええ〜〜?よし、頑張れ、応援しているぞ。私は役立たずな獣だからな、行かなくてもいいだろう。

貴族の家に獣の居場所はない。まさにのけもの。

とにかく私はいかんぞ。これは絶対だ。

## 20話

【きちくおう からは にげられない！】  
これが先ほど私が学んだことだ。逃げようとしたら逃げるコマンドを潰してきやがった。

攻撃はできず、防御と回避しかできない。勝てる訳ないだろこんなクソゲー！  
更に何を言ったかは知らないが、アクアを味方につけやがっておりましたよ。

勝てる訳も無く、現在私はカズマ少年によって連行されている最中だ。

しかも擬人化するための魔道具である首輪に鎖を繋いで。

鎖でつながれてるので逃げることもできず、引つ張られていくのみ。

子供には変な目で見られるし（カズマ少年にはまたか、というような視線を向けていた）冒険者達には特殊なナニカでもしてるのかというような視線が飛んでくる（カズマ少年にry）

気分はまさに売られゆく奴隷だ。いや、従魔か？

ドナドナドーナー…。

ついでだが、店主も同行している。本人曰く、香辛料臭い目が死んでる神父のような

ラーメン屋の店主が教えてくれたらしい。あとマーボーを奢られたとも。ラーメンじゃねえのかよ。

「此処だ。此処が私の実家だ」

そんなことを思ってるうちに着いたらしい。

うん、デカいし豪華。こういう建物を見るたびラオおじいちゃんやらクシヤルやら蠟螂が襲っている姿を想像してしまう。

「おお・・・デカいな」

「大きいねえ、リフオーム爆破したいねよ」

何か副音声で別の事いったような・・・緑色の奇怪な生命体が駆け付けてきそうだ。

「ぼさつとしてないで入ってくれ」

「お？おおそうか。お邪魔しまーす」

「お邪魔させていたどころ」

うむ、中に入ったが、やはり豪華だ。だがどつかで見たことがある絵やら本、PLU CKという文字が彫ってある剣がある。

首のない黒いマネキンがあるし、壁に半分白で半分赤色の追いかけてきそうな仮面と、血をかけると骨針が出てきて吸血鬼になりそうな石性の仮面が飾ってある。

どう考えても店主の店にありそうな品ばかりです。本当にありがとうございます。

「あくあの執事っぽかった人、此処の人だったんだね。何で無個性買ったのかは分からないけど」

「やはりあなたの店の品だったか。ある日突然執事が逃走を始めてな。本人曰く、神秘を感じたとか」

「狂ってないか？その執事。何だ、神話生物にでもあったのか？それとも頭くるくるぱーにでもなったのか？」

どちらにせよ、アレなことに変わりはないが。

「なんだそれ？神秘？」

「きつとその人は悪魔に憑りつかれているのよ！待ってなさい！私がすぐ浄化してあげるわー！」

「それはない。お前はじつとしてるだけでいい、余計なことをしないでくれ」

「頭が可笑しくても、お得意様になるかもしれないからそのままにしておいて欲しいけどね。僕にとつては」

悪魔はないだろう。貴族の使用人だ、念入りに検査とかされてるだろうさ。

「それは置いておいてだ、これから我が父に会う。粗相をしないようにしてくれ」

「ok」

「了解よ」

「はいはい」

「本当に分かつているのだろうか!？」

「分かつてる分かつてる。親父さんを説得すればいいんだろ?俺達に任せとけって」

「頼むぞ、本当に!」

〃〃〃

あの後面会し、何故か臨時の使用人として働くことになった。

他の面々は執事服やらメイド服なのに私は和服である。一人くらい和服がいたっていいじゃない!とかカズマ少年が言ったせいだ。

良くねえんだよ、こっちの気持ちも考えろや。浮いてんだよ周囲から。

※因みに着物は店主が一秒で用意してくれました。ついでに鎖もまだついてます。現在は屋敷玄関の前に並んでいる。

見合い相手を出迎えるためだそうだ。めんどくさい。しかも時たま通る黒髪黒目学生服の連中にギョツとした目で見られる。

洋服着てる奴らの中に一人だけ和服いたら驚くわな。しかも鎖付きの首輪付き。

驚かない方がおかしい。

「でも似合ってるよねえ」

だまらっしやい店主。首輪が似合つてるとか言われて嬉しい訳ないだろ！いい加減にしろ！ていうか執事似合い過ぎだろう！？

「しかし… お前が…」

ダクネス達が何か話してるが無視だ、聞く必要もない。

話を戻すが首輪が似合ってるなんぞ言われても私は嬉しくはない。

それで喜ぶ強者トもいるのだろうか。

首輪つて拘束するためとかその辺のものだろう。私はそんなことされたくないの  
な。残念なことにつけられてしまっているが。

おや？ようやつと見合い相手が来たようだ。

周りに護衛か何かを連れて。

「貴様がこの私の見合い相手か！我が名はダステイネス・フオード・ララティーナ！私の事はダステイネス様と呼」  
「おつとアブナイお嬢様っ！頭の後ろにさす虫が止まっておりますっ！！」

べしっ！

「ぬ!？」

…  
何をしてるんだか。



くく

カズマ少年がダクネスの頭をひっぱたき、奥に引つ込んだ後、私と店主はお茶を出したりしていた。

紅茶と緑茶、どっちも出しましたとも。毒入れてないか疑われたけどな！

※因みに店主が r y

緑茶無いんだな、この世界。私が住んでいた溪流にはお茶なんかを携帯していた奴もいたぞ（防具無し凄くさびた片手剣）そいつがどうなったかは知らんが。

： 話が逸れたな。お茶を出した後、特に何もせず後ろに控えている。

だつてやることがないんだもの。他の使用人たちが仕事をすべてやっているからな。

： 寝てしまうか？目を開けたまま寝ればばれないだろう。

店主も何やら小さな機械をいじくっているしな。

よし、寝てしまおう。無礼に値するんだろうけどね！

じゃあおやすみ。

くく

「……バルター殿、こちらへ。客間に行きましよう」

ハッ！ ……移動するのか。これは私と店主も移動しなくてはいけないパターンか？

……ああ

うん、そのパターンだ。先程からカズマ少年が視線で訴えてきている。ぶつちやけ四人もいらなと思うのだよ。私は。店主は知らん。

「あの、そちらのお二人はどうなさるのですか？先程からピクリとも動いていませんが」  
ん？ああ。安心なされよバルター殿！我々はここで待つているので！

ていうかここにいさせてくださいお願いします。

「む？そうだな。…では二人にもついてきてもらおうとするかね」

そんな殺生な！…むう、命令には逆らえないよなあ。

嫌だがついていこう、本当に嫌だが。

ここまで来て言うのもあれだが、家に居たかった…。

## 21話

「お強いですね！ではもう少し強くいかせてもらいましょー！」

ドウシテコウナツタ。私は後ろに控えてただけなのに！

何故この貴族のお坊ちゃん木刀で勝負する羽目になつて居るのだ！

ええい！これも全部後ろで笑つて居る奴らのせいだア！

ここまでの流れを説明すると↓ダクネスが我慢しきれなくなる↓木刀での訓練を申し込む↓カズマ少年が便乗して私を先に戦わせようとすると↓そこに店主も便乗↓バルター承諾。

といった流れだ。

私を倒せば次はダクネスが直々にやるとかなんとか。

最初から自分でやれよ、私巻き込むなよ。そして店主、時のオカリナっぽいやつ出して何をするつもりだ。

……嵐の歌とかサリアの歌演奏してんじやねえよ。てゆうかうめえなこの野郎。

閑話休題

バルターとかいうコイツ、何気強い。ハンターよりは弱いが。

擬人化してる私は筋力とか、動体視力とかが落ちるので少し押されている。

筋力が足りないから受け流すことしかできない。一回攻撃したけどカウンターから

いかけたし。スキルって良いよなア！一瞬で技術習得できるんだもんなア！

ダクネスと違って擬人化してる私は耐久が低いんだよ！一発貫つたらアウトなんだよ！

この状態でハンターから攻撃食らったら尻尾の如く斬れて吹っ飛んでいくのは間違いない。

そのくらい脆い。石ころ投げられて全部位破壊されるくらい脆い（ハンターの筋力で投げられた場合のみ）

それにしても速いなコイツ。速度のみハンターを上回っているんじゃないか？

突進してくるドスファンゴ並みの速度と追尾性だ。

そのまま壁にぶつかってバルターハート落とせばいいのに。

…ダメか、Uターンしてきやがった。もうこいつがドスファンゴでいいよ。

うん、もう目の前に居やがる。あつ、木刀撥ね上げられた。これはもう無理ですな。

ウウエイ。たわらばっ！ぶげえ！こ、こいつッ容赦なく顔をツ…！

「あつ…も、申し訳ございません！女性の顔を傷つけてしまうなどっ！」

… 絶対元に戻ったら頭部位破壊されてるだろうな。痛い。やっぱ脆すぎんだろ。着物でそこそこ動けたからまあいいか。対人戦の練習になったし。

「本当に申し訳ございません！責任を取らせていただきますたい！」

「… いらぬ、全く持っていない」

「え」

「店主、回復薬か何かを作ってくれ」

「はいよ」

「バルターm… バルター殿もダクネスとの訓練があるのでですから休憩なされたらどうです？」

「え… あつはい？」

責任を取ろうとしているのはわかるがいらぬ、全くもっていない。貴族が責任を取るってなんか嫌な気がするからな。

そんなことよりダクネスに精神をぼっこぼこにされて来い！

女性を傷つける事が嫌ならダクネスは天敵だろう。恨みはないがぼっこにされて来い、精神を。恨みはないがな！

（（（

ダクネスと訓練して惚れたとかなんとか。

何があった。私は回復薬とか秘薬とかがぶ飲み&ぶっかけられてたから訳が分からんぞ！

部位破壊されてたのが治ったからまあいいよ？でもアオキノコとマンドラゴラ飲みせようとするな。

キノコ大好きスキルなんてついてねえんだから回復できるわけないだろ！

現在はカズマ少年とダクネスがなんかしてる。

組み合ってる、とっていいのだろうか。あれ。スキルか何かを使っているのはわかるんだけどなあ。

そういえば木刀での訓練だったhas。なぜスキルを使っているのだろうか。ステータスが低いからか？

あつ崩れ落ちた。服はボロボロあざだらけ、びしょ濡れで座っている状態だから事情を知らない人に見られたら終わるな。

「修練場にいると聞いて、ちよつとした飲み物の差し入れを…」

終わったな（確信）

現に飲み物が入った籠を落としてるし。使用人達はぼかんとしてるし。

カズマ少年達とは離れてるし荷物持ちしてるから巻き込まれないだろう……。だからそんな視線を向けないでくださいお願いします。

アクア先生！なんか言つてやっってくださいよオ！

「……あいつらがやりました」

そういつて男三人衆を指さす。

店主関係なくね？見てただけじゃね？見ていただけだったからアウト？アツハイ。

「よし、こいつらを処刑しろ」

「違うんです、誤解です！」

くくく

バルター殿とカズマ少年は必死に説得して、事情を説明して事なきを得たらしい。

店主？論破してました。反論を一切許さずに。

ついでに自己紹介のようなものをした。バルター殿はカズマ少年とアクアが使用人ではないことに気付いていたらしい。

店主と私には気づいていなかったらしいが。店主はともかく私は違うつて明らかに分かるだろうに。

違和感しかないだろ、一人だけ和服だぞ。メイドの中に和服が混ざってるって違和感しかねえだろオ。節穴か？目。

そんなことは置いといてだ。肝心のダクネスだが、カズマ少年が訓練の最中ナニカしたので眠っている。

で、私達は応接間に通されてダクネスの寝顔を見ている。

「娘は元々人付き合いが苦手な方であ…。それは、身内に対してもそうだった。カズマ君、君は娘と同じパーティーなんだろう？娘はあまり、自分の事をはなさなかつたんじゃないか？」

コミュ障ですわわかります。私も前世はコミュ障だった記憶があるからな！同類だ！異性は無理、話しかけれん。

とか何か何を話せばいいのか分かんなくなっちゃうよね。あと声も小さくなる。

今世では治ったけどな！寧ろ悪化するはずなのにな！

「娘は、クルセイダーになっても一人きりでなあ…。毎日毎日、エリス様の教会に通い詰め。冒険者仲間ができますようにと、エリス様にお願ひしていたのだよ。そんなある日、教会からの帰りに娘が、初めて仲間ができた、友達ができた、盗賊の女の子と仲間になったと喜んで…。」

ドMさえ隠せば仲間ぐらいできそうなものだったがな。素材は良いんだし。



初めての友達なんて思い出せそうに無いな。何年前だろうか。

自分は友達だと思つても相手はそう思つてないという事があるよね！

「うちは、家内を早くに亡くしてなあ……。それから、新しい妻も娶らず男手で、甘やかしながらとにかく自由で育ててきた……。それが、悪かつたんだらうなあ……。」

自由に育つてきて、良く異世界ファンタジーにいる貴族の坊ちゃんみたいに傲慢にならないよなあ。

普通は傲慢でクソみたいな性格になると思うんだがなあ。

某わがままのお姫様みたいに。ラージャン狩つてこいとか言つてくるあの第三王女みたいに！

何度それで私が狙われたことか！ちよつと傷ついてた旅人に薬草エキス入りの泡をぶつけただけだろ。

何で珍しいタママミツネがいるとかになるんだよちくようめえ！

：ふう……………。

「ララティーナ様は、男勝りですが素晴らしい女性だと思えますよ？カズマ君がいなければ、僕は本気でララティーナ様を妻に貰いたいと思つています」

頑張り給え、私は応援しているぞ。カズマ少年は喜んで君に譲<sup>を譲にする</sup>るだろう。

ダクネスのストライクゾーンに入るとどこるか逆方向に向いてるけどな。

「すいません、ちよつとなにいつてるかわかんないです」

「いいんだ。君の方が、ララティーナ様を幸せにできるだろう。君たちの信頼関係はしっかりと見させてもらった。君たちは、お互いに愛し合っているんだろう？」

「よし、おまえちよつと表出ろ、領主の息子だろうがなんだろうが関係あるか、ブツバシティアル！」

「カズマさん止めて！やるなら私がいなくていいところで！私まで一緒に処刑されちゃうから！」

アクアの羽交い締め！カズマは一ターンうごけない！

「ふふ、はははっ！」

おおう、いきなりどうした？大丈夫？ダクネス殴る？

「よし分かった！バルター殿。娘がもし、行き遅れた時はもらってやってはくれないか」

中世くらいならもう行き遅れの部類に入りそうなんです。

中世は12歳ぐらいで結婚したりするんですが。この世界の文化はどうなってるんだっけ？

「い、いえ…私それは、勿論構いませんが、しかし…」

「そしてカズマ君」

「ほっ!?へい、な、何でしょうか？」

ほっ!? って、ほっ!? って! なんだその驚き方は、もつと普通の驚き方をしろよ。

「娘をよろしく頼むよ。コレがバカなことをしてかきさない様、見張つてくれ。たのむ」

だとよ、信用されてるじゃないか。喜べよ。

私は頼まれてないから知らぬ。

「それと……店主さん、うちの執事に変なものを売るのはやめていただきたい」

「彼が望んだから売つただけだよ。望まなくなつたならやめるよ」

安定の店主。彼はこれからも変な物を買つてくるでしょう。主に転生者のトラウマとか。赤石とか。

この部屋にも矢とか、星マークが入つたオレンジの玉とか黄金の桃が置いてあるしな。

くくく

あの後には特に何事もなく、今は帰宅している。

決して店主がドラゴ○ポ○ル全部あげたとか、唯我独尊の数珠をあげたとかはない。

決してない。ないつたらない。

おつといつの間にか屋敷についていたようだ。

考え事をし過ぎて周りが見えなくなるな、最近。

「うっ………！ぐずっ………！あ、あんまりよおおお！めぐみんつてば、あんまりよおおおおっ！」

「いい加減に泣き止んでください！そろそろカズマ達が帰って来る頃です、こんなタイミングで帰ってこられた日には、どう見ても私が悪者に……あっ」

カズマ少年が無言でドアを閉める。

また何かあったのか……。退屈はしないが出来事が多過ぎるだろう……。

「ちよっ！見なかったことにしないでください！ちゃんと説明しますから！」

「説明を聞けばいいのか？」

「そうです！説明を聞いてください！」

「だが断る」

「へっ!？」

「そんなわけだからじゃあな」

「そんなわけって何ですか！ていうか大変なんですよ！例の検察官が！今度こそカズマを逮捕するとか言ってたんですよ！」

「なに？」

一難去つてまた一難。

カズマ少年に安息は来るのか!? 次回をお楽しみに!

## 2 2 話

「例の検察官が！今度こそカズマを逮捕するって言ってたんですよ！」

「なに？」

ダクネスの時間稼ぎが意味なくなつたな。

何をやらかした？それとも魔王軍がカズマ少年はこちら側だ！とでもいったのか？

後者はありえないから前者だな。何をしたんだ？

サツサと白状しろよ、白状したならば楽になれる。

「いやなんもしてねえよ！」

だとしたら何故逮捕を踏み切る？どうせセクハラでもしたんだろう。

「してないって！」

罪を認めたくない気持ちはわからない、魔王軍幹部罪は違うがセクハラとかは自らが犯したのだから……。

「違うってんだろ揉むぞこの野郎！」

本気で身に覚えがないのか、ならすまない……ありもしないことを疑つてすまない

い……。

などというつもりはない！

「キャラどうなつてんだよちくしようめえ！」

ブレつブレですが？ 私に定まったキャラなどない！すべては私作者によつて決まるのだ  
！この後の展開も、カズマ少年の運命も！

「もうどうにでもなれ……」

「サトウカズマ！サトウカズマはいるかああああ！」

おう、検察官殿が到着されたようだぞ、歓迎して差し上げる。日本人形でな！

「要件は何でしょうか検察官殿、こちらは余り暇ではないのです。簡潔に言うならとつ  
とと言えやこのアマア！です」

「なつ…… まあいい、それよりもだ！貴様！ダンジョンに何をした！街の近くのキール  
のダンジョン！あそこで謎のモンスターが大量に湧き出しているそうだ！」

へえー、で、それが？

とうかキールのダンジョンつてどこだよ、聞いたことないが？

それは私の情報が少ないだけか？それと顔真つ赤だな、ポスト化？

「謎のモンスター？たぶんそれ、俺達と関係ないぞ？確かに一回潜ったけどさ、何でもか

んでも俺たちのせいにはしないでくれ。俺達が全部やつてるわけじゃないんだから」

ええー？ほんとにござるかあ？

結構アクアやらめぐみんが原因でこの街の事件は起こっている気がするが。

お前らだよ、うんうん頷いてるお前ら。

「そうはいっても、最後にあのダンジョンへ潜ったのはあなた方だという話なのですが。今までの例から言って、あなた達以外がやったとはとても考えられないのですが……ところでその妙に怖い人形を大量に抱えた女性は誰でしょうか」

信用ないね、インガオホー。

ハハッ！怖いかそうかそうか、ぶつちやけ私も怖い。

「そんな理不尽なこと言われてもなあ、今回は本当に心当たりがない。だよな？な？お前ら、今回こそは大丈夫だよな？」

フラグが立ちましたー。十分以内に回収しなさい。

コクコク頷いてるからね、フラグ製造メーカー三人組の領きだよ。これは立つ以外ないでしょう。

「しかし、そうなると困りましたね……。てつきりあなた達がまた何かやらかしたかと思っていたもので。となると、誰かを雇って調査をしなくてはならないのですが……」

セナは チラチラこちらを見ている 雇われますか？



Yes or はい

「おやおやあー？ひよーつとして檢察官殿は、疑いを掛けた相手に調査の協力を持ち掛けたりなどはしませんよなあ？なあにせ我々は、自らの疑いを晴らすために忙しい身です氏ねえええ？」

うつき、なにこれうつき！さすがはカズマ少年だ！何かを言おうとしていたためぐみんを抑え、こんなムカツク事を言えるなど！

「…もちろん、そんなことなど思っておりませんか？ですが、もし気がかわった場合は協力をお願いいたします」

そういつて屋敷から出ていく。よし、私の周りにいるからくり日本人形の諸君、出て行った女性を追いかけるのだ。もちろん、気づかれないようにな。

…送った私が言うのもなんだが、日本人形が一行で行進していく様は怖いな。

「…おい、あれ大丈夫だろうな？近所の人とか見かけた人失神しないよな？」

…大丈夫だろう、私のイヤーが悲鳴を聞いてしまったが大丈夫だ。茶髪で店経営してて商才が無くて貧乏で魔法使いで巨乳なりッチーのような声だったから大丈夫だ。

「全然大丈夫じゃないのは分かった。とりあえず今度ウイズに謝ってこい。嫌なら拘束してダストに差し出すからな」

今日も鬼畜ですな。謝るよ？謝るからその縄とか鎖とか仕舞ってくれ。後ろの狂性

墮―が興奮してるから。

あの、ほんとに仕舞ってくださいお願いします。あ、涙出てきた。

「…… 普段男勝りだったり、強気なキャラの涙目って、良いよな。じゆるり」

私はそんなキャラではありません。繰り返します。私はそんなキャラではありません。

「んんっ！…… そんなうらやま s じゃない、セナが言っていた謎のモンスターについてだが…… 皆何か知っているか？」

「少なくとも俺は知らん。というか、皆知らんと思うぞ。お前の事で忙しかったんだから」

「そ、そうか。う、うむ。それはすまなかったな」

「良いのよ良いのよ！ だってパーティーじゃない！ 助け合った方がいいでしょ？」

珍しく良いことを言ったな、アクア。普段からそんな風にしていればいいものを。

「でも…… なんであのダンジョンから出てきたのかしら。私の魔法陣で魔の者は入れないはずなのに」

「あ？ てめえ今なんつった？」

「え？ だからあのダンジョンには私の魔法陣があるから邪悪な存在は入れないって……」

「やっぱりお前かこの駄女神がアアアアッ!!」

「なあんでよおおおおお!!今回は免罪よおおおおお!」

フラグ回収乙。やっぱり原因はこのパーティーにあった。

私は冒険者じゃないしまず人間じゃないのでセーフ。ペット枠。

一回しか問題起こしてないしな!

〃〃〃

雪で歩きにくい道をカズマ少年達は踏みしめてダンジョンに向かっている。

先頭をカズマ少年、その後ろにアクア、めぐみん、ダクネスの順で続いている。

私は魔力切れで擬人化が解けたのでカズマ少年の肩にいる。

道中は特に何もなく、すぐにダンジョンの前に到着した。

で、例のモンスターを見たのだが……。うん、仮面の憑いた人形が二足歩行で歩いている。そしてなぜか日本人形と戦闘している。

あるえ?私そんな命令出してないぞ?追跡だけだぞ?誰も戦闘しろなんて言っていないぞ。というか追跡任務はどうした。しかもキャハハとか笑ってるし。

「サトウさん……。い。ん。ん。な。と。こ。ろ。で。ど。う。し。た。ん。で。す。?。も。し。や、。モ。ン。ス。タ。ー。の。調。査。に。協。力。し。て。く。れ。る。気。に。な。っ。た。の。で。す。か。?」

お？おお、私達の方が速かったのか。ところでそのお札は何だ？

「よくよく考えたら、謎のモンスターが発生しているというのは俺達にとつても他人事じゃないと気付きましたね。それに、モンスターから街の人を守るのは冒険者の義務ですからね」

「これほどまでに、この場に嘘を見抜く魔道具があればと思ったことはありませんよ……でも、そうですか。ご協力に素直に感謝いたします」

そういつて深々と頭を下げる。

そしてカズマ少年が苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「あの、ところで、モンスターの種類が増えているのですが。報告にあったのは仮面をつけた人形のようなモンスターで、あのような髪が長い不気味な人形は報告にありません。何か知りませんか？」

「あーつとですね。あれはモンスターの戦力を測るために我々が放った使い魔のような物です。貴方達に危害は与えないので安心して頂きたい」

「そ、そうですか。どちらかといえばあの人形の方がモンスターに見えるのですか……」

まあホバー移動してる上に笑い声あげて髪が不自然に蠢いてるしねえ。

パツと見あつちが完全にモンスターだな。どう考えてもホラーゲームとかに出てく

る奴だよ。夜廻りとか。

「あつサトウさん、ダンジョンはいられるのでしたらこれをどうぞ。モンスターが発生している原因はまだつかめていないのですが、何者かがモンスターを召喚しているという線が一番濃厚です。もしそうならば、召喚者を倒し、召喚の魔法陣にこれを貼ってください」

そういういながら手に持っていた奇怪な札をカズマ少年に渡す

「……これは？」

「強力な封印が込められた札です。それを貼り付ければ、どんなに強力な魔法陣でも即座に使えなくなるでしょう。モンスター召喚の魔法陣の中には、術者倒してもモンスターを呼び続けるがありますので、ぜひこれを持って行ってください。お願いします。……ダンジョンは壊さないにしてくださいね？」

「い、嫌だなあ。そんな事考えてもないし、や、やりませんよ？」

なら何故どもるのか。冷や汗だらだらし目が泳ぎまくってるしで怪しさしかないぞ。

「あの人形は動いているモノに取り付き、自爆するという習性を持っています。なので、気を付けてください」

「ほう？自爆？ならば私が出よう。安心してくれ、必ず帰って来よう」

しれっとフラグ立ててますね？ダクネスさん？それアカンフラグですよ？

いやまあダクネスなら自爆されても耐えそうだが。

ダクネス選手！躊躇いもせず突っ込んでいきました！人形が次々と貼りついていきますが気にもしません！

一体が爆発してそれから連鎖爆発していきますがダクネス選手には効いてすらいません！寧ろ気持ちよさそうにしています！

「フハハハ！この程度か！者ども！私の後についてこい！露払いは私が引き受けよう！」

なんとも男前なことを言ってくれてますね。

よし、じゃあ私はここで待って居よう。中じや私は活動できないからな。

「そうか。じゃつ、行つてくるよ」

逝つてらっしゃい。後ろに日本人形を追従させとくよ。

私は本来のサイズで昼寝してるから。

「では皆さん！武運を！」

検察官殿、いきなり大きい声を出さないでいただきたい。

では、おやすみ。

## 23話

「~~~~~！~~~~ハハハハ！フハハハハハハ！」

……騒がしい、何があった？寝ている間に何があったというのだ？

あれか？山賊が攻めてきて冒険者が最高にハイになったのか？

ともかく、目視しない事には始まらない。

目を開け辺りを見渡してみると、変な仮面をつけて笑いながら地面に片膝をつけたダクネスがいた。

何だあれは？遂に頭が逝ってしまったのか？それとも反抗期と紅魔族中二病に同時に掛かってしまったのか？

どちらにせよ直さないといけないな。斜め四十五度から叩いたら直るだろうか？

「おいゴルウアア！ダクネスにいきなり魔法ぶちかますな！心臓に悪いだろ！」

どうやら片膝をつけてるのはアクアが魔法をぶちかましたからのようだ。

でもアクアの魔法は補助だったりアンデッドを浄化したりする魔法だった気がするが？

「安心なさい！今の魔法は人間には害はないわ！なんか邪悪な気配突っ込んできたから

「何となくで撃ち込んでみたんだけど……」

「邪悪？ダクネスは邪悪ではないからあの仮面が呪われてるなりなんなりしてるのだから。ろっ。」

個人的にあの仮面のデザインは好きなのでもし残せる場合は譲って貰おう。

「そうなのか……ってそういつてる場合じゃねえ！おいアクア！ダクネスは今、魔王軍幹部に体に乗っ取られかけている！相手の正体は悪魔だそうだ！お前の得意分野の相手だろ！」

「ま、魔王軍幹部?!」

セナさんや、大声出さないでくれやしませんかね。いや気持ちはわかるけどさ。

ところでその魔王軍幹部は何処に？まさかあの仮面か？

「そう！そのまさかよ！我が名はバニル！地獄の公爵にして魔王軍幹部が一人。大悪魔、バニルである！」

……その大悪魔様は何故足元の石ころを蹴飛ばしたりしているのですかねえ？

口だけ？口だけ乗っ取ったの？それ意味なくね？

「フハハ！聞かれたならば答えねばなるまい！ただ名乗りを上げるために一旦口だけを優先的に乗っ取っただけよ！」

あ、そう。それで？



「いや、何も無いが？」

「……なんだコイツ。」

「何だとは失礼だな人の魂を持つ獣よ、もう少し礼儀を知ったらどうだ？」

悪魔に向ける礼儀はねえ！天使に向ける礼儀もねえ！一神教に向ける礼儀もねえ！

「……ふむ、その体になった貴様に欲情していた小僧はなかなかいい悪感情を出してくれたのだがな……」

生憎ともう一人愉悦部がいるのでそのような挑発は効きませぬ。というかカズマ少年エ……。

「よ、欲情なんてしてねえし!?ちよーつと視線が行っちゃっただけだし!」

カズマ少年が叫ぶ。が、周りからは冷たい視線しか来ない。だろうな。

「てか馬鹿やってる場合じゃないぞ!さっさとムッコロしてダクネスを解放しないと!」

「そうね!あのとつても臭い悪魔を滅却しないと!悪魔滅ぶべし!イヤー!」

悪魔って臭いのか。ミラボレアスとかも臭いのだろうか？

「フハハハハ!やれるものならやってみるがいい!簡単に倒せるとは思わぬようにな!」

「いいでしょう!いいでしょう!その言葉、忘れないでくださいね!」

「おい待てめぐみん！ 当たる確率が低いうえにダクネスが犠牲になるからやめろ！」  
「当たる確率は確かに低いだろうな。詠唱中に攻撃してくるだろうし。ダクネス？ 無視安定。」

実際食らっても効かないだろう。むしろ回復しそうだ。

「いいえッ！ もう限界ですッ！ 放ちッ！ やめろつってんだろこのバカ！」 んんー！  
めぐみんの ばくれつまほう！ しかし かずましようねんにとりおさえられてしまった！ ばにるにとどかない！

「フハハ！ 吾輩を前に仲間割れか？ よかろう。纏めて倒してくれる！」

「そんな事はさせねえよ！」

背後に控えていた冒険者達空気がが突っ込んでいく……が。

「フンッ！」 「トウ！」

「ハッ！」 「トウ！」

「フハッ！」 「ハヤー！」

「フハハ！」 「モウヤメルンダ！」

アスランでもしているのか、あっけなく瞬殺された。

まるでハゲの髪のように、無双ゲーのモブのように、ハンターの周りを鬱陶しく飛んでいるランゴスタのように、一航戦の口の中に消えていく食べ物のように、SDXの



好をした店主が！

「本屋ほんやの店主てんしゆ ??? イズ ヒア！」

おや、名前のところにノイズが掛かって全く聞こえなかったな。まあいい。

「ぬ?!いきなり何だ!？」

「何でもないとも。ただユーの命を貰いに来ただけさ」

「フハハ!そう来るか!よかろう。かかってくるがいい」

「グッド!そこなくっちゃ…では我が愛刀 ピロウトーク の調べを

—— 思う存分 聴かせて あげようか! ——

… コピーしたのか、ピロウトーク。あれ地味にカッコいいけどさ。

そもそも何しに来たし。賞金首狩りにでも転職したのか?店主が金に困るわけないだろ!偽造できるし。

ということはあるか、暇つぶしか。暇つぶしに魔王軍幹部の首を取りに来る本屋ってなんだろう。

「レッツ ロック ベイビー！」

言ってくれました、例のセリフ。とことんノリノリだな。そんなでもって突撃していく。

「フハハハ！」

「フフフ」

なにわろてんねん。展開が意味不明だよ、どうにかしてるよ。頭が。

「……どっから可笑しくなったんだろうなあ……」

バニルがダンジョンから出てきた所だろうよ、カズマ少年。

諦めるのだ、理不尽は対抗出来ないからこそ理不尽なんだ。一般人が逸般人に勝てる訳がないのだ。カズマ少年もそこそこ逸般人に近いと思う。鬼畜度が。

とゆうかほんとどうしようか、そこでライトセーバーモードキと直剣でせりあつてる奴ら。

そもそもどうしてここに来たんだっけ？……まあいいや。

「もう俺達いらなくね？帰ってもいいよな。魔法陣も消したし、魔王軍幹部もどうにかなりそうだし」

カズマ少年が目を鮮度の低い魚のようにしながらつぶやいた。

簡単に言えば目が死んでる。

「そうですね、爆裂魔法を撃つても何故か弾かれそうな予感がしますし、完全に要らない子です。私達」

めぐみんもまた、目を腐らせながらそう言った。

「何言ってるのよ！ダクネスがクソの中のクソである悪魔に憑りつかれているのよ!? 仲間の私達が助けてあげなきゃ！」

「…： そう言われてもなあ、クツソ弱い俺にあれの中に参加しろと？めぐみんも爆裂魔法しかできないしアクアだってサポート要員だろ？大悪魔と逸般人の戦闘に入れる奴なんて俺たちのパーティーの中じゃ…」

そこで区切ってこちらを見てくる。こっちみんな。

「…： タمامイツネならいけるか？俺達とは違って強いだろうし…」

野生で生きてきた感を舐めるな、あの戦闘に関わったら少なくとも瀕死になると私の感が言っている。

要約すればやめてくださいしんできません、だ。

「うむむむむ…： あっ。そういうえば人間は殺さないとかどうとか言ってたような気がするな。それを利用すれば倒せるか？」

人間は殺さない！人間以外は殺す！私と自称神のアクアは殺される。

神は言っている——ここで死ぬ定めではないと。。。

というわけでカズマ少年とめぐみん、頼んだ。私では無理なのでな。

「ええ。。。どうしろってんだよ。いつそダメもとで爆裂魔法をぶち込んで見るか？」

「撃ち込むならあの魔道具を持つている人には退いて貰いませんとね。巻き込んでしまします」

「よし、それでいこう。。。おーい！ライトセーバー持つてる人！爆裂魔法撃ち込むから退いてくれ！」

その声に反応して、店主が一瞬で姿を消す。木の葉一枚を残して。

「フハ!? 何処へ行った!? ツといかん。爆裂魔法はさすがの吾輩でもまずい、撤退せねばっ！」

「逃がさないわ! 『セイクリッド・エクソシズム』! これでも食らってなさい!」  
アクアの魔法を食らってバニルはよろける。

「いいところを貰っていけるなんて最高です! 行きますよ! 『エクスペロージョ  
ン』 ツツ!!」

「クツしまった! ぬわー!」

爆裂魔法に包まれ、後にはクレーターと、ヤムチャしやがって。。。なポーズのダクネ

スが残った。

くくく

### 大体一週間後

バニルを倒したことでカズマ少年は表彰され、嫌疑は晴れたらしい。

今頃ギルドはお祭り騒ぎだろう。凄く嫌な予感がして私は行かなかったがな！

後は、コスプレした店主の事がばれてなくて、謎の賞金狩りとして噂されてるとかなんとか。

そうそう、ウイズの店と店長の万屋が手を組むとかなんとか。

ウイズの店に新しく入った店員の提案だとか。

あと物凄く店長とその店員は気が合うそうだ。この作品は愉悦れる、この作品は愉悦れないそんなことを話しているそうだ。そのうち香辛料くさい目が死んだ神父のようなラーメン屋が追加されそうなメンバーだな。

話が逸れたが、その店員は大柄で、変な仮面を付けていて、一人称が吾輩だそうだ。

特定余裕過ぎやしませんかねえ。仮面と吾輩で特定するの容易すぎるだろ。何でしれつと復活してるんだよ。



そら愉悦仲間にもなるわな！人間の悪感情が食べ物ですもんねえ！  
ふう… もういいや、寝よ。（☒ω☒）スヤア

## 24話

カズマ少年がギルド＋ウイズの店から帰って来て、すぐに行ったことは何かの設計図を作る事だった。

テーブルの下に熱を発する石を取り付け、その上に布を被せ最後に板を置くというものだ。

どう考えてもこたつですありますがとうございしました。日本人としてこたつを欲しがることはわかる。だが春だぞ？

だんだん暖かくなつていく花粉症達の天敵の季節。

そんな季節でなぜこたつを作ろうと思った。面倒臭がりのカズマ少年を以つても作ろうと思わざるしかないほど炬燵は中毒性があるのだろうか。いやあるな。

そのこたつをスキルを駆使して約三十分ぐらいで作り上げ、速攻でもぐりこんだカズマ少年を見ればわかる。そもそも店長に譲つて貰うか売つてもらうとかすればいいのではないのだろうか？

あの店長の事だし普通に売つてそうなんだが。

「ああ、こたつは最高だ。このクソ寒い異世界に舞い降りた神様だ。カズマ少年が顔すら出さずにこたつの中で眩く。」

何を言っているか私には理解できないな。舞い降りたじゃなくて舞い降りさせたの間違いだろう。

というかダクネスとめぐみんが養豚場の豚を見る目をしていることに気づけ。

ああいやこたつに潜ってるから見えないのか。

「アクア、カズマ、そろそろクエストに行かないか？もう春だ。それに他の冒険者達も活動を始めるだろうしな」

ダクネスが素晴らしいながらこたつむりと化したカズマ少年に近づいていく。が変わらずその目は養豚場のらんらんを見る目だ。

「嫌よ、だってまだ寒いじゃない。それにまだお金も残ってるから働かなくても大丈夫よ」

「ああそうだな。金も残ってるし働かない方が楽でいい」

アクアが寒いという理由で却下し、こたつから顔だけ出したカズマ少年がそれに乗っかる。

「……ハア」

「このぶつころりー共は……」

「おいちよつと待て、ぶっころりーって何だよブロッコリーか何か？それとも紅魔族に伝わる諺か？」

紅魔族の人名だと思うが。センスの逝かれた部族だ、そんな名前をつけていてもおかしくはない。

現にそこにイカれた名前を持った紅魔族がいるじゃないか。

「タマミツネ？今何を考えました？当ててあげましょうか？」

めぐみんが世紀末の世界の主人公みたいな表情になりながら問い詰めてくる。ヒエツ。

何も考えていませんよ？ええ、何も考えていませんとも。

「ぶっころりーが何かは今はどうでもいい。クエストなんかダクネスとめぐみんの二人で行けばいいだろ？わざわざ最弱の俺が行く必要ないしな。何よりメンドイ！寒い！やってられるか！俺はこたつに籠るぞ！」

そんなコナンで殺害されるキャラが言っただけでそんな事言わなくても…。

とうかカズマ少年のレベルいくつよ？こん中で一番低いんじゃない？私はレベルなんてないし。

「そうか。なら仕方がない」

「おお、わかってくら「無理やり引きずり出すだけだあ」わかってねえ!」

ダクネスがズンズンとか擬音が出そうな歩き方でこたつに近寄り、こたつの天板を投げ飛ばす。

「さあ、破壊されたく無くば出てこい」

そう脅迫し、手を差し出す。

「いやあああ！俺の！俺の！俺のユートピアが！理想郷が！この野郎！『フリーズ』！」

「私は野郎じゃ．．． ああっ!？」

差し出した手全体に霜が付き、ダクネスが悶えながら絨毯の上を転がる。

「フハハ、神々の遺物であるこたつを破壊するからそうなるんだ！」

神々の遺物で．．． いや確かに日本の色々と残念な神様達なら作ってたりしそうだけ

どもー！

「ちよつと！私達はそんなの作ってないわよ！暖かそうだなとか思ったりすることもあるけどそんな落ちぶれてはいないわ！分かった？分かったなら訂正して頂戴！」

そこまで否定するとは余程このコタツムリと化したカズマ少年と一緒にされたくないんだな。

アクアは一回こたつ入ったら墮落しそうな性格してるし。

「はいはい、そんなこと言ってほんとははいりた．．．！」

どうした？いきなり黙って？トイレにでも行きたくなかったか？

「マズイ！とんでもなくトイレに行きたくなってきた。おいダクネス、休戦だ。休戦しよう」

「そうか。ならとつととそのこたつとやらから出てトイレに行け」

「そこで提案なんだが、ダクネスとタママミツネがこたつをトイレの前に運んでくれないか？」

「断る。私を巻き込むんじゃない。関係なかっただろう。」

「……」

ダクネスがめぐみんと顔を合わせこたつに近寄っていき、その端を持ちあげ、窓の近くに運ぶ。

「あのーダクネスさん？めぐみん？運んでくれるのはありがたいけどそつちはトイレじゃ……」

「アクア！窓を開けろ！こたつごと外に捨ててくれる！」

「イエスマム！」

ダクネスのマイ例を聞いたアクアが無駄に高いステータスを使い瞬時に窓を開ける。

「やめろおおお！待て！危ない！ほんとに危ないから！冗談だよな？冗談だろ？」

「行くぞめぐみん！力を籠めろ！」

「はい！」

「待つて！待つて！お願い！待つて！」

カズマ少年のお願い虚しくブンブンと勢いがつけられていき、投げられる直前といったところで。

「サトウさん！サトウさんはいらしゃ… キヤアアア!?」

玄関に置いておいた例の絵画トラップに引つかかった憐れな犠<sup>セ</sup>牲<sup>ナ</sup>者の声が響いた。

くくく

「うううう…」

何とかトラップに耐えられたのか？ここまで来るとは。貞子みたいになつてるけど。

「おおう… 鬼畜の称号はタマミツネに渡したほうがいいんじゃないかなあ…」

「安心なさい。普段過<sup>ゴ</sup>してる分にはタマミツネの方が無害だから」

「おい、それは俺が無害じゃないって事か？」

何かカズマ少年とアクアが漫才してる。

「ハッ！サ、サトウさん！大変なんですリザードランナーが大量発生しているんです！」

リザードランナー？何だそれは？

「ああそう。で、何で俺んとこ来たの？」

「いえ、ですからリザードランナーが大量発生致しましたので貴方方にも駆除を手伝って頂こうと。」

「そんなのいらな「よし行こう！丁度いい機会だ！」ちよっおいダクネス、俺の言葉に被せるなよ」

「おお！ありがとうございます！」

「いやだから「行くぞカズマ！引きこもりは卒業だ！」いだだだだ!?分かった！分かったから引きずるな！」

「漫才しないで行きますよー」

いやめぐみんなも杖持つて来いよ。人の事言えないと思うぞ。それともあれか？爆裂魔法を放つまでも無いのか？

「ったく乱暴なこつて。悪いけど少し遅れるぞ。鍛冶屋に依頼した装備を取りに行くから」

「大丈夫です。問題ありません。：。：ところで、玄関を抜けるの手伝ってくれませんか？」

「さーてちゃんとしてきてるかなあ？」

「無視しないでいただけませんか!?!」



くくく

「ここだここ。ちーす！おつちやーん、例の奴出来たー？」

そう言いながら入ってゆくは何かニヤニヤしてるカズマ少年。

そのニヤニヤは例えるなら男のロマンを見ている少年の顔といったところ。

「らっしやい……、なんやお前か。そうそう教えてもらったKATANAとかいった剣だが、一応できたぞ」

鍛冶屋の店主は鞘に入った刀っぽい剣を持ってきてカズマ少年の前に置いた。

「カズマカズマ、何ですか？それは？店主はKATANAとか呼んでましたが」

「フッフ、めぐみんこれはな、俺の故郷に伝わる聖剣や魔剣、名剣の形状を真似て作った物だ。鋭さに優れ、何でも切り捨てるんだ。まあ打撃に弱くて鏝迫り合いとかはできないんだけどな」

「ほおー、なかなか紅魔族の心を刺激するではありませんか。カズマ、これください」

「駄目、俺が頼んで作ってもらったんだから。お前も依頼すればいいじゃないか」

「そのKATANAに銘をつけてやりな。この魔法の札に銘を書いて剣の柄に張ればい  
い」

渡されたのは白い紙。

「おお！銘、銘かあ。何がいいかな？村正とかはかぶるしなあ。んー」

鬼畜刀でいいんじゃないか？読みはきちくがたなで。あと何でこつちを見る？

「暁ノ空とかもいいかもしれない…よし！暁ノ空に決定だ！…あれ、紙はどこ行つた？」

周りを見渡すと紙を持って何かを書き込んでいるめぐみんの姿が。

「中々決まらないみたいなので私が書いてあげました。ちゅんちゅん丸です」

「おいしいいい!?何してくれてんの!?何勝手に書いてんだ!？」

人の物に勝手に名前を付けるか？普通かかないかかないだろ？頼まれても無いのに。

「いやいやあり得ねえよその名前は！おいオヤジ！もう一枚くれ！」

「させません！そいやー！」

べたりと柄にちゅんちゅん丸とかふざけた名前が書かれた紙が押し付けられる。

「あ———!!!あああああ……」

「お、おいどうした？何があつた？」

鍛冶屋の店主が慌てているが問題ない。クツソダサイ名前を刀に押し付けられて凹んでいるだけだ。

「もうやる気が失せた…リザードランナーなんて知るか……」

「ほんとに大丈夫か…… ほれ、おめえさんが持ってきた鱗と毛で作った胸当てと脛当てと籠手だ。そこらの金属よりも硬いぞその鱗。何から採ってきたんだ？」

差し出されたのはどう見てもミツネ装備の腕と足、それに鱗で覆われた胸当て。

私の抜け落ちた鱗や毛を使ったんだろうな。私は上位には絶対なっているからそこそこの防御力はあるだろう。

「おお、これはカッコいい…… 心が救われるようだ……」

そこまですては無いだろうに。

「中々いいデザインですね。私が名前つけてあげましょう」

「ああー嬢ちゃん、残念ながら防具に名前はつけられねえんだ。すまん」

「カズマさん完全復活！おやじ！ありがとな！じゃっ！一狩り行ってくる！ひゃっほう！」

…… 出てった。アクアとダクネスに合流するのを忘れてるのか？

あの喜び様じゃ忘れてるんだろうけども。

「ありがとうございます。私はカズマを追いかけますので」

「おう、また来いよ」

たぶん私は来ないと思う。

さて、三人と合流してトカゲ狩りに行こうか。  
走ることしか能のないトカゲだ。楽に終わるだろう。

## 25話

鍛冶屋で武器防具を新調してはしゃいで先に行ってしまったカズマ少年を追いかけて街の外壁付近までできたのだが、そのカズマ少年が止まるんじゃねえぞ……とか言いそうなポーズで倒れている光景を目撃してしまった。

どう反応すればいいんだろうか。死ん……でる……とか何やってんだよ団長オ！とかキボウノハナ……とか言えればいいのだろうか。

とか何があつた。通り魔に襲われでもしたか？

とりあえず近寄らないとな。

「うう……やめろアカア……それ以上賭博しないでくれ……有り金が……有り金が……！」

夢の中でもアカアはカジノに行っているらしい。

そして有り金全部溶かしたようだ。至って平常運転である。

「……何があつたんですか？」

ただカズマ少年がキボウノハナ……しているだけだ。

何故そうなったのかは知らんが。

「やめろオ!：ハッ」

どうやら起きたようだ。話は本人から聞けばいいだろう。

「あれ?俺は確か興奮してカエルに突っ込んだはずじゃ?」

特攻したのか、カエルに。あれは水流プレス一発で沈むし苦戦はしないはずだが。

ハンター達なら石ころか蹴りとかその辺でも倒せるぞ。そのくらの雑魚のはずなんだがなあ。

そもそも討伐しに行くのはトカゲのはずじゃなかったのか?

「でも怪我はないな。新しいこの装備の防御力が高いのか俺の悪運が強いのか。ああ、そういう俺幸運値高かったわ」

アクアが近くにいるせいで帳消しなんだろうな、その幸運値。

なぜあんなにも不幸を呼び寄せるのだろうか。不幸だわ:とか言ってる人の方がまだ運がいいだろう。

「で、置いていったことはどうお思いですか?カズマ」

「あつ:。すまん、興奮して忘れてたわ。でも仕方ないだろ?俺だって男だし、かつこいもん貰ったらすぐ使いたくなっちゃうんだよ」

それは分かる。それがロマン武器だったりすればなお良し。性能はしょぼくても愛でカバーすればいいのだ！

……私は誰に向かつて言っているのだろうか……。

「んじやあ合流したしカエル討伐に行くか！」

「討伐しに行くのはカエルじゃありません！リザードランナーです！間違えないでください！」

カエルは何時でも狩れるだろう。めぐみんの爆裂魔法で誘い出したら私が水流ブレスで薙ぎ払え！すればいいんだし。私がいなければアクアでも食わせとけば時間稼ぎできるだろう。

「あれ？そうだったか？まあいいや。リザードだか何だか知らないがタマミツネがいれば蹂躪できるだろう！待ってろ愛しのこたつ！」

こたつだけは覚えてるのか……何だそのこたつに対する執念は？

あと私にやらせようとするな。カズマ少年のレベルを上げれる機会だからな。手助けはするが直接は殺らん。

「カズマ、ダクネス達と合流することを忘れてませんか？いつも通り四人と一匹で行く予定じゃないですか」

「あれ？そうだったか？うーんどうも記憶が……」

「そう言つて逃げる気じゃありませんよね？逃がしませんよ？」

「いやそんなことは欠片も考えてなかつたぞ」

どうでもいいからはよ、合流はよ。いつまでもここでたむろしてても時間の無駄だろう。

「よし行くか。合流場所はどこだっけ？」

「リザードランナーが蔓延つている平原です」

実際のどのくらいいるんだろうな。黒光りする羽をもつた虫くらい？

くくく

ダクネス達と合流し、リザードランナーの群れの一つをターゲットとして定めた。

群れの大きさはせいぜいドスジャギイのいない中くらいのジャギイの群れくらいだ。

あれくらいの数なら脅威でも何でもない。

まあほぼ同じ大きさの群れが三つ四つあるようだし、大量発生といつてもいいくらいにはいるんじゃないだろうか。

まあよく大量発生しては周りをぶんぶん飛び回るランゴスタやブナハブラに比べれ



ばまだマシンだ。

それに他の冒険者達も戦ってるみたいだし。

「いいか？ 作戦はこうだ。まず俺が弓でトカゲ共の進路をこつちに変える。そしたらタマミツネが泡で転ばせる。纏まって転んだらめぐみんの爆裂魔法で爆殺する。バラバラに転んだら各自で仕留める。もし泡を避けたらダクネスが『デコイ』を使って囮になってダクネスに群がったところをダクネスごと爆破する。以上だ、分かったか？」

「ああ」「はい」

「よし、皆位置につけ。始めるぞ」

木の上を上り、刀を腰に差し弓を構えたカズマ少年が皆に命令する。

「ああ、分かった。んんッこれ程私に得しかないクエストがあつただろうか！」

「当たらない大剣を地面に突き刺し、柄頭に両手を重ねて置きながらダクネスが答える。」

ところでダクネスの剣って種類は何なんだ？ クレイモアか？ バスタードソードか？ それともただのロンソ？

「走るだけしか能のないトカゲなんぞ我が爆裂魔法をもって消し飛ばしてくれましよう」

ジョジョ立ちのような謎のポーズをとりながらめぐみんが返事をする。

「ねえねえ、いいこと思い付いちやったわ。やっちゃてもいいわよね？」

「やめろっ！ろくなことにならない気がするからやめろっ！」

アクアがフラグを立てカズマ少年が折ろうとする、が。

「いいや、限界よ！放つね！『フォルスファイア』！」

カズマ少年の阻止も空しくフラグは回収される。

アクアが魔法を唱えるとアクアの手から青白い炎が放たれる。

なぜだかその炎を見ると無性にアクアをタックルでぶつ飛ばしたい衝動に駆られる。

リザードランナー達も炎を見たらしく、進路を変え奇声を上げながらアクア目がけ走りだした。

「あゝあゝあゝあゝあゝ——！おいアクア！どうしてくれるこの状況！早速作戦が狂ったぞ！なんで俺の作戦通りに動かないんだ！？どうして我慢できないんだ！？」

「だって私の出番がないじゃない！わゝたゝしゝたゝつゝてゝかゝつゝやゝくゝしゝたゝいゝのゝよゝ——！？」

「じゃあお得意のゴツドレクイエムでもぶちかましてこい！」

作戦は崩れ去るもの。とりあえず滑液まき散らして泡立てておきますねー。

：リザードランナーエ。一匹残らず泡に掛かつてるよ。マジで走ることしか能のな

い生物だったよ。

モンハン世界でももつとましな生物達しかいないよ。ああでもバゼルギウスとかいうクソを落として場を乱すことしかできない燃えないゴミ未満がいましたねえ……。

「おお、纏まって転んでやがる！ やれめぐみん！ 木端微塵に粉碎してやれ！」

「既に詠唱は終わってます！ 『エクスプロージョン』 ツ！！」

ドツガアアアアアアア！！

なんか音がしよぼい。まあリザードランナー達は欠片も残ってないから別にいいネ

！

「よし、クエスト完了だ。とつとと帰ろう」

いつの間にか私の横にいたカズマ少年がそう言う。

ところでアクアがいないのだが。

「アクア？ アクアならそこで黒焦げになってるだろ？」

ん？…… ああ、本当に黒焦げになってクレーターでびくびくしてる。

ギヤグ補正がなければ即死だった。

神殺しは紅魔族としてはどうなんだろうか。

邪神封印してるとか言ってたしアリなんだろう。多分恐らく。

「報酬はどんくらいでるんだろうなあ。最低でも十万エリスあればいいなあ」

それはどうだろうなあ。まあカエルでも一万エリスぐらいにはなるのだからそこその金額にはなるんじゃないか？

「皆帰りの準備は整ったか？忘れ物はないな？ないならよし！帰るぞ！」

くく

街につき、カズマ少年とめぐみんが冒険者ギルドに報告に向かい、

私はダクネスと一緒に黒焦げで白目をむき、口から黒煙を出し始めたアクアを引きずって屋敷に帰った。

アクアを水風呂にぶち込み、自室に戻ってグデエツとだらけている。

疲れたわけではないが偶にだらけたくなる。ムービーでも寝てたし別にいいよネ！

この後に面倒ごとはないだろうし、またゆっくりできるな。

まあカズマ少年をこたつから発掘する作業があったりしそうだが。

む、窓からウキウキで手をつなぎながらスキップしているカズマ少年とめぐみんの姿が見える。

何をしているんだ？…人の頭くらいの大きさの袋、それが二つ。大分稼げたよう

だ。

それが群れ一個分ならば二つ潰しただけで数ヶ月は何もせず生きていけるんじゃないかろうか。

嗚呼、今でもそこそこの貯蓄があるのに更に増えたらカズマ少年が本当に働かなくなるな。

屁理屈と口撃で皆が撃破されていく姿が目には浮かぶ。

でも店主ならカウンターで致命傷いれそうだ。

「ただいま。これでもう働かなくてもいいぜグエへへ」

うん、もうだめだな。堂々と働かない宣言してやがる。これからも家でゴロゴロしていることでしょう。

「カズマカズマ、活躍したのでスキルポイントが手に入る食材を買ってください。爆裂魔法を強化するのよ」

「ああ、分かった。お前のおかげで一掃できたからな。後でタマミツネにもなんかやらなきゃな」

「ダクネスとアクアはいいでしょう。ダクネスは何もしていませんし、アクアは結果こそどうにかかりましたが作戦が崩れましたし」

「そうだな。アクアにや何もやらん。活躍したいなら場を弁えてくれよな。ダクネスは

うん、出番潰れちまったしシユワシユワ五杯ぐらい奢ってやるか」

私は何もいらなのだが。アクアは自業自得だが少しかわいそうだな。飲み物ぐらい奢ってやろうかな。

「む、カズマか。帰ってきてたのか。その上機嫌な顔を見る限り、満足できる額を貰えたようだな？」

「ああ、貯蓄と合わせればしばらく働かなくても過ごせるくらいにはな」

「…そうか。だが、屋敷の中だけでも働け。でないと貯蓄もそのエリスも没収だ」

「おいダクネス！そりゃねえよ！いやだぞ！いやだからな！俺は部屋で一日中ゴロゴロするんだ！それを邪魔するならもう許してくださいと泣き叫ぶ目に合わせてやるぞ！」

「なにそれkws… んんっ！わ、私の決心は固いぞ！そのうらや・キツイ仕置きを受けよう！ギルドで縛られたまま放置されよう！カズマの黒歴史ノートが放送されよう！私の決意は揺らがな！さあ、やるがいい！」

「お前… もうちよつとカツコいいこと言おうぜ…。ああわかったよ！働くよ！働きゃいいんだろ！」

「ああ、分かってくれたか。今日はもうクエストにいったからな、明日から働こう。もちろん監視するからな」

「ああクソ… そういや、アクアはどこ行つたんだ？結構騒いだし聞こえてると思うん

だが」

「ああ、アクアならタマミツネが水風呂に叩き込んだぞ」

自称水の女神だし水に浸かったら回復しないかな、と思っけて入れた。反省も後悔もしていない。

……むう、ねむくなつてきてしまった。まあいい。夕食くらいにはダクネスあたりが起こしてくれるだろう。

昼寝といこうじゃないか。では、おやすみい。